

41793

教科書文庫

4

810

41-1927

200030  
2006

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

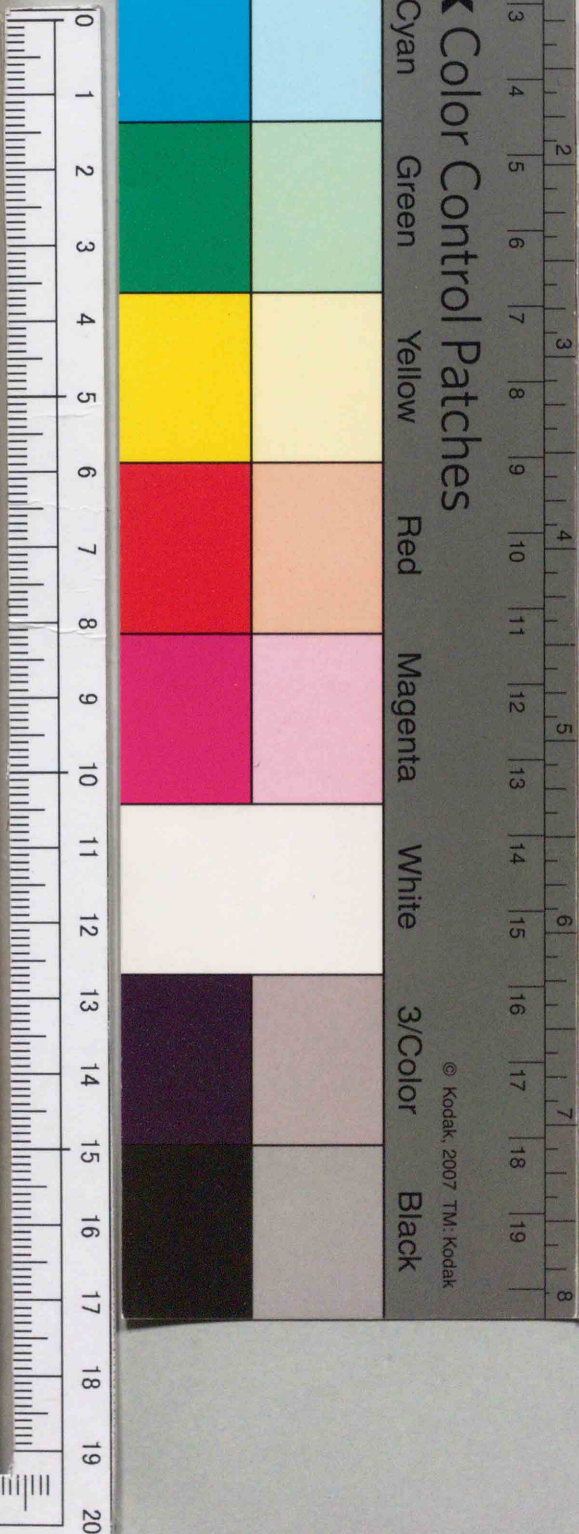


© Kodak, 2007 TM, Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM, Kodak



375.9  
Y019  
資料室

現代國文學行選

吉澤義則編

五

文部省檢定済



日七十二月二十年二和昭  
濟定檢省部文  
用科部國校學中

資 料 室

375.9  
Y019

吉澤象舟編

歷代國文學新選

星野書店藏版







Blank page with faint bleed-through text from the reverse side. The text is illegible but appears to be organized in a table or list format.

Blank page with a mottled, aged appearance and no text.



國文學史年表

(書名の赤字は此巻に在るもの。また括弧を施せるは書名にあらざ)

時代	天皇	年號	紀元	書名	備考
上	文武	元	一三五七	(祝詞) 宣命	神代より次々に出で来れるものにて製作の年代明かならず。此年の御即位の宣命を以て最古とす。
古	和銅	五年	一三七二	古事記	此年正月太安麻呂之を上る。
同	和銅	六年	一三七三	風土記	此年諸國に詔して風土記を編ましめらる。
同	天平寶字	三年	一四一九	萬葉集	雄略天皇より此までの歌を集む。
中	醍醐	五年	一五六五	古今葉	此年四月紀貫之等之を上る。
同	正曆	五年	一六五四	枕草子	此頃清少納言之を作る。
同	寛弘	三年	一七四六	源氏物語	此頃紫式部之を作る。
古	白河	保元	一八二八	(今様歌) 山家集	中古末期より近古前期に至る間最も盛なり。
同	建元	元年	一八五〇	新古今集	此年二月作者西行法師歿す。
同	元久	二年	一八六五	方丈記	此年三月藤原定家等之を上る。
同	建保	元年	一八七三	金槐集	此年十月作者鴨長明歿す。
同	承久	元年	一八七九	東關紀行	此年正月作者源實朝殺さる。
同	仁治	三年	一九〇二	保元物語	此年の八月より十月に至る紀行文なり。
同	建長	三年	一九一五	平治物語	保元・平治・平家の三物語は共にその年代不明なれども此頃までの間に成れるものなるべし。
同	同	同	同	平家物語	年代不明なれども鎌倉初期のものなるべし。
同	同	同	同	宇治拾遺物語	此年十月成る。
同	同	同	同	十訓抄	此年北畠親房之を上る。
同	同	同	同	神皇正統記	此年二月作者吉田兼好歿す。
同	同	同	同	徒然草	著作年代不明なるも延元元年より此年までの記事を載す。
同	同	同	同	吉野拾遺	此年までの間に成る。
同	同	同	同	増鏡	正平二十三年より此年までの間に成る。
同	同	同	同	太平記	此頃足利義滿觀世流祖觀阿彌を同朋となす。
同	同	同	同	(謠曲) 狂言	室町時代より徳川前期に至る頃盛なり。
古	長慶	二年	二〇三六	伊曾保物語	此年成る。
同	元中	九年	二〇五二	御伽婢子	此年成る。
同	天授	二年	二〇一八	奥の細道	此年出版。
同	正平	十三年	二〇一〇	(浮世草子) 浮世草子	此年三月より九月に至る紀行文なり。
同	同	同	同	御伽婢子	此年浮世草子の作者井原西鶴歿す。
同	同	同	同	伊曾保物語	此年蕉風の祖松尾芭蕉歿す。
同	同	同	同	醒醉笑	此年十月新井白石之を作る。
同	同	同	同	樂翰譜	此年貝原益軒(八十一歳)之を作る。
同	同	同	同	淨瑠璃	此年の十一月より十七ヶ月間、國性齋合戦を竹本座に於て興行す。
同	同	同	同	淨瑠璃	此年五月新井白石之を作る。
近	後水尾	寛永	二二八八	醒醉笑	此年成る。
同	後西	萬治	二三一九	御伽婢子	此年成る。
同	靈元	寛文	二三二六	奥の細道	此年出版。
同	東山	元祿	二三四九	(浮世草子) 浮世草子	此年三月より九月に至る紀行文なり。
同	同	元祿	二三五三	御伽婢子	此年浮世草子の作者井原西鶴歿す。
同	同	元祿	二三五四	伊曾保物語	此年蕉風の祖松尾芭蕉歿す。
同	同	元祿	二三六一	樂翰譜	此年十月新井白石之を作る。
同	同	寶永	二三七〇	淨瑠璃	此年貝原益軒(八十一歳)之を作る。
同	同	正徳	二三七五	淨瑠璃	此年の十一月より十七ヶ月間、國性齋合戦を竹本座に於て興行す。
同	同	同	同	淨瑠璃	此年五月新井白石之を作る。



世																		近												古											
孝	同	同	仁	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東	靈	後	後	長	同	同	後	後	正													
百二十二代			百二十代																百十三代	百十二代	百十一代	百十代	九十八代			九十七代	九十六代	百六代													
明			孝																山	元	西	尾	慶	上	村	松	親														
元治元年	天保十年	文政十二年	文政五年	文化八年	同	同	文化三年	享和二年	寛政六年	寛政元年	天明四年	天明三年	天明二年	天明元年	安永五年	明和二年	寶曆八年	同	享保十九年	享保九年	正徳六年	正徳五年	寶永七年	元祿十四年	元祿七年	元祿六年	元祿二年	寛文六年	萬治二年	寛永五年	天正元年	應永	元中九年	天授二年	正平十三年	正平五年	延元四年	建長四年	同		
二五二四	二四九九	二四八九	二四八二	二四七一	同	同	二四六六	二四六二	二四五四	二四四九	二四四四	二四四三	二四四二	二四四一	二四三六	二四二五	二四一八	同	二三九四	二四八四	二三七六	二三七五	二三七〇	二三六一	二三五四	二三五三	二三四九	二三二六	二三一九	二二八八	二〇三三	二〇五二	二〇三六	二〇一八	二〇一〇	一九九九	一九一二	同			
檀園文集	鳩翁道話	花月草紙	(脚本)	琴後集	椿説弓張月	浮世風呂	藤篋冊子	膝栗毛	王勝問	梅園叢書	東遊記	鶉衣記	西遊記	常山紀談	雨月物語	(川柳)	雲萍雜志	駿臺雜話	(狂歌)	(淨瑠璃)	折たく柴の記	(淨瑠璃)	樂訓	藩翰譜	(俳句)	(浮世草子)	奥の細道	御伽婢子	伊曾保物語	醒醉笑	(狂言)	(謠曲)	太平記	増鏡	吉野拾遺	徒然草	神皇正統記	十訓抄	宇治拾遺物語		
此年作者中島廣足歿す。	此年發行。	此年松平定信歿す。	此年並木五瓶歿す。	此年作者村田春海歿す。	此年より五ヶ年間に互りて曲亭馬琴之を作る。	此年より七ヶ年間に互りて式亭三馬之を作る。	此年上田秋成之を刊行す。	此年より十返舎一九之を作り初む。	此年より文化八年に互りて刊行す。	此年三月作者三浦梅園歿す。	此年より作者湯淺常山歿す。	此年四月作者湯淺常山歿す。	此年初めて川柳集柳檀を出版す。	此年九月作者柳澤淇園歿す。	此年八月作者室鳩巢歿す。	此年十一月淨瑠璃作者近松門左衛門歿す。	此年狂歌の祖ともいふべき油煙齋貞柳歿す。	此年八月作者室鳩巢歿す。	此年十一月淨瑠璃作者近松門左衛門歿す。	此年五月新井白石之を作る。	此年十月新井白石之を作る。	此年十一月より十七ヶ月間、國性爺合戦を竹本座に於て興行す。	此年十一月より十七ヶ月間、國性爺合戦を竹本座に於て興行す。	此年十月新井白石之を作る。	此年十一月より九月に至る紀行文なり。	此年浮世草子の作者井原西鶴歿す。	此年蕉風の祖松尾芭蕉歿す。	此年出板。	此年成る。	此年成る。	此年成る。	正平二十三年より此年までの間に成る。	此頃足利義滿觀世流祖觀阿彌を同朋室町時代より徳川前期に至る頃盛なり。此年足利氏亡ぶ。	此年二月作者吉田兼好歿す。	著作年代不明なるも延元元年より此年までの記事を載す。	此年までの間に成る。	此年北畠親房之を上る。	此年十月成る。	年代不明なれども鎌倉初期のものなるべし。		







歴代國文學新選 卷五

目次

玉 勝 間

- 一 新なる説を出すこと……………二
- 二 道にかなはぬ世の中のしわざ……………三
- 三 書讀むことのたとへ……………四
- 四 新にいひ出でたる説はとみに人のうけひかぬこと……………五
- 五 おのが物學びのありしやう……………七
- 六 縣居の大人の御さとし言……………一
- 七 師の説になづまざること……………一三
- 八 わがをしへ子にいましめおくやう……………一六



九 富貴を願はざるをよきことにする論ひ……………一六

一〇 一むきにかたよることの論ひ……………一七

一一 前後と説のかはること……………一九

一二 ふみ寫し物書くこと……………二一

一三 手書くこと……………二二

一四 花のさだめ……………二三

一五 おのれとり分きて人に傳ふべきふしなきこと……………二五

一六 今の人の歌文ひがごと多きこと……………二六

一七 歌も文もよく整ふは難きこと……………二八

一八 物學びの心ばへ……………二九

一九 物學びはその道をよく擇びて入りそむべきこと……………三〇

二〇 静かなる山林を住みよしといふこと……………三一

二一 おのが京の宿りのこと……………三二

一二二 一言一行によりて人のよきあしきを定むること……………三四

一二三 古よりも後の世のまされること……………三四

琴 後 集……………三七—六八

一 琴後集序……………三八

二 清水濱臣の泊泊舎の記……………三九

三 知足庵の記……………四一

四 隨時樓の記……………四二

五 安田躬弦の家の文臺の記……………四四

六 山水のかたかける繪を見る記……………四五

七 八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る記……………四八

八 初雁を聞く記……………四九

九 山里の紅葉を見る記……………五二



一〇 雪をめぐる記……………五五

一一 正月ばかり山里人の許へ……………五八

一二 上田秋成の許へ……………五九

一三 伴蒿蹊におくる書……………六〇

一四 對「月言志」といふことを題にてかけることば……………六一

一五 月花のあはれをことわることば……………六三

一六 祭芳宜園大人墓文……………六五

樞園文集……………六九—八九

一 閑中春雨といふを……………七〇

二 燕を題にて……………七一

三 蚊遣火……………七一

四 夏旅……………七二

五 秋山……………七四

六 山路菊……………七五

七 氷……………七六

八 冬月……………七七

九 山家雪……………七八

一〇 埋火……………七九

一一 夕……………八〇

一二 驛……………八〇

一三 瀧……………八二

一四 山家興……………八三

一五 漁村……………八四

一六 岸頭待舟……………八六

一七 夜學……………八七



一八書といふを題にてかけることば……………八八

花月草紙……………九一—一三五

一序……………九二

二花……………九二

三月……………九四

四天に任すること……………九五

五學問……………九六

六晴雨……………九七

七筆……………九八

八みやび……………九九

九えぞの咄……………一〇二

一〇大和歌……………一〇三

一一雨……………一〇四

一二文……………一〇八

一三那須與市……………一〇九

一四理窟……………一一〇

一五誠……………一一一

一六傍見の説……………一一一

一七詠歌……………一一二

一八子の愛……………一一三

一九人を評すること……………一一三

二〇めづらしき好……………一一四

二一黄金を好むこと……………一一五

二二餘地……………一一六

二三目しひしもの……………一一七



二四	月なき夜半	一一七
二五	人を責むること	一一九
二六	日新	一二九
二七	交友の道	一二〇
二八	三年の薬	一二二
二九	人のいきほひ	一二三
三〇	雨風のこと	一二四
三一	利害	一二五
三二	山人	一二六
三三	人を知ること	一二七
三四	國體	一二八
三五	兩頭のくちなは	一二八
三六	膽をねること	一三〇

三七	瞳	一三一
三八	費	一三一
三九	鷹の羽に棲む蟲	一三三
四〇	人の評	一三四
四一	花月の遊	一三五

藤 簍 册 子 ..... 一三九—一四七

一	十雨言 (其の一)	一四〇
二	十雨言 (其の二)	一四五

浮 世 草 子 ..... 一四九—一六〇

一	つまりての夜市	一五〇
二	今が世の楠の木分限	一五五



三 地獄の釜へさか落し……………一五八

淨 瑠 璃……………一六一—一八八

國姓爺合戦

一 千里が竹……………一六二

二 獅子が城……………一六九

奥の細道……………一八九—二〇〇

一 門出……………一九〇

二 日光……………一九二

三 白河の關……………一九三

四 平泉……………一九四

五 最上川……………一九六

六 象潟……………一九七

七 市振の關……………一九八

八 金澤……………一九九

鶉 衣……………二〇一—二〇八

一 奈良團贊……………二〇二

二 蓼花巷記……………二〇三

三 百蟲譜……………二〇四

俳 句……………二〇九—二二四

川 柳……………二二五—二二七

狂 歌……………二二九—二三三

三 地獄の釜へさか落し……………一五八

淨 瑠 璃……………一六一—一八八

國姓爺合戦

一 千里が竹……………一六二

二 獅子が城……………一六九

奥の細道……………一八九—二〇〇

一 門出……………一九〇

二 日光……………一九二

三 白河の關……………一九三

四 平泉……………一九四

五 最上川……………一九六

六 象潟……………一九七

七 市振の關……………一九八

八 金澤……………一九九

鶉 衣……………二〇一—二〇八

一 奈良團贊……………二〇二

二 蓼花巷記……………二〇三

三 百蟲譜……………二〇四

俳 句……………二〇九—二二四

川 柳……………二二五—二二七

狂 歌……………二二九—二三三



附 録

國學史概説(附擬古文の一瞥)……………

— 11 —

歴代國文學新選 卷五目次終

玉 勝 間

玉勝間十五卷は本居宣長の隨筆である。宣長は伊勢松坂の人、國學の泰斗と仰がれる偉大な學者であつて、その深い蘊蓄と高邁な識見とは多くの書冊になつて残されてゐる。玉勝間は専ら後進の爲に學者の方針と修學の方法を懇示したもので、文章は平易であるが、後進を誘掖扶導する誠意は躍如としてゐる。享和元年(一四六一)歿、年七十二。



## 一 新なる説を出すこと

近き世、學問の道ひらけて、おほかた萬のとりまかなひさとくかしこくなりぬるから、とりぐに新なる説をいだす人おほく、其の説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと世にことなるめづらしき説を出して、人の耳を驚かすこと今の世のならひなり。其の中には、ずるぶんによるしきことも稀にはいでくめれど、大かたいまだしき學者の心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらむ勝たむの心にて、かるくしくまへしりへをもよくも考へ合はせず、思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはいみじき僻事僻事のみなり。

すべて新なる説を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、た

がふ所なく動くまじきにあらざば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後にいまたびよく思へば、なほわるかりけりと我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

## 二 道にかなはぬ世の中のしわざ

道にかなはずとて、世に久しくありならひつることを、俄にやめむとするはわるし。たゞそのそこなひのすぢを省き去りて、あるものはあるにてさしおきて、眞の道を尋ねべきなり。萬のことを強ひて道のままに直し行はむとするは、なかくに眞の道の意にかなはざることあり。萬のことは興るも亡ぶるも、盛なるも衰ふるも、皆神の御心にしあれば、さらに人の力もてえ動かすべきわざにはあらず。眞の道の意を



悟りえたらむ人は、おのづからこの理はよく明らめ知るべきなり。

(二の卷)

### 三 書讀むことのたごへ

須賀直見がいひしは、廣く大きな書を読むは、長き旅路を行くがごとし。おもしろからぬ所も多かるを經行きては、又おもしろく目さむる心地する浦山にもいたるなり。又足強き人は早く、弱きは行くこと遅きも、よく似たり。とぞいひける。をかしたとへなりかし。

(二の卷)

須賀直見  
伊勢國松坂の  
人で、宣長の  
門人。

### 四 新にいひ出でたる説はごみに

人のうけひかぬこと

大かたよのつねにことなる新しき説をおこす時には、よきあしきをいはず、まづ一わたりは世の中の學者に憎まれ譏らるゝものなり。あるは己がもとより據り來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるに捨ててとりあげざる者もあり。あるは心の中にはげにと思ふふしもおほくあるものから、さすがに近き人のことに従はむことのねたくて、よしともあしともいはずで、たゞうけぬ顔して過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵をあなたがちに求め出でて、すべてをいひけたむとかまふる者もあり。

大かた古き説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばお



ほひかくして、わづかに二つ三つの取るべき所のあるを取りたてて、力のかぎり助け用ひむとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つのよきことをもおしけちて、力のかぎりは我も用ひず人にも用ひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。然れども又まれ／＼には、新なる説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改め従ふたぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、新なるよき説を聞きては、かくてこそはといみじくよろこびつゝ、たちまちに従ふたぐひもありかし。

大かた新なる説は、いかによくともすみやかに用ふる人稀なるものなれど、よきは年をへてもおのづからつひには世の人の従ふものにて、あまねく用ひらるれば、その時にいたりては、はじめにねたみそしり

しともがらも、心には悔しく思へど、おくれればせにしたがはむも、猶ねたく人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、古きをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論（まげま）ひ定まりて、皆人の従ふ世になりては、始よりすみやかに改め従ひつる人は、かしこく心さとくおもはれ、古きにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるゝわざぞかし。(二の巻)

## 五 おのが物學びのありしやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひてよみける。さるははか／＼しく師につきて、わざと學問すともあらず。何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるか



二十あまり云々

寶曆二年翁二十三歳の時京に上つて儒學を堀景山に學んだことをさすのである。

改觀抄

僧契沖の著、百人一首を解釋したもの。

餘材抄

古今和歌集を註釋したもの。

二十卷。

勢語臆斷

伊勢物語を註釋したもの。四卷。

冠辭考

賀茂真淵の著、枕詞を解釋したもの。十卷。縣居の大人賀茂真淵。

たもなく、たゞ唐の大和のくさくさの書を、あるにまかせ、うるにまかせて、古き近きをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき。

かくて二十あまりなりしほど、學問しにとて京になむ上りける。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせむとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説を知り、そのよに勝れたるほどをも知りて、この人のあらはしたるもの、餘材抄、勢語臆斷などをはじめ、その外もつぎ／＼に

もとめ出でて見けるほどに、すべて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やう／＼にわきまへさとりつ。

さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心になはず、その歌のさまをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝ、よみありきけり。さて人のよむふりは、おのが心にはかなはず、けれども、おのが立ててよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人がとがめずぞありける。そはさるべきことわりあり、別にいひてむ。

さて後國に歸りたりしころ、江戸より上れりし人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふものを見せたるに、ぞ、縣居の大人の御名をも始めて知りける。かくて其の書は、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠くあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり



いまたび見れば、まれ／＼にはげにさもやとおぼゆるふし／＼も出  
できければ、又立ちかへり見るに、いよ／＼げにとおぼゆること多くな  
りて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりのこゝろ  
ことばのまことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、か  
の契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが  
歌まなびの有りしやう、大かたかくのごとくなりき。

さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢのもの、古き近  
き、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざし  
ありしかど、とり立ててわざと學ぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わ  
ざとも學ばむとこゝろざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説に  
なずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふもの  
説くおもむきは、みないたくたがへりと、はやく悟りぬれば、師と頼むべ  
き人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でむと

田安の殿  
徳川宗武。

思ふこゝろざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへす  
讀みあぢはふほどに、いよ／＼心ざし深くなりつゝ、この大人をしたふ  
心、日にそへてせちなりに、一年この大人、田安の殿の仰せごとをうけ  
たまはり給ひて、この伊勢の國より、大和山城など、こゝかしこと尋ね巡  
られし事のありしをり、この松坂の里にも二日三日とゞまり給へりし  
を、さることつゆ知らで、後に聞きていみじく口惜しかりしを、かへるさ  
まにも又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いと／＼うれしく、急ぎ  
宿りにまうでて、はじめ見え奉りたりき。さてつひに名簿なまぼを奉りて、  
教を承ることにはなりたりきかし。二二の卷

## 六 縣居の大人の御さし言



宣長三十<sup>ハチ</sup>あまりなりしほど、縣居の大人の教をうけたまはりそめし  
ころより、古事記の註釋を物せむのころざしありて、そのこと大人に  
もきこえけるに、さとし給へりしやうは「われももとより神の御ふみを  
解かむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古の  
まことの意をたづねえずばあるべからず。然るにそのいにしへのこ  
ころをえむことは、古言をえたるうへならではあたはず。古言をえむ  
ことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬  
葉を明らめむとするほどに、すでに年老いて殘のよはひ今いくばくも  
あらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年  
さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學び  
なば、その心ざしとぐるべし。たゞし世の中のもの學ぶとも  
がらを見るに、皆ひきき所を経ずて、まだきに高きところのほらむと  
する程に、ひききところをだにうるべし。ことあたはず、まして高き所はうべ

きやうなければ、みなひがごとのみすめり。このむねを忘れず、心にし  
めて、まづひきき所よりよくかためおきてこそ、高き所にはのぼるべき  
わざなれ。わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはらこのゆゑぞ。  
ゆめしなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそ」といねもごろにな  
む誠めさとし給ひたりし。この御さとし言のいとたふとくおぼえけ  
るまゝに、いよく萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞ  
して、いにしへのころ詞をさとりえて見れば、まことに世の物識り人  
といふものの神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さ  
らにまことの意はえ得ぬものになむ有りける。(二の巻)

## 七 師の説になづまざるいこ



おのれいにしへ古典を解くに、師の説とたがへること多く、師の説のわるき事あるをばわきまへいふこともおほかるをいとあるまじきこと、思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來らむには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそ、となむ教へられし。こはいと尊き教にて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。大かた古を考ふる事さらに一人二人の力もて、ことごとくあきらめ盡すべくもあらず、又よき人の説ならむからに、多くの中には誤もなどかなからむ。必ずわるきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへのことごとく明かなり、これをおきてはあるべくもあらずとおもひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよき考もいでくるわざなり。あまたの手を経るまに、さきざきのうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎに、さきもてゆくわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。

よきあしきをいはず、ひたぶるに古きをまもるは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

又おのが師などのわるきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知ることなし。師の説なりとして、わるきを知りながらいはず、つゝみかくして、よざまにつくろひをらむは、たゞ師をのみたふとみて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古をおもひて、ひたぶるに道の明かならむ事を思ひ、古のことの明かならむことをむねとおもふが故に、わたくしに師をたふとむことわりの缺けむことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと譏らむ人は、譏りてよ。そはせむかたなし。われは人に譏られじ、よき人にならむとて、道をまげ古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そはいかにもあれ。(二の卷)



## 八 わがをしへ子にいましめおくやう

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よき考のいできたらむには、必ずわが説にな泥みそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせむぞ、吾を用ふるにはありける。道を思はで、いたづらにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。(二の巻)

## 九 富貴を願はざるをよきことにする論ひ

世々の儒者、身の貧しく賤しきをうれへず、富み榮えを願はず喜ばざるをよき事にすれども、そは人のまことのこゝろにあらず。おほくは

名をむさぼる例のいつはりなり。まれく、にさる心ならむ者ありとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよき事ならむ。ことわりならぬふるまひをして、あながちに願はむこそはあしからめ、ほどく、に務むべきわざをいそしく務めて、なりのぼり富み榮えむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身おとろへ家貧しからむは、うへなき不孝にこそありけれ。たゞおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝を忘るゝは、もろこし人のつねなりかし。(三の巻)

## 一〇 一むきにかたよるここの論ひ

世の物識り人の、他の説のあしきをとがめず、一むきに片寄らず、これをもかれをも捨てぬさまに論をなすは、多くはおのが思ひとりたる趣



をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかに譏るとも、わが思ふすぢをまげて従ふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。大かた一むきに片寄りて、他説（た）をばわろしとがむるをば、心せばくよからぬ事とし、一むきには片寄らず、他説をもわろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、必ずそれさしもよき事にもあらず。據るところ定まりて、それを深く信ずる心ならば、必ず一むきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをば取るべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは、皆あしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわりぞかし。然るを、これもよし又かれもあしからずといふは、よる所さだまらず、信すべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さだまりて、それを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることをあたはず。こ

れ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかにもおもふらむ、われは一むきにかたよりて他説をばわろしとがむるも、必ずわろしとは思はずなむ。(四の巻)

### 一一 前後と説のかはるること

同じ人の説の、こゝとかしことゆきちがひて、ひとしからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かた其の人の説すべて浮きたるこちのせらるゝ、そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。始より終まで説のかはれることなきは、中々にをかしからぬかたもあるぞかし。はじめに定めおきつる事の、ほどへて後に又異なるよき考の出でくるは、常にある事なれば、始とかはれることあるこそよけれ。



年をへて學問す、みゆけば、説は必ずかはらでかなはず、又おのが始の誤を後に知りながらは、つゝみかくさで清く改めたるもいとよきことなり。

殊にわが古學いにしへまなびの道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにことごとくは考へつくすべきにあらず、人をへ、年をへてこそ、つぎつぎに明かには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、前なると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生いぢのかぎりのほどにも、つぎつぎ明かになりゆくなり。されば、その前のと後との中には、後の方をぞ其の人の定まれる説とはすべかりける。但し又みづからこそ始のをばわろしと思ひて改めつれ、又後に人の見るには、なほ始のかたよろしくて、後のは中々にわるきもなきにあらざれば、とにかくにえらびは見む人の心になむ。(四の巻)

## 一二 ふみ寫し物書くこと

ふみを寫すに、同じくだりのうち、あるは並べる行などに同じ詞のあるときは、見まがへてその間なる詞どもを寫しもらすこと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、その間一ひらを皆がらおとすことあり。これら常に心すべきわざなり。又よく似て見まがへ易き文字などは、殊にまがふまじくたしかに書くべきなり。これは寫し書きのみにあらず、大かた物書くに心得べきことぞ。

すべて物を書くは、事の意を示さむとてなれば、おふな／＼文字さだかにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、いかなることとも讀み解きがたきが世に多かる、あぢきなきわざなり。常に書きかはす消息文などは、文字讀みがたくては言ひやるすぢゆき通らず、讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつゝかへさひ讀めども、



つひに讀み得ずなどしては、こゝ讀み難しと返し問はむも、さすがにな  
めしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

(六の卷)

### 一三 手書くこころ

よるづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問などす  
る人は、殊に手あしくては心おとりのせらるゝを、それ何かは苦しから  
むといふも、一わたり理はさることながら、なほあかずうちあはぬ心地  
ぞするや。宣長いと拙くて、常に筆取るたびにいと口惜しういふかひ  
なく覺ゆるを、人の請ふまゝに、おもなく短冊一ひらなど書きいでて見  
るにも、我ながらにいとかたはに見苦しうかたくななるを、人いかに見  
るらむと恥づかしく胸痛くて、若かりし程になどて手習ひはせざりけ

むといみじうくやしくなむ。(六の卷)

### 一四 花のさだめ

花はさくら。櫻は山櫻の、葉あかくてりてほそきがまばらにまじり  
て、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思は  
れず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山ざ  
くらといふ中にもしなぐのありて、こまかに見れば、一木ごとにいさ  
さかかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。又今の世  
に、桐がやつ、八重一重などいふも、やうかはりて、いとめでたし。すべて  
曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も青や  
かに茂りたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよく晴れ

(23) めだきの花

桐がやつ  
もと鎌倉の桐  
が谷から出た  
櫻の名である。



有りて世の中  
残りなく散る  
ぞめでたき櫻  
花、ありて世  
の中はてのう  
ければ。(古今  
集讀人知らず)

たる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花とも  
おぼえぬまでなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞ、いとめでたきを、さかりになるま  
まに、やうく、白けゆきて、見どころなくなるこそ、いと口惜しけれ。櫻  
の咲けるころまでも、散ること知らで、むげに匂なくねびれしぼみて、残  
りたるを見れば、げに有りて世の中は、何事もみなかくこそと、見る春ご  
とに思ひ知らるかし。白きはすべて香こそあれ、見るめは品おくれた  
り。大かた梅の花は、小さき枝を物にさして、近く見たるぞ、梢ながらよ  
りはまされる。

桃の花はあまた咲きつゞきたるを、遠く見たるはよし、近くては鄙びび  
たり。山吹、かきつばた、なでしこ、萩、すゝき、女郎花など、とりくりにめで  
たし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ、あまりうるはしくし  
たたかにつくりなしたるは、なか／＼に品なくなつかしからず。つゝ

じ、野山に多く咲きたるは、目さむるこゝちす。かいだうといふもの、か  
らめきてこまやかにうるはしき花なり。

そも／＼かくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ、人は又思ふ心こ  
となるべければ、一やうに定むべきわざにはあらず。又いまやうの世  
の人のもてはやすめる花ども、世におほかるを、數へいでぬは、ことさ  
らめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、古き物にも見えたることな  
きは、心のなしにや、なつかしからずおぼゆかし。されど、それはたひと  
やうなるひが心にやあらむ。(六の巻)

一五 おのれこり分きて人に傳ふべ

きふしなきこと



おのれは道のことも歌のことも、縣居の大人の教の趣によりて、たゞ古の書どもを考へ覺れるのみこそあれ。その家の傳へごととは、受け傳へたること更になければ、家々のひめごとなどいふ限はいかなる物にか、一つだに知れることなし。されば又人にとりわきて、殊に傳ふべきふしもなし。すべてよきことは、いかにもく、世にもひろくせまほしく思へば、古の書どもを考へて、覺り得たりと思ふ限は、皆書にかき表して、つゆも殘しこめたることはなきぞかし。おのづからもおのれに従ひて、物學ばむと思はむ人あらば、たゞ著せる書どもをよく見てありぬべし。そを放ちて外には、更に教ふべきふしはなきぞとよ。

(七の卷)

### 一六 今の人の歌文ひがごと多きこと

近き世の人の、歌も文も、大方はよろしと見ゆるにも、なほ僻事多きぞかし。されどその違へるふしを見知れる人は、た世になければ、たゞかいなでにこゝかしこえんなる詞を使ひ、よしめきてよみなし書き散らしたるをば、まことによしと見て、人のもてはやし譽めたつれば、心をやりてしたり顔すめる、いとかたはら痛くをこがましくさへぞ思はる。さるにつけては、かく言ふ己が物する事もなほいかに僻事あらむと、物よく見知れらむ人の心ぞ恥づかしかりける。人の僻事のよく見え分かるゝにつけては、我はよく辨へたれば、僻事はせずと思ひ誇れど、古のこの意を曉り知るすぢは、かぎりなきわざにしあれば、この外あらじとはいとなむ定めがたきわざなりける。(八の卷)



一七 歌も文もよく整ふは難きこと

近き世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とま  
ることは程々にあまたあんめれど、それはたいかにぞや覺ゆるところ  
はまじりて、大方瑕なくと、のひたるはをさく見えず。これを思へ  
ば、後の世にして古をまねぶことは、いとく難きわざになむありける。  
古の賢き人々のだに、これはしも露の瑕なしと覺ゆるは、多かる中にも  
少くなむあれば、まして今の人の、聊かなる瑕をさへに言ひたてむは、  
あながちなるにやあらむ。されど同じくは、人のいさゝかも難すべき  
ふしませぬさまにこそはあらまほしけれ。よきほどにて心をやるを  
ば、唐土の古の人もよからぬことに言ひおきけるをや。(八の卷)

一八 物學びの心ばへ

昔は皇國の學とてことにすることはなくて、たゞ漢學をのみしける  
ほどに、世々を経るまゝに、古の事はやうく疎くのみなりゆき、漢國  
の事は、やうく親しくなりもてきつゝ、つひにその心は、もはら漢ざ  
まに移りはて、上つ代の事は、物の意はさらにもいはず、詞だに聞き知  
らぬ異國のさへづりを聞くがごと、ものうとくぞなりにける。かくて  
後にいたりて、皇國の學もはらとすることも始りつれども、しか漢意の  
久しくしみつきたる人心にしあれば、たゞ名のみこそ皇國の學にはあ  
りけれ、いひといひ、おもひとおもふことは、なほ皆漢にぞありけるを、自  
らもさは覺えざるなめり。されば近き世、學の道開けて、萬さかしくな  
りぬるにつけても、なかくその漢意のみ深くさかりにはなりて、古  
の意はいよ／＼遙になむなりけるを、この近き頃になりてぞ、そこに心



づきぬる人のいできそめて、世は皆漢なることをさとりて、人も我も古の意をたづぬる意の明りそめぬる。しかすがに、かけまくもかしこき神のまし／＼ける世は、なほゆくさきいとたのもしくなむ。(十の巻)

## 一九 物學びはその道をよく擇びて

入りそむべきこと

物學びに志したらむには、まづ師をよく擇びて、その立てたるやう、教のさまをよく考へて、從ひそむべきわざなり。智ちにぶき人は更にもいはず、もとよりさとき人といへども、大かた初に從ひそめたるかたに、おのづから心は引かるゝわざにて、その道のすぢわるけれど、わるきことをえさとらず、又後にはさとりながらも、年頃のならひは、さすがに捨て

がたきわざなるに、我とかいふ禍わざ神さへ立ちそひて、とにかくに強ひごとして、なほそのすぢを助けむとするほどに、終によきことはえ物せでひがごとのみして、身を終ふるたぐひなど世に多し。かゝるたぐひの人は、勉めて深く學べば、學ぶまに／＼、いよ／＼、わるきことのみさかりになりて、おのれ惑へるのみならず、世の人をさへに惑はすことぞかし。かへす／＼も初より師をよく擇ぶべきわざになむ。(十二の巻)

## 二〇 靜かなる山林を住みよしこと

世々の物識り人、又今の世に學問する人なども、みな住家は里遠く靜かなる山林を住みよく好ましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず、たゞ人げ繁く賑は、しき處の好まし



くて、さる世ばなれたる處などは、淋しくて心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるはまれ／＼にもものして、一夜旅寝したるなどこそは、めづらかなるかたにをかしくおぼゆれ、さる處につねに住ままほしくはさらにおぼえずなむ。人の心はさまざま／＼なれば、人うとく静かならむ處に住みよくおぼえむもさることにて、まことにさ思はむ人もよには多かりぬべけれど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねにさいひなして、なべての世の人の心と異なるさまにもてなすたぐひも、中にはありぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情（俗情）のならひにこそ。（十三の巻）

## 二二 おのが京の宿りのこゝい

宣長享和のはじめの年、京に上りてありし程宿れりし所は、四條の大

の年云々  
享和元年四月  
（紀元二四六一  
年）宣長七十  
二歳の時。

路の南づらの、烏丸のひむがしなる所にぞありけるを、家はやゝおくまりてなむありければ、物のけはひうとかりけれど、朝の程夕ぐれなどには、門に立ち出でつゝ見るに、道も廣くはれ／＼しきに、往きかふ人しげく、いと賑はゝしきは、田舎に住みなれたる目うつくしこよなくて、目さむる心地なむしける。京といへど、なべてはかくしもあらぬを、この四條の大路などは、殊に賑はゝしくなむありける。天の下三ところの大都の中に、江戸・大阪はあまり人の往來多く、らうがはしきを、よき程の賑ひにて、萬の社々寺々など、古のよしある多く、思ひなしたふとく、すべて物きよらに、萬のことみやびたるなど、天の下に住ままほしき里は、さはいへど、京をおきて外にはなかりけり。（十三の巻）



二二 一言一行によりて人のよきあ

しきを定むること

人のたゞ一言一行によりて、その人のすべてのよきあしきを定めいふは、からぶみの常なれども、これいとあたらぬ事なり。すべて、よき人といへども、稀にはことわりにかなはぬしわざもまじらざるにあらず。あしき人といへども、よきしわざもまじるものにて、生ける限りのしわざ、ことごとくによきあしき一かたに定まれる人は、をさくなきものなるを、いかでかはたゞ一言一行によりては定むべき。(十四の巻)

二三 古よりも後の世のまされること

歴代國文學新選 卷五

古よりも後の世の勝れること、萬の物にも多し。その一つをいはむに、古は橘をならびなき物にしてめでつるを、近き世は蜜柑といふ物ありて、この蜜柑に比ぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。その外柑子、柚、九年母橙などの類多き中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似て、こよなくまされる物なり。この一つにておしはかるべし。或は古にはなくて、今はある物も多く、古はわろくて今のはよき類多し。これをもて思へば、今より後も亦いかにあらむ、今にまされる物多く出で來べし。今の心にて思へば、古は萬に事足らず、あかぬこと多かりけむ。されどその世には、さは覺えずやありけむ。今より後また、物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事足らずとは覺えぬが如し。(十四の巻)



# 琴後集

琴後集十五卷は江戸時代の能文家村田春海の作である。春海は錦織齋又は琴後翁と號して學和漢を兼ね、當時博識の第一人者として斬然頭角を現してゐた。性質豪放不羈、風流韻事を好み、著作も随つて二十種に餘つてゐる。琴後集は潤達流麗の筆致を以て作者の詩想を吐露したもので、古來名文の譽高いものである。文化八年(二四七一)六十六歳で歿した。



父  
村田春道。

今年  
文化七年。

絲なきを云々  
性不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>音、  
而<sub>レ</sub>者<sub>二</sub>素琴一  
張<sub>一</sub>絃<sub>二</sub>徽不<sub>レ</sub>貝  
每<sub>二</sub>朋酒之會<sub>一</sub>、  
則<sub>レ</sub>撫<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>之  
曰、但<sub>レ</sub>識<sub>二</sub>琴  
中<sub>レ</sub>趣<sub>一</sub>、何<sub>レ</sub>勞<sub>二</sub>絃  
上<sub>レ</sub>聲<sub>一</sub>、(晋書、

陶潜傳) 晋の  
陶潜が無絃の  
琴を弄んだこ  
とを云つたこ  
である。

# 一 琴 後 集 序

むかし、父の世におはせし時は、遊びの道に、深う心よせたまへりしま  
まに、吹きもの弾きもの、なにくれの器ども家に數多傳へたるを、としご  
ろ度々の火にあひて、今は多く失せもてゆきて、唯、あづまごと一つなん、  
これをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵を改めつ  
くりて、小き伏屋を、己がつねに住みならさん所と定むるにつけて、思ひ  
けるは、「かのあづまこそ己が家の寶なれ。いかで、これに所得させて、そ  
のかたはらにこそ起きふしすべけれ。われ琴ひくことはならはねど、  
絲なきをまさぐりて思をやりしためしもあれば」とて、これをわがかた  
らひ人にて、さて、ことがみに硯一つ、ことじりに厨子一よろひをすゑて、  
年頃の言の葉どもをいれたり。

この頃、おのが心しりの人々、とひきていひけらく、「年頃のしたまへ

る言の葉どもは、いかにしたまふぞ。かきあつめたまはんには、われら  
筆たすけまゐらせん」といふ。「そは嬉しきことなり。さるは拙き言の  
葉を、人なみに世に残し侍らんことは、はづかしきわざには侍れど、あま  
たとし、思を寄せ心をこめしものをいたづらになしはて侍らんはほい  
なし。ともかくも然るべからんやうにとりなし給はんこそうれしけ  
れ。」とこたへければ人々、彼の厨子より取り出でて、かきあつめもてゆく、  
さて、「名をばいかに。」といふ。すなはち、「琴後」とこそいふべけれ。」とて、その  
卷のはしつ方にぞ書きつけさせたる。(序文)

## 二 清水濱臣の泊酒舎の記

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱が町とぞいひける。



こゝに蘆原刈り開きて、つい建てたる伏屋あり。そはたゞにその池に  
臨みたれば、名を泊酒舎となむいふなる。

そもく霞たなびく春のあしたは、をのへの木末をうつして、花の鏡  
にむかひ、雁鳴きわたる秋の夕べは、雲間の影をうかべて、月の御船をと  
どめ、あるは蓮花咲く夏の日、あるはみ雪降る冬の夜、折につけ時に隨ひ  
て、見る目のあはれなむ盡きざりける。あるじは深くみやび好める人  
にて、四つの時のあはれをすぐさず、こを古さまの言の葉にのべて思を  
やり、又唐土風のしらべに習ひて、心をしも慰めけり。されば魂あへる  
人々、花にあくがれ月にたどるも、常にこの伏屋をなむ訪ひ來にける。

一日あるじいひけるは、世を経て絶えざるものは鳥の跡なり。いで  
この屋の樂をも、人々とあひ睦べる心をも、長くうみの子のつぎくゝに  
傳へて、わが形見とせむことのゆるよし記してよとあれば、即ち筆さし  
ぬらして、聊か物のはしに書きつく。寛政といふ年の七とせかん月。

(卷の十)

### 三 知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなき物はあなれ。高き賤しき品いと  
異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、唯足らはぬ  
事のみぞ多かりける。花を思ふとは梢の嵐をうらみ、月をめづると  
ては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。「林にやどる鷓鴣は、  
僅なる小枝の影をのみたのみ、流に水もとむる鼠は、たゞ腹にみたすに  
過ぎず。」こそ古人もいひつれ。かゝることわりをだに分たば、限ある  
この世に、限なきことを思ふべきかは。

茲に中村のぬしなむ、能く塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の  
樞に心の月をすましめ、花をつむ夕、閑伽をくむ曉、御佛につかふる暇あ  
る時は、氷をくだき雪を煮て、梅尾の昔をしのぶめるわざにしも、心をな  
む慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、又人を羨むべき

林にやさる鷓鴣  
鷓鴣云々

鷓鴣巢、深林、  
不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>一<sub>レ</sub>枝<sub>一</sub>、  
偃鼠飲<sub>レ</sub>河不<sub>レ</sub>  
過<sub>二</sub>滿腹<sub>一</sub>、(莊  
子逍遙遊)

梅尾の昔を云々

建久二年(紀  
元一八五一)



年々僧菜西が  
宋から歸朝す  
る時茶の實を  
持ち來つてこ  
れを山城國榎  
尾の明惠上人  
に贈つた。上  
人は喜んで、  
その種を深瀬  
の園に植ゑた  
事がある。こ  
れが我が國の  
茶のはじまり  
であるといふ。  
古人云々  
知足者富。(老  
子第三十三)

春の網代云々  
すさまじきも  
の、春の網代、  
八月の白重云

ふしをも思はで、己が心から事足るわざにしもあれば、彼の古人のいひ  
けむことわりにもこそかなはめ。いでや、うつせみの世の限なき求ある  
際とは、日を竝べてあげつらふべくもあらざりけり。うべなるかな、こ  
の住家をしも、足ることを知るとは名づけしこと。(卷の十)

#### 四 隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、萬にさま／＼なれど、時にそむき折に  
あはで、つき／＼しからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆ  
くわざなるべき。されば夏の日、埋火の暖かなるを思はず、冬の夜に  
氷水の涼しさをば忘れつべし。古の人も春の網代、八月の白重をこそ、  
すさまじきことのためしには、引き出でたりけれ。かゝれば、はかなき

々。(枕草紙)

すさみも、折にあひたるはをかし、見所なき本草も、時を得たるは、めづ  
らかになむ覺ゆめる。

しかはあれど、人草しげき巷の、所せく門立ち竝べたらむあたりには、  
時をすぐし折を失ふたぐひ多くて、月に便りよきは花に疎く、水に由あ  
るは山遙にて、四つの時の行きめぐるに隨ひて、心をやるべき住ひは、い  
ともいともかたしや。

茲に前田の主の高殿こそ、あやしく所得ては覺ゆれ。後は市路につ  
づくものから、前は世離れたる望あり。春はをのへの花のかをりを、居  
ながら袂にしめ、夏は水際清き池の蓮葉を、舟ならずして手折り、秋は月  
にうそぶき、冬は雪に歌ふも、すべて山水のあはれをそへざる折なむあ  
らざりける。ましてあるじの言の葉もて、友に交らふこと廣ければ、時  
にふれ折をすぐさず訪ひ來る人々、皆みやび好まざるはなし。かくと  
こしへに、飽く世も知らぬ高殿なればとて、聞中大徳の殊更に、時に隨ふ



てふことをもて名づけられたるは、深き心しらひにこそありけらし。

(卷の十)

### 五 安田躬弦の家の文臺の記

よるづの調度、古の躰たがあるものは、よそほひありてうるはしけれど、氣近くもてなし難し。今の世に造り出づるものは、ことそぎて見所なけれど、とりつかふに心やすし。この文臺は、近き世に、桃青法師が、始めてつくり出でたる型なりとなんいふなる。法師は塵の世を遁れ出でて、假の宿りに心とゞめざりし人なりとかいふめれば、古のよそほしき姿は學ばで、今の世の心やすきに從へるにこそ。又、こは神路の山の杉の古枝を、木造りなせるなりとなん。そは、ゆくりなくなししわざなめれど、これを思ふに、とりよそひうるはしからんは、大かたに、人の世の手ぶ

桃青法師  
松尾芭蕉

躬弦  
安田躬弦、江  
戸の人、文化  
十三年(二四  
七六)に歿し  
た。

りにて事をぞぎてかざりなきは、なかなか神代のすなほなる心しらひあれば、この杉もてつくれるを、似げなしともいひ難し。

とまれかくまれ、物は事足らば、さてもありぬべきを、あまりにえり整へんとせば、失ふふしも出でくべし。わが友躬弦みづなぬしは、ふるきみやびごと好む人なるが、なほ、この古に躰なきさまなる物をも、あるにまかせて捨てざるは、心ありとやいはん。椎の葉も、祕色ひそきの坏くわいも、ものを盛るには心ひとしく、網代の屏風も、錦の帳も、身をへだつるに異なるけぢめなければ、すべて物は一方をとりて、かたへをいひつけべきわざにはあらぬにや。(卷十)

### 六 山水のかたかける繪を見る記



世の經がたき  
ためし云々  
李白の作つた  
「噫嘘噓危乎高  
哉蜀道之難、  
難於上青天、  
云々。」といふ  
蜀道難をさす。

静けき窓の裏幽かなる燈火の下に獨り居て、よくつれづれ慰むべきものは畫と書との二つになんありける。下れる世に生れ出でて、上つ世の人を心の友となすべきは書なり。足は都のうち止りて、ひとの國の遙かなる境をも、たゞに見るべきものは、うつし繪のたくみになんありける。かゝれば、古の書どもくりかへし見る暇には、名だたる山川のけはひを、うつしゑにしをび出でて、こを常に心やりぐさとぞなしける。かく、おのが心を思ひはかりて、或る人の見よとておこせしを見るに、山を疊めること十まり五つ、たゞ墨がきにかきなしたるが、濃きは近く薄きは遠し。そのまぢかく見渡さるゝは、大木しげく生ひ立ち、巖こころ聳えて、道いとさかしくともさかしく、かしこかる世の經がたきためしにいひけん、からうたのこゝろこそおぼゆれ。又、遠く見やらるゝは、あるかなきかに雲霧たち迷ひて、群れゆく鳥の翅も、末たゞきえぎえなるに、夕日ほのかににほへり。古の書に眉びきの如しといひけんは、唯

かくぞと、まづ想ひ出でぬ。水のながれ一すぢ、その源をとむるに、幾千里の遠ともわかたず、又、その落ちゆく末を望めば、何處をはかとも知り難し。その八十瀬の隈には眞砂いと清らに、さゝら波よる渚あり。又、岩うつ波高きたちて、音きくばかりなるに、舟いたくさしわづらへるあり。又岸のまにまに入り曲りて、水淀みて深きは、そこひも知らぬ淵なるべし。さて、水を隔てて、麓の方に、大きな屋ども藁をつらね、ことごとしき門おしひらきて、前には石を橋とせり。又、水の此方には、あやしき萱屋立ち並びて、垣根ゆひわたせり。又、こゝかしこに人あり。あるは馬に騎れるも、あるはかちより行くも、あるは薪負へるも、あるは釣の竿もたるも、立ちたるも居たるも、老いたるも若きも、そのさまいひも盡し難し。まして、木草何くれのものは、數へもあへんやは。かく、とほじろき山川の姿を、たゞ一ひらの紙の中に、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。たゞ、かく珍らかなるを、いづくの國、い



芳宜園  
橘千蔭の家號。  
こてふにも似  
ぬ夜云々  
月夜よし夜よ  
しと人につげ  
やらばこてふ  
に似たり待た

づくの處を、いつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも、知られぬ  
こそをしけれ。これに對へば、あからめもせずうちまもられて、あくよ  
なけれど、さはいへ、久しくとゞむべきならねばとて、そのおほよそをし  
るしおきて、かへしやりつ。(卷十)

### 七 八月十五夜芳宜園にて 曇る夜の月を見る記

芳宜園の月のまとゐは年ごとの契なれば、こてふにも似ぬ夜のさま  
なれど、今宵も例の人々まうで來にけり。さるは降りくらしたる雨の  
なごり、晴れゆかむ空も覺えず。ましてさやけき光待ち出でむはいと  
ど心もとなきを、更け行かばかくのみにあはらじを、今宵は寢で明して

ずしもあらず。  
(古今集)

まし。など、いひつゝ、伊豫簾むなしうかゞげて、空のみうちまもらるゝも、  
いとわりなしや。今宵は名におふ園生の花も、徒に夜の錦にて淺茅が  
もとの松蟲のみ、やう／＼聲そはりゆくも、猶あかぬわざながら、さすが  
にあはれはそへつべし。

晴間なき、月をいかにといひ／＼て、  
空ながめにや今宵あかさむ。  
かきくらす、雲間の影はうとくとも、  
月まつ蟲よせめてかたらへ。(卷十)

### 八 初雁を聞く記

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野づらの住ひぞいはむ方なくを



かしき。そともの小田の穂波は、かつく、色づきそめて、籬の本の小萩は、折得顔にほころび渡れる、露の匂、風の音なひ、いづれあはれをそへざるなむなかりける。さるは夕月の面白きを、たゞにやはすぐさむとて、蓬生の露うち拂ふなるは、我がたまあへる人々なりけり。

伊豫簾高うまけば、村雨のなごりの月は、絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたゞずまひも、月影にもてはやされて、やう／＼あらはれ行きぬ。「山を望めばかすかなる月」と、口ずさみ出づれば、折しも峯飛びこゆる一つらの聲さだかなるは、この麓田に落つるなるべし。げに「萩の上露もたゞならず」など言ひあへるほどに、一人がいひけるは、「霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを、秋霧の上に聲聞き初むるが、世にめぐらかなること、は更にもいはじ。すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのべ、すゞろなる心をうごかしつべきもの、いと多かる中に、世をうらみては人の心の秋を悲しみ、うきを歎きては、中空に

山を望めば云々

望し山、幽月猶  
藏し影、听し砌  
飛泉轉聲、  
菅原文時、  
は家の軒下、  
听は聞けばと  
よむ。  
萩の上露云々  
鳴き渡る雁の  
涙やおちつら  
ん物思ふやど  
の萩の上露。  
(古今集)

霞みていにし云々

春霞かすみて  
いにし雁がね  
は今ぞなく、  
秋霧の上に。  
(古今集)  
世をうらみて  
は云々  
初雁の鳴きこ  
そ渡れ世の中  
の人の心の秋  
しうければ。  
(古今集)  
中空に物を思  
ひ云々  
初雁のはつか  
に聲をきまし  
より中空にの  
み物を思ふか  
な。(古今集)  
玉梓のたより  
云々  
秋風に初雁が  
音ぞ聞ゆなる  
誰が玉づさを  
かけてきつら  
む。(古今集)  
此の世をかり  
き云々  
秋霧のはれぬ

物を思ひ、遠つ人をしたふとては、玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへては、この世を假とたどるも、折にふれ事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。いでや今宵のなぐさめに、このくさ／＼の心によそへて、おのおの事のべたまはむなり。とあれば、澄み昇る月影に向ひて、うそぶきいでたるは、心々の引く方なるべし。

世をあきと、鳴きてすぐなる初雁を、  
わが身のよそに聞きやはつべき。

となむあるは、世をあぢきなく思ふ方あるにや。

むねの雲いつかは晴れむ初がりの、

聲もらすべきおもひならねば。

いかなる人の上ならむ。

旅衣、いくたび秋をかさねまし、

また初雁の聲をき、つゝ。



雲井にいとど  
しく此の世を  
かりと云ひし  
らすかな。源  
氏物語

こは故郷をわすれぬ人なれば、  
雁が音のおくれさきだつ一つらを、  
さだめなき世のたぐひとも見む。

法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。(卷十)

### 九 山里の紅葉を見る記

都の旅居は自ら心のとまりて、今年もいつしかと秋をさへ過しにけり。降りみ降らずみさだめなき空のけはひのたゞならぬにも、まづ西山のをかしさ思ひ出でらるれば、早う相知れりける秋篠の朝臣のやどりをとて訪ひぬ。

この朝臣は、今は百敷のつかさ位をしぞきて、嵯峨野の奥にうき世の

塵をのがれいでて、獨り古のうま人の操になむならへりける。さるはあるじの自らなる心しらひもしく、萱が軒端は只かたぶくまゝなるが、板間のしのぶのみ所を得て、おどろなる垣根はかたへたえゝなるをゆひだにそへねば、更に野邊のけぢめなむあらぬに、猶野分のなごり覺えて、萩薄の心のまゝに枯れ伏したる、今は牡鹿の路さへ絶えにけりと見ゆるも、そゞろにあはれすゝまるゝ住家なり。くやしく過ぎし昔の事どもうち語らふ程に、あるじのいひけるは、きのふ爪木のたよりに總角が一枝もて來れるを見しに、露霜の色こそくまなくなりにつれ、いざたまへとあれば、うち連れて出でぬ。山際たどり行く程、大井の川水まぢかう見渡されて、波間を下す瀬々の筏は、たゞ錦を積むかと目留めらるれば、待て言問はむなど、口ずさみつゝ行くに、やがて御幸橋とかいふなるを渡れば、嵐の山はたゞ手に取るばかり近きに、入日ほのかに匂ひて空さへ焦るゝばかりなるが、山風遙に吹下して、道も去りあへぬま

大井川  
大堰川嵐山の  
麓の流。  
待て言問はむ  
筏師よまて言  
とはむ水上は  
いかばかり吹  
く山の風ぞ。  
(新古今集)



亭子の帝  
宇多天皇のこ  
と。

で散り來めるは、又たぐひやはとぞ覺ゆめる。かくて朝臣が、から歌よ  
み出でたるを、その心に答へて、

ゆくかたは、紅葉を橋にわたすなり、

天の河原にわれや來にけむ。

又昔亭子の帝の、御舟とゞめ給ひし渚は此處ぞといへば、

大御舟つなぐつな手のからにしき、

昔おぼえてちるもみぢかな。

橋のつめよりは北に、葦ふりたる寺あるに入りて憇ひぬ。渡殿など物  
さびて、はらふ心なき嵐の庭は、苔路も見えぬばかりなるが、只黄金を敷  
けるやうなり。これなむ聞きわたる麓寺なりける。やうく暮れゆ  
けば、今宵はこの御寺にこもりて、明日なむ高嶺の雲を分くべきとて、朝  
臣が

いざさらば、紅葉かたしき今宵もや、

ふもとの雲に宿はからまし。  
と思ふも、世捨人の心やすしや。(卷十)

### 一〇 雪をめぐる記

めぐりくる四つの時につけて、人々の心をやるわざなむ多かる中に、  
花をあはれみ、月にあくがれ、雪を喜ぶ三つのならはしこそ、世に類なき  
すさみとはすめれ。ことさへぐ唐人のためしにも、敷島の大和の國ぶ  
りにも、高きも賤しきもへだつることなく、古より今にかよはして、これ  
を歌によみ、文に記してめであへるは、いづれを劣れりとも、いづれを勝  
れりとも、品定むべき類ならぬは、もとよりあげつらふべきことならぬ  
ど、所に従ひ人によりておのがじし心の引くかたなくてやはあらむ。



のどけき春のあした、うら／＼と紐ときそむる花の心をとほむには、まづかしこの野ざは、この山ざと霞をしのぎ、巖をたどりて、うるはしき蔭をもとめてこそ、類なき匂をも見るべけれ。おどろなる垣根のうち、あやしき伏屋の前に、一木二木を移し植ゑたらむは、なか／＼に花のおもてをぞふせつべき。また眞萩さく秋のさかり、くまなき月の光は所をわかねど、あるは高殿の簾垂をかかげて、千里の空をのぞみ、あるは行く河の流にうかびて、水底の影を弄びてこそ心の雲もはるべけれ。小家すきまなく立ち並び、ひろからずかこへる庭にうづまり居て見むには、塵あくたのけがれも澄みわたる光に、いよゝあらはれゆきて、かへりては月うとかれとぞ覺ゆめる。かゝれば月と花とは所がらこそあはれもうちそはるめれ。

さるはおのれがたぐひの身のほどの品いやしくて、わびしき住家にのみかきこもり、とにかくに思ふにまかせて、世のさがにのみかゝづら

ふ身は、かの高殿の望、やかたのすさみは、いかでか思ひもかけむ。又野山の遊もおのづから時におくれ、折を過して、常に心にそむくふしなむ多かめる。かの雪ばかりは、この二つに異なり、葎にとぢたる門のうちも、たゞ一夜のうちに玉しく庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒も、時の間に銀をちらせるばかりに、姿をかへもてゆきて、朝夕のいぶせさも更に覺えず。また目なれたる市の巷も忽ちに景色をそへて、いひ知らぬ山里の思をなし、行きかふ商人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかなき本草、萬のものも、さながらめづらかなりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境をうつし、所をかふるとやいふべからむ。かくてこそ心にたらはぬことなく、外にうらやむべきふしもあらね。されば、この雪にのみわが心をよするも、所に隨ひ人によりたる老のすさみなり。

(卷十)



一一 正月ばかり山里人の許へ

年改りては何事かおはすらむ。春の日數もまだ淺きに、岡邊の下も  
えは、今しも御袖にたまるばかりも、摘みそめ給ひつや。谷の戸の初音  
は、いつよりか御あさいの枕をば、おどろかしまゐらせたる、いとなむゆ  
かしき。こゝには去年の雪のなごりにや、風のけしきも冬めきて、猶霞  
みもやらねば、巷の柳のうち煙りゆかむ程も、心もとなう見え侍り。さ  
るは一年、籬のもとに移し植ゑ給へるしも、雪のうちよりも、いち早くゑ  
み榮ゆとなむのたまはせし。この頃こそ心ことにも匂ひ出で侍らめ。  
いかで一枝をと思ひ侍るを、ゆるし給はましかば、いとうれしうなむ。

しる人の、たぐひならねど梅の花、  
色香をわれに惜まざるがな。(卷十三)

しる人の云々  
君ならで誰に  
か見せむ梅の  
花色をも香を  
もしる人ぞし  
る。(古今集、  
紀友則)

一二 上田秋成の許へ

春立ちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今は巖  
の中なる住ひをふり捨てたまひて、巷の花柳に立ち交らひ給ふらむは、  
いかに心ゆく御住家ならまし。

巢ごもれる、谷の鶯いかなれば、  
都のはるにこゝろひかれし。

となむ聞えまほしき。されどうき世の塵ののがれがたかるも、猶市の  
内に隠れけむ古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人  
々とのみみやび交し給ふらむは、山住みのつれづれならむよりはと、お  
しはかりまゐらすものから、徒に千里のよそにありて、萬まのあたり  
聞え承らぬこそあかぬわざなれ。さはいへ、雁の翅の行きかひだに絶  
えずば、なかなか遠くて近きたぐひとや思ひ慰み侍らむ。柳の糸の

市の内に隠れ  
云々

小隱隱々陵藪、  
大隱隱々朝市。  
(文選、晋の王  
康琚の詩句)

遠くて近き云々



遠くて近きもの、極樂船の紙云々。(枕草)

くりかへしつゝ、今年もとだえなく聞えまゐらせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音なをしみたまひそ。(卷十三)

### 一三 伴蒿蹊におくる書

秋の日數も残りすくなうなり侍りにたるを、都の御住ひよ、いかに明し暮し給ふぞ。この遠の御門は、大方に山いと遙にて、露霜の心おそきならひに侍れば、立田姫のすさみもはかばかしうも侍らずなむ。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、なにの山里、くれの古寺、御心ゆくかたぞ多かりなむ。

都人、いづれの山のにしきをか、

言葉の色にたぐへては見る。

この頃は御手染のめづらかならむこそ多からめ。風のたよりをわすれ給はで示したまはゞ、下照る影に伴はれ侍らむ心地せむは、嬉しきわざなるべし。あなかしこ、立つ霧にな隔てたまひそや。(卷十三)

### 一四 對月言志こいふことを 題にてかけることば

伊豫簾高うかゝげて、ふけゆく影をひとりうちまもりて、つらつら思ひみれば、自ら心の塵も名残なくて、なべて萬のことぐさこそ、隈なく思ひいでらるれ。さるは千種の花に露のほひをそへ、絲竹の音の響をすますらんたぐひの、よのつねのをかしさをば、さらにも言はじ。いでやすみのぼる光の高くあらはれて、人の目とゞめんに眩きばかりなる



わが世の傾く  
を嘆き  
秋のはじめに  
なりぬれば、

も、時の間にあやなき霧のまよひにかきけられたて、たゞ闇かとはかりた  
どり、中空にしばしありと見ゆるもやがて西になることのとゞめがた  
きに、うき雲の定めなくて、昨日は榮え、今日は衰ふる世の有様こそ、まづ  
覺ゆれ。又、淺茅が露に宿れども所せくもおぼえず、海原の波に浮びて  
も廣きを知られざるは、高きみじかき、おのがじしのすみかのきはぎは  
につけて、身のやすかる心しらひによそへつべきもあはれなり。また、  
落ちたぎつ瀬々の白波は、これがために清さをませど、野澤の水の濁り  
に宿りても更にみしぶの汚しさをきはざるは、世に違ひ事忤ふこと  
なくて、光を韜み跡を隠すとかいふらん、さかし人の心の奥さへ汲み知  
られぬべし。また、有るを有りとも見ず、無きを無しともさだめあへぬ  
ひじり心のさとりも、たゞこの光を磨きてこそ照すべけれ。かゝれば  
徒らにわが世の傾くを嘆き、老いとなるものとのみうちながめんはい  
ともいとも心あさしや。

今年も半は過  
ぎにけり、わ  
が夜ふけゆく  
月影の、傾く  
見ることあは  
れなれ、(慈鑑  
和尙)  
の老いなるも  
大方は月をも  
めでじ、これ  
ぞこのつもれ  
ば人のおいと  
なるもの。(古  
今集、在原業  
平)

若櫻の宮  
大和國にあつ  
た履仲天皇の  
皇居。  
朝倉の宮  
大和國にあつ  
た雄略天皇の  
皇居。

大かたに見てやは過ぎん空の月、

ちゞに心をおもひよせなば。(卷十四)

### 一五 月花のあはれをこそわることば

花をめぐらしみ、月をあはれむならばしなむ、流れての世はさらなる。  
その源を考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰め  
まし、は、若櫻の宮に始まり、月を言の葉にかけ給へるは朝倉の宮より  
なむ聞えたる。しかありて後、藤原奈良の御代に至りては歌人多く出  
で来て、かたみにみやびをかはし、心々に思を述ぶること、皆月花をもて  
心の種とぞなしたりける。

かくて世の移るに隨ひて、このすさみいよ／＼盛になりもてゆきて、



物思なき春

年ふれば齡は  
老いぬしかは  
あれど花をし  
見れば物思ひ  
もなし。(古今  
集)

くははる老

大方は月をも  
めでじこれぞ  
この積れば人  
の老となるも  
の。(古今集)

たよりなき云々

あるは花を戀

ふとてたより

なきところ

まどひあるは

月を思ふとて

しるべなき聞

にたどれる云

々。(古今集序)

花の命を云々

櫻町中納言が

花の命を十日

延べ給へと神

に祈つた故事

(源平盛衰記)

月の行方を云々

あるは花を戀

ふとてたより

なきところ

まどひあるは

月を思ふとて

しるべなき聞

にたどれる云

々。(古今集序)

花の命を云々

櫻町中納言が

花の命を十日

延べ給へと神

に祈つた故事

(源平盛衰記)

月の行方を云々

あるは花を戀

ふとてたより

なきところ

まどひあるは

月を思ふとて

しるべなき聞

にたどれる云

々。(古今集序)

花の命を云々

櫻町中納言が

花の命を十日

延べ給へと神

に祈つた故事

(源平盛衰記)

月の行方を云々

あるは花を戀

ふとてたより

なきところ

まどひあるは

月を思ふとて

しるべなき聞

にたどれる云

々。(古今集序)

花の命を云々

櫻町中納言が

花の命を十日

延べ給へと神

に祈つた故事

(源平盛衰記)

月の行方を云々

あるは花を戀

ふとてたより

芳宜園大人

あるは物思なき春を花に悦び、くははる老を月に歎き、あるはさかしきも愚なるも、たよりなき處に花をたづね、知るべなき闇に月をたどり、あるは花の命を神に祈り、月の行方を佛に契り、又下が下なる薪こる山がつ、いぶせき伏屋の賤の女までも、月と花とに心を寄せざるなむあらざりけらし。

さるは掛けまくもかしこき大御遊の際異なるが中にも、月と花とのためには時に臨みて殊更にうたげの筵を設け給ふこと、掬たがはず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまへなる世々の跡を見るに、古も今も、高きも短きも、月と花とをなつかしみ思へることひとしくて、いづれを餘れりとし、いづれを足らずとして、一方に心寄せたる人誰かはあらむ。しかるを今にありて、そのよしあしをことわりいはむは、人笑へにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるに故あり。その劣り優りは、もとより彼にはあらざめれど、おのがじし、う

月影は入る山の端もつらかりきたえぬ光を見るよしもがな。(方丈肥)

ち見る人の身にたぐへ思はむには、そのよる方いかでかなからむ。そも、花は春にありて賑は、しきにより、月は秋にありて悲をぞ起すなる。今おのがこゝろにとりていは、身已に老いにたれば、つぼめる花の盛り待ちいでむ樂もなく、品いやしければ、花々しき世を経て、時にかをらむ願もかけず、只鏡にうち向ふ折しも、頭の霜を見ては月の影かと驚き、かたぶく齡を思ひては、入り方の月ぞ身によそへつべき。かゝれば花には自らにうとく、月にぞ心の引かれける。さはいへ、こは我が身一つのすさみなり。大凡人のためにかでかまねびも出でむ。

(卷十四)

### 一六 祭芳宜園大人墓文

こゝに文化の五とせ九月八日、謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御



橘千蔭のこと。  
九月八日  
千蔭の歿した  
のはこの月の  
二日である。

縣居の庭  
賀茂眞淵の門。

前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一片を焼きて、うなねつきて申さく、あはれ哀しきかも、君は我に十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを想ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、朝にまゐるとしては、君のみはかしのしりへに従ひ、夕にまかるとしては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては、君を師とも尊み、歌作るとしては、我を弟のつらにぞ訓へ給ひける。中頃にして、君は仕への道にいとなくおはし、我は世のさがにかゝづらひて、自ら疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞき給ひて後は、我も同じちまたに移り住めば、花を尋ねとては、われ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひ乗り、うき事も俱に憂へ、嬉しきふしも俱に喜びて、世にありふるわざのまめごとともあだごとともかたみにへだてなく心をかはせること、今に二十年、そのはじめをくり

くひぜを守り  
宋人有<sub>二</sub>耕<sub>レ</sub>田  
者。田中有<sub>レ</sub>株  
兔走觸<sub>レ</sub>株、折  
頭而死。因釋<sub>二</sub>  
其耒、而守<sub>レ</sub>株。  
(韓非子)  
舟にきだつく  
楚人有<sub>二</sub>涉<sub>レ</sub>江  
者。其劍自<sub>二</sub>舟  
中墜<sub>レ</sub>於水。  
遂刻<sub>二</sub>其舟<sub>一</sub>曰  
是吾劍之所<sub>二</sub>  
從墜。舟止、從<sub>二</sub>  
其所刻處<sub>一</sub>入

かへし數ふれば、相友たること、既に五十とせにぞあまりける。さるを、今おくれ奉りて、いつの世にかあひみん、いづれの時にかこととはん、常なきは人の身のならひぞと知るも、これを如何でか嘆かざらん、かゝるを誰かはよく堪へん。あはれかなしきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだりゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて古にかへり、青雲の高き心しらひをもとめ、倭文機はなのあやあるみやびごとをたふとみいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、彼になづみここにひかれて、なほあやしみ咎むるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なんまれなりしを、君獨り心をおこして、あまねくさとし、廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌、世にさかりになりたるは、まことに君の力によりてなり。その自らよみ出でたまへる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりどりに具らざるはなし。その古をうつせるは、藤原寧樂なの御世に及び、後



水求之。(呂氏春秋)  
藤原持統・文武兩帝の朝  
寧樂  
元明帝から光仁帝までの七代の御代。  
堀河・鳥羽の御時  
堀河帝の朝に鳥羽帝の朝に鳥羽次郎百首があつたが、こゝは平安朝の歌の絶頂の頃以後に下らないことを云うたのであらう。

のたくみにならへるは、堀河鳥羽の御時にくだらず。心におもふことは、口につくさざることなく、目に觸るゝものは、詞にのせざることなんあらざりける。これを見て、高きもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又、ことごのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君のひとなたを得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、ふかくよろこびける。然るを今こがねの聲忽ちやみて、玉のひゞき復び聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大かたの世人のうれひともいひつべし。これをいかでかをしまざらん、かゝるを誰かは慕はざらん。あはれかなしきかも。わがかくことあげするを、泉の下にもさやかに聞しめし、天がけりてもはるかにみそなはせとらん申す。(卷十五)

## 樞園文集

樞園文集三卷は國文和歌の大家中島廣足の文集である。廣足は熊本の人で樞園、黄口なごみ號し家塾を長崎に開き後大阪に移つた。門人も多く著書も數十種に上つてゐる。樞園文集は遒勁な筆致に整然たる秩序を以て聞え風韻興趣の津津有味として盡きざるものがある。元治元年(二五二

四)歿。年七十三。



一 閑中春雨といふを

花ざかりは更なり、さらでも柳など青やかにうち煙りうら／＼と照りたる日は、蕨土筆などいかならむと、野山のさまのみゆかしく思ひやられて、庵の中には籠り居難きを、人さへゆくりなく訪ひ來つゝ、近きわたりまでいざ／＼などそゝのかすめり。雨の降る日は、さることも思ひ絶えて、人はた音づれねば、文机ふづまにのみよりゐたる、なか／＼にをかしうなむ。萱ふける軒は雨の音靜かにて、池水のあやこまかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひとときは心しみぬ。風少し吹き出でて、燈臺の火のまたゝきたるに、何とも知らぬ花の香のほのかにうちかをりたるなどもをかし。

(記文)

二 燕を題にて

いとうらゝかなる日、思ふどちうちつれゆく大路に、つばくらめのこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに下りゐて、ひぢを含みつゝ、童部どうぶの走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくもをかし。梁むねに巢くひていつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかざり開きつゝ、鳴きさわぎたるさまは、いみじうこそあはれなれ。

(記文)

三 蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむとくにて、いと耐へ難かりしを、や



う／＼日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼しきに、  
ゆあみなどして立ち出づれば、月の影さへほのめきて、晝の苦しさも、か  
つ／＼わすられぬ。やゝ遠くゆくほど、道の傍なるしづが伏屋より、烟  
のいとしげく立ち上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きな火桶に、  
何にかあらむ青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、こなたかなた  
あふぎちらすはいとあつかはしく、見る目もいぶせて、急ぎ歩みすぎ  
て見れば、やう／＼薄らぎゆくけぶりの、杉の梢にたなびきたる、霞おほ  
えてをかしきにかはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にも書かまほ  
しき景色になむ。(記文)

#### 四 夏 旅

晝のまは暑さ堪へがたくて、はか／＼しうもえあゆまねば、朝影の程  
にこそはとて、鳥の聲とともに起きいでて行くに、有明の月くまなく澄  
みわたり、竝木の松風涼しく吹き通りて、ほろ／＼とこぼるゝ露の袂に  
かゝれるも、いと心地よし。道のかたへなる田の面に人の音なひのす  
るを、河かと思れば、車の上に登りゐて、水踏み入るゝなりけり。我が旅  
のうさも聊かなぐさみぬ。程なく明けゆく横雲の空に、山鴉飛びわた  
りつゝ、茅蝸の鳴き出でたるなど、いみじうをかしきに、稻葉の露の所せ  
きまで置きわたしたるが、葉末に上りてかつがつかぼるゝさま、見る目  
もいと涼しくおぼゆ。さし出でたる日影のやう／＼高くなりゆくに、  
けふ越ゆべきなにがしの山路思ひやるもまづいとくるしうこそ。

(記文)



五 秋 山

雨すこしうちそゞげど、かばかり思ひ立ちつることはとて、うちつれ  
いづ。降るともなく霽れぬるは、この頃の空のならひなめり。いとし  
げき草葉の露をふみ分け行くも、あながちなる山路なりや。

思ひしもしるく、いと濃く染めわたしたる紅葉の、霧の絶間より見え  
たるけしき、二月の花よりもとかいひけむやうに、あはれふかう身にし  
みて覺ゆるに、夕風寒く吹き、のぼる谷のあなたに、いと細き聲にて遙に  
うち鳴きたるは、鹿なりけりと思ふに、いと珍しく、人々耳立てたる程、二  
聲三聲鳴きそへたる、あはれいみじき山踏のかひよと思ふに、おくれし  
人々もなつかしくなりぬ。(記文)

二月の花より  
も云々  
霜葉紅<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>  
月花<sup>ニ</sup>(杜牧、  
山行)

六 山 路 菊

木々の紅葉むら／＼染めわたして、尾花が袖も人待ち顔にうち招く  
山道のいとおもしろきに、女郎花・蘭などのやう／＼うち枯れゆく中よ  
り、今咲き初めたる菊の、露もとを、に靡きいでたる、物よりことに目に  
立ちて、いとなつかしう覺ゆ。「この花開きて後」などうちずしつゝ、さか  
しき岩根を傳ひ登るほど、水音さへさやかにて、やう／＼山深くなるま  
まに、谷川の流、岩のはざまなど、異草も交らでいと多く咲き亂れたる、濃  
き薄きさまざま色をつくして、いとかうばしく、波にぬるゝ枝さしさへ  
もあはれになつかしきは、まことに仙人の住家に來たる心地なむせら  
る。(記文)

この花開きて  
後  
不<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>偏<sup>ニ</sup>  
愛<sup>シ</sup>菊。此花開  
後更<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>花。  
(和漢朗詠集)



七 氷

荻の葉音もうらさびて、ふけゆく夜風のいたう寒きにとひくる人も  
なければ、衾引き被きうちふしたるが、とみにもいねられぬぞ、老のさが  
なめる。炭櫃の火もたえだえにて、いと長き夜のわびしきに板戸のひ  
まのやうく、しらみゆくは、あけぬなめりといと嬉しく、やをら起き出  
でて開きみれば、有明の月のさしいでたるなりけり。庭の落葉も霜深  
く見えて、笕の音のほのかになりぬるは、こほりやしぬらんと、こゝろみ  
に水瓶の瓢とりてひきあぐれば、手にもさはらず碎けたる氷の、いさゝ  
かつきて上りたるが、月の光にきらめきたる、いと珍らかにをかしような  
ん。(記文)

六 山 籠 深

八 冬 月

徒に寝て云々  
かくばかりを  
しと思ふ夜を  
徒に寝て明す  
らむ人さへぞ  
うき。(古今集  
凡河内躬恒)  
すさまじく云  
々

すさまじきも  
のにして、見  
る人もなき月  
の寒けくすめ  
る二十日あま  
りの空こそ心  
細きものなれ  
(徒然草)  
興盡きて反る  
云々  
吾本乗、興而  
來、興盡而反、  
何必見、安道、  
耶。(晋書、王  
徽之傳)安道  
は戴逵の字で  
ある。

思ふどちまどゐして、うづみ火かきおこし、心へだてなく物語するに、  
いつしかさゆる夜のけはひも忘れられて、窓の戸おしあぐれば、宵の浮雲  
なごりなくはれて、雪少し降りたる庭に、月のさやかに照りたるが、いは  
む方なくおもしろきを、かくてのみやはあるべき、徒に寝て明すらむあ  
たりをも驚かしてむ。とやがてうちつれつゝ、あくがれ出づ。  
人の行きかひも絶えたる大路の、凍りわたれるをふみならず足音、我  
ながらいとをかしく覺ゆ。「かゝる月夜をしも、すさまじといひけむ昔  
の人こそ心得ね。」などいひしろひつゝ、やゝ遠くあくがるゝに、風のいと  
さむく、身にしみて堪へがたければ、興盡きて反る。といへる故事もあな  
るものをとて、各立ち歸るに、夏ならましかば、尙いづこまでかは、あくが  
れなまし。」と思ふも、いとをかしくなむ。(記文)



九山家雪

暮れわたる峰の松風吹きしきりて、いといたう寒きに例の火桶かき  
いだき、麻ぶすまひきつゝ、うち臥しをるに、軒のひまびまより吹き入る  
る風につれて、頭の上に何にかあらむいと冷かに散りくるは、雪降り出  
でたるにやと思ふほど、窓の戸にさとふゞきかくる音のいと烈しく、す  
ゞろに心すゞき夜のさまなるに慣れにしすまひもたへがたう覺ゆ。  
やう／＼風静まりて、下をれゆく竹の音をり／＼聞ゆるは、いかばか  
り積れるにかと心もとなきに、窓の戸おし開き見れば、有明の月さし出  
でて、軒端の山も麓の野邊も一つにうづもれたる、くまなき光の雪には  
えて、えもいはずをかしきに、あはれ都の人にと思ふもかひなくなむ。

(記文)

一〇埋火

少納言の筆す  
さび  
火などいそぎ  
おこして、炭  
もてわたるも  
いとつきつき  
し。(清少納言  
の枕草紙)

「いと寒きに火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきつきし。」と、少  
納言の筆すさびに物せられたる、げにさることにて、冬は只これのみぞ、  
まらうどのあるじまうけにもなりぬめり。雪降り積みたる日、かねて  
ちぎりしをとふに、思ひしごとくに、南面清くはらひて、簾高く捲きあげ  
たり。大きやかなる火桶のよきほどにうづめる火に、やがてさし向ひ  
たる心地いみじううれしく、いたり深き主人の心も思ひ知られぬ。か  
くて何くれの物語するほど、尙炭をとて取り出でたる、手づからさしそ  
ふるもをかしきに、大きやかなる齒固など取り出して、やがてこれにて  
焼きてこそは、といふに、雪のさむけさもかつ／＼忘れられてなむ。

(記文)



一一夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらに歸る夕鳥も、いつしか聲しづまりて、向へる文卷もやう／＼見えなくなりゆくに、心ゆくわたりはいとくちをしきものから、暫しうちおきて、端の方に出づれば、暮れ残る梢どものほのかなる山の端に、僅にあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいへる鳥の、あやしき聲になきゆくが、何となくものさびしげなるを、來むといひつる友は、た暮れすぐしてやと思ふも心もとなきにともし火かゞげたるこそまづうれしけれ。(記文)

一二驛

治れる世は、驛路のゆきかひも賑はしく、人宿す家はた建て續けて、草引き結ぶ思ひもなきものから、さすがにうちとけてしも寝られぬは、旅路の習なるべし。曉の鐘はいづこも同じ響にて、いととく立ち出づる旅籠馬のこゑも、枕上に聞えて心地よげなるに、今日は天氣もよかなりなり。何がしの浦の眺めいかにをかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは、などいひつゝ、さゝやく音のほかに聞ゆるは、あなたに寝たる旅人なるべし。家なる人々も起き出でて、朝食のことなどとかくまかなひありく程、やう／＼物さわがしくなりて、物擔ひゆく男どもの俚謠うたふなど忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに引き寄せつゝ、馬まありて候。といふは、吾が乗るべきにやと思ふもいとをかし。(記文)



一三 瀧

瀧はいと高き巖のかしらより、布引きはへたらむやうに遙に落ち下れるが、なからばかりにさし出でたる巖に當りて、こなたかなたに碎け散る水の末は、烟のやうにうち散りまがひたる、いとをかし。「水引の白絲はへて」といひつべく、細やかに長う落ちくるもなつかしう見るを、末たえへに苔滑かにて、巖のみしめりたるは、あはれ心ゆくばかりもとくちをしうおぼゆ。又崩れ落つる雪とか、山もとゞろにて巖もさかのぼるやうに見えたるは、心すごく近くもえよらず。瀧壺などいと廣く青やかなるは、何ともなく恐ろしくや。されど水烟の風に吹きやられて、遠き梢まで靡き行くに、日影かゞやきて、そのあたりに虹の立ちたるは、いとめづらかなり。庭のうちに巖をすゑてよきほどに流しおとしたるが水の音にまぎれて、物語などはしへきこえぬもをかし。(記文)

水引の白絲はへて  
みづひきの白  
絲はへて織る  
機は旅の衣に  
たちやかさね  
ん。(後撰集)

歴代國文學新選 卷五

一四 山家興

山里のすまひはさびしきやうなれど、さる方に馴れぬれば、なか／＼にをかしうなむ。さるは花紅葉の色香は更なり、鳥蟲の聲につけても、自ら心をなぐさむるもの多く、松の柱、竹の編戸、小柴垣などのしつらひ、萬の調度さへもいたうことそぎて、庭なども只自らなる巖のたゞずまひ、軒近く滴る水を、古木のうつぼめく物にうけたためたる、飯炊ぐにも手洗ふにも、只この水にて事足りぬ。まれ／＼訪ひ來る人、はたあるじまうけなどいふこともせず、蕨土筆、筒野老などの折に従ひ所につけたる物して手づから造れる白酒すゝめなどす。同じき物語も、人ぎき憚るべき事しなければ、心に殘すくまもなく、忍びすゝみぬれば、やがてうちつれつゝ、只さながらなる打解姿にて、そこはかとなく、あくがれありきなどするも、住まであはれは」とかいひけむやうに、又なく心ゆきて、命

住まであはれ



山深くきこそ  
心はかよふと  
も住まであは  
れは知らむも  
のかは。新古  
今集。西行法  
師

ものぶるやうになむ。(記文)

### 一五 漁 村

海人の住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、  
風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋どものさま、波う  
ちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いとほかなげに見ゆるを、繪に書  
きすさびたるなどは、なか／＼にをかききものから、さて住みなば何心  
地かせましと思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ちて、今  
日はいと遅くもあるかな。などいひつゝ、沖つ方をまぼりをり。うまご  
どもにやあらむ、眞砂の上を走りありきつゝ、遊び居たるに、入日さした

る島蔭より、三つ二つ歸り來る舟の、舵ひき折りてほこらしげなるを、老  
人待ち得顔にうちほゝゑみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚によ  
せて飛び下るまゝに、綱繰り寄せなど、とかくしつゝのゝしるに、男も女  
も數多出で來て、大きな籠に魚ども取り入れつゝ、擔ひもて行くさま  
は、さはいへど賑はしげなり。くぐつめく物もて來て、小き魚三つ四つ  
乞ひもて行く童などもあり。すべて人多く立ち込み騒ぎて、舟のあた  
りかしがましく、さし寄りて覗くべくもあらず。いと長き網の、渚にか  
け干したるを繰りためて、取り入れなど、やう／＼静まりゆけば、此方彼  
方、火ともしたる透影さへもあらはにて、いとあはれに見ゆ。

一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて、露まどろまれず。曉方隣  
の家々目覺してなりはひの事どもなるべし、あやしう聞き知らぬ事ど  
もを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに海人のさへづり、珍しうも  
をかしうも。(記文)



一六 岸頭待舟

いとよき折かなとて急ぎくるに、岸さし放ちたるこそ、いみじうくちをしけれ。尙暫しく、今一人乗せてよ。といふく走りくるもあるを、聞かぬ顔して漕ぎゆく後手は、いと憎きものから、さのみ漕ぎ返したらむには、え堪ふまじくやと思はるゝを、あなにくの船人や。徒に人を走らせて。と腹あしげにいひたるこそ、心地なくは見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間遠くさし分けゆくを、かなたの岸にも待遠なるけしきにたゞずみたる人あり。水上よりさし下す筏のさまいと靜かなるに、中洲の渡には、小き舟繋ぎて、四手とかいふ網さしおろして、とかくするなどいとをかしく、一日もかくて見まほしう覺ゆ。後れたる人、人つぎく來あひて立ち待つ程やうく漕ぎもて來たるこそうれしけれ。(記文)

一七 夜學

寺々の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人もねたるに、いとうれしう、ともし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、ふかき心ばへあるくんだりくもおのづから解き得らるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さしをへつゝ見もてゆくに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地す。冊子づくりて、をかしきふし、あるはふと思ひ得たることなどをば墨おしすりつゝ書きつけなどするもをかし。鳥の聲は、夜深きにやと思ふに、いととく明けはなれたる、しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。(記文)



一八 書といふを題にてかけることば

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをも覚えぬは、書見る心の樂しさになむありける。さるは道々しきのは更なり、家々に記せる何くれの書、又かりそめの筆ずさびなど、唐大和古今と、いとさまなく多かる中に、わが立てたる筋ならぬも、見もてゆくまゝには、えうあることどもありて、かにかくに、あかすおもしろく、樂しきは、書にしくものまたなかりけり。遠き世のを見るほどに、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となして、うち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなしごとども書きつくるが、たま／＼もちりぼひ残りて、後の世に傳らば、今の古を見るが如く、後の人は、た我を友とせむには、千年の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。萬の心やれるわざ、いとさはなれど、唯獨り居てあかす樂しきは、書のほかに又

鈴屋翁  
本居宣長翁

何かはあらむ。「あるが上にもあらまほしきは書なりけり」と、鈴屋翁のいはれたるは、げにさることにてこそ。(記文)

花月草紙



## 花月草紙

花月草紙六卷は樂翁公松平定信の隨筆である。大は政治・經濟・道徳から、小は雜藝・身邊の些事に至るまで、自然人事の兩界に互つて、著者の耳目に觸れた事象に對しての感想を録したもので、その根柢を流れてゐるものは、さこまでも儒教主義の倫理觀で、著者の理想を窺ふに足るゝ同時に、徳川時代そのものを具現してゐるものである。この教訓に囚はれた點が枕草紙なきに異る所で、その文學的價値を低めてゐるさはいへ、才氣に富んだその擬古文は皮肉あり諷刺あり、世の生氣に乏しい乾燥な擬古文は大に撰を異にしてゐる。



## 一序

久しう浦わの里に住める翁ありけり。めかり鹽焼く暇には、えうなき藻屑かいあつめて、鹽屋の窓の戸にかいはさみ置きたるを、世のえせ者の取りてかへりにけり。またの年行きて見れば、こりずまにかいはさみ置きたり。かく白浪のよるよるごとに敷も積みしかば、遂にこの卷卷となりぬとぞ。この藻屑の端つかたに、月と花との事ながながしく書いたれば、それをもて名たてしは、かのえせ者のせしことなりとぞ。「海人のさへづりとこそ言はまほしけれ」と里の子はいひき。

## 芥貝草錄

## 二花

なしと聞けば、ありといはまほしく、悪しきと言ふをば善きとことかへていはんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、唐國にもありとてさま／＼例など引き附くれど、櫻書いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふからうたもなければ、なしとこそいふべけれ。

いでや櫻といはでしも、花とだに言へば、こと木には紛れぬものを。

ほの／＼と明け行く山際、雲か雪かとばかり咲き満ちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、此處にのみ暮れ残りしきなどいふは淺かりけり。まいて、うてなのびやかなれば、近劣りするなどいふは、かのことかへて、ざえ負ふ心に言ふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るるも、遠山に見るも、軒端に向ふも、曙も、夕暮も、露のひるまも、めかるる時しなきを、ことに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに、花のかたちもゆたけく、匂さへもこちたからぬも、あやしきまでにこそ



覺ゆるものなれ。さるを、何處にもありといふは更なり、曙夕暮などと、面白からんやうにことば添ふるは、いまだ深く染めし心にはあらざりけり。すべて、ことばもて言ひ盡くさんと思ふは、いと淺き心かな。

### 三月

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるにやや匂ひそめたれど、遠山の梢にいざようて姿も見えず。からうじてさし昇りけり、梢のうさも晴れにけりとおもへば、いつしか雲の一つ出で來たるが近寄るほど、あやにくに月のかたより雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こは如何にせんとしばし打ちまもるに、雲の端つ方あかう見ゆる

にぞ、出で離れたらばはやかからん限はあらじと思ふに、いつのまにかまた白雲の月待ち顔にたなびきて見ゆれば、胸うちつぶれて、打ち見るに、はじめの雲より出でたる光いと新しう見えて、ことにさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、また馳せ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。ここかしこにそれと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで見居たるうちに、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つくづくと向ひ居たれば、心のはてなきやうにこそ覺えしか。

### 四 天に任すること

「久方の空に任せて、わがささやかなるざえを用ゐざれ」とはいへど、空



に任するに深き心あるべし。星の光見ても、はや沖はあらし風吹き出  
でつ。このあたりへは明日のひるつかた吹き來べし。といふことも知  
れば、心して乗るを空に任すところは言はめ。沖の風吹くも吹かぬ  
も問はずして、今此處の波平らかなればはや漕ぎ出でて行くを、空に任  
すとは言はじ。物食ふものにてはもあれ、すべて身を養ふ道を盡くし、そ  
の程を慎みて後、いきしにを空に任すべきを、養のことは心とせず、ただ  
おのがほりする事にのみ隨ひて、いきしにを空に任すといふ事もあり  
ぬべし。

### 五學問

「かの人には雪螢集めし窓に年を積み、ふみ見る道に心を盡くし侍る

晋の孫康が雪のあかりで書を讀み、晋の車胤が螢の光で書を讀んだといふ故事。

五つの常

仁、義、禮、智、信。

五つの道

君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の道。

なり。されば世の中の事にはいとく侍り。といへば、さるこそ誠の道まねぶ人なりけれ。と譽めものする者ありとや。

もとより道まねぶ者は、五つの常、五つの道よりして、人ををさめ、己ををさむる道まねぶより外のことはなし。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千年の先つ世の事、見ぬもろこしの昔今のさまより、さかり衰ふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさへに、至るまでも明らかなるこそ、道まねぶ人とは謂ふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とは謂ふべからん。

### 六晴雨

ひでり續く頃は、こちかぜ吹きて雲の出でたるにぞ、さらば今日こそ



この夜の月夜  
「わたつみの豊  
旗雲に入日さ  
し今宵の月夜  
あきらけくこ  
そ」(萬葉集  
天智天皇)

は降り出づらめと見るに、その風もいつしか止みて、雲もむら／＼とた  
えまがちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。また雨の降り續く  
頃は、松吹く風の音いといさぎよくて、はや晴れなんと見れば、雲間もは  
やむら／＼と青く、入日の方はこちたきまで紅深く見ゆるにぞ、この夜  
の月夜明らけくこそ。と思ふに、月出づる頃は雲出でて、また玉水の音す  
るものぞかし。代々の亂れ治るきはも、わが心の上も、この如きものと  
かや。

紙草月花 (98)

### 七筆

「この筆はいとわるし。三度四度ものすれば、皆かぶろのやうになり  
ぬ。」とて、とみに物書くをりは、墨もすらで硯の水をかいまはし、書き果つ

「なりし。  
なりき。」

れば投げ置くにぞ、硯や祕閣のはざまなどに横たはりて、いつかさきも  
つりばりのやうになりて、かわきにかわきたるを、また惜しげなくたて  
ざまに、干潟のあたりにて音出づるばかりにかいまはし、あるは齒もて  
噛み碎き、又は墨もて筆のさきをおしひしぎて書きつ。かくてはいか  
で命の長かるべき。よき筆をばまづかさとするもしづめてし、物書いた  
るあとにても洗ひものし、紙におしあて又はすかし見て、一筋も亂さじ  
として置くめり。いとど命の長かるべきことわりなり。早くそじな  
んと思ふをば、いとあら／＼しくなして、「これ見給へ。三度四度にはや  
かくなりし。」といふもをかし。

### 八みやび



みやび好む者今の世にいと多かれど、いづれを誠のみやびとは言ひも定めん。ただ月を見、花を見るとも、いかで言はん。歌詠み、からうた作るとても、いかで言はん。

今のみやびといふは、まづわが名を銜ひてんと思ふより、をかしと思はでも、いにしへ人の好みしものは物まねびして、それもて名得んことをのみ思へば、心にもあらぬことを詠みなし、あるは奈良の都のふる言を集めて作りなせど、詠みなす心の中は、今の世の末が末なるふりを改めず。かくて古にかへせりと思ふことあるべし。または世に仕ふる道をも他所にして、人に高ぶるみやびもありなん。ただやんごとなき人は花を觀、月を觀るとても、いかで心の儘にすべき。われ一人面白しとて、夜更くるまで月、花の宴に耽らば、大炊殿のあたりは更なり、從者なんどをはじめとして、睡ることもえせじ。君はおそく寝ねば、おそくも起き出でなん、末つ方の者はなほ早く起き出でぬべしと思ひ遣りて、名

梁横たへて云々

魏の曹操が赤壁で梁を横たへて一月明星稀。烏鵲南飛。繞樹三匝。無枝可依。といふ詩を賦したといふ故事。云々  
源義家が、安部貞任を射ようとして弓に矢をはげながら、下の句を「衣のたては綻びにけり」とよみかけたのを、貞任、年を經し糸のみのだれのくるしさに。」と上の句をつけたといふ故事。

殘惜しくとも打ち捨てて閨に入るをこそ、その程得しみやびとは謂ふべけれ。ことに、月、花の宴とても、それをば餘所になして、たはれたる事にのみ夜をあかすなんどは、いふにも及ばずなん。いでや、武夫ならば、かの梁横たへてからうた詠み、弓に矢はげて歌詠みしなんどは、誠のみやびなるべし。皆わがすべき事をもせず、わが程を知らで、いやしきものは高きまねびし、高きものはかなきすまひなんどのまねびし、からうた作るものは、唐國の物商ふ賤にもあれ、字留馬、百濟の人も唐國に近しとてや、その書いたるものなど殊に尊ぶたぐひもあり。歌詠むものは、雲の上人ならば、いつも名だたる人のやうに覺えて、拙き歌をも寫しものして翫ぶもあるべし。又は古きもの集むとて、今の用あるものにかへても、用なきものをもとむるもありぬべし。

みやびは花の薫なり。花と實とありて足りなん。されど、この薫ありてこそ梅は桃にまさりぬれ。







誠も貫きて詞の色もそなはりなばいとど人の心をも動かしやはら  
げつべければ、一やうに實だにあらば花はなくてもありなんとはい言は  
じ。

## 一 雨

「月の夜半こそ、思ふくまもなく心のそこも澄みわたりぬるものなれ。  
されど、闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、ま  
た優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを。」といふ。

「いかに。」と問へば、「いでや、早天の雨は更なり、草木の花咲き實のるも皆  
この恵にこそあんなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日な  
りけりといふに、雨そほ降りて霞みわたりたるは、げに春やとぞ思ふぬ  
る。師走のみそかのどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。

「すべて春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに  
降れるが、衣濕せども降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、棲み  
捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底に緑やや添ひ行  
くも、柳の絲の動きもやらで露そふも、共にいと長閑なり。燈火挑げて  
も何となく光しめりたるに、鐘の音のほかに響き來るも、心澄みわた  
りぬるものぞかし。その外梅が香のしめり、夜深くにほひわたるも、花  
にうしとかこちぬるも哀はありけり。春も老い行くころ、蛙の時得顔  
にすだくもをかし。

「杜鵑の初音をいかにと思ふ頃、村雨のはらくと降り出でたるも、五  
月雨の幾日も降り暮して、ふみの卷卷繰り返しつつ居たれば、何となく  
世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又、暑さに堪へかぬる頃、雲  
のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳、蓮葉なん



どの葉裏しろく見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに降り来て、物音も聞えず、土のにはひきたるもいと心地よし。軒端は玉の簾垂懸けたらんやうに、玉水のたえまなく落ちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、又は水走らせたるに、人々しばし物言はでうちまもり居たるもをかし。や、雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌拾ふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空のひとしほみどりに見えて、虹など見ゆるに、木々のみどりの庭濼ニハヤにかけ見ゆるもいとすゞし。老いたる女など、かみの音におどろきて這ひ出でたるが、『今日のは若かりし時のごとよく霽れにけり。今時のは、かく霽るること稀なり。』なんどはや繰言いふもあり。『かれはかくあわてき。』などいひて、かたみに笑ひとよみつ、『今日は蚊も少なかるべし。かみの音もいとかすかなり。このごろの暑さも忘れぬ。』とて端近う出づれ

ば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙のものまじ顔に空うちならみて、ふつ、かなる音に鳴くもをかし。

「秋くるころの雨は昨日にかはりて、何となう淋し。萩の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身に沁む心地ぞする。常に聞き馴れし筧の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいて、や、夜寒の頃鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴き寄るもあはれなり。『この雨に木々も、染めなん。』と思へば、『茸なども生ひ出でなん。粟もはや落つべし。』などと、わらはべの物淋しげに燈火にむかひつ、言ひ出づるも、げにさまなり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、鐘撞く人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染め添ふも、白菊のうつり行きて一さかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきくし。朝



顔のみな枯れたる中に、ささやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまで  
萎みおくれたる、又あはれなり。野分の風はおどろくしきものから、  
雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀を添ふるは秋のならひなるべし。  
時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、又音かへて枕とふもをかし。  
月よりも闇の夜よりもあはれ深きものには侍らずや」といへば、かうや  
うにいひ竝べては、げにもと言ふべからんが、一年も降る心地して、よみ  
見れば、この雨はをとつ日より降り出でしをと思ふ心はかはらじ」と心  
の中に思ひて聞き居しも、またをかしかりけり。

### 一二文

「學問は人の道まねぶことなり。からうた作り、文つくるはせんなし。」

とよく人の言ふことなれど、みやびは花の薫の如く、物の潤の如し。ま  
いて、かの國の文字をおぼえて、ふみ讀むとも、文字のつかひざまにて深  
さ淺さのたがひめあるものにて、かの國の人のことは知り得難かんめ  
れど、さすがにからうた作り、文作れば、おのづから詞の外なる心をも得  
るものとかや聞きぬ。さればなすには如かじかし。などでこれを禁  
ずべき。

### 一三那須與市

「那須與市は弓の上手にてもあるべけれど、馬を海に乗り入れて、風に  
うごきて定まらぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。射損じなば  
死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心ありて

那須與市  
崇高。



放ちたりとて、必ず中るべしとも言ひ難かるべし。さるに、心にたちかへりて神に祈念したるにて、心は内にとゞまりて外へ馳せず、遂に思ふ矢つばたがはざりしは、わが心の誠へかへりて神明、良能の妙の出でしなり。と言ひしが、さあらん事もありぬべし。

一三 派

真 市

一四 理 窟

ことわりなきが、ことわりのまことなり。ことわりのごと行はるるものならば、何の難き事もあらじを、さも知らで人と争ひ、政を誹りなどしてたかぶる者は、ことわりのまことを知らぬとやいふらん。

一五 誠

「わが誠より貫ぬき出づれば、見ざる事も見え、聞かざる事も聞ゆめり。」といふは、いと至りしことにて、それをばかの孔子の君も、六十にて耳順ふ。とも宣へりしぞかし。さるに、いささかもほりする心あれば、誠を蔽ふにぞ、その境に到ることなき。弓射る道を得て、かの妙なる奥意得し者は、弓には誠のはしをも得べし。弓に得しとて、それをもて馬に乗るべしと思ふべけんや。皆道知らぬより、たやすからぬ事をたやすきやうに言ふか。

六十にして耳順ふ  
一善十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。(論語)

一六 傍 見 の 説



傍より言ふことは、いとよくあたるものなり。「かの人には衰へ給ひき。」といへど、鏡見てもさは思はず。「かれは今かくすれど、後には悔い思ふべし。」などいへど、知らざるものぞかし。私の心だになくば、傍にて見ると同じかるべし。

### 一七 詠 歌

詠歌大概に、「情は新しきを先にす。」といふ事を何くれと言へど、こはかの「日日に新なり。」といふ心ばへにて、流るゝ水の如し。さればよきをあしく、あしきをよくなきなど引き違へいふは、珍しきにて新しきとはいはじ。花を雪と見、雪を花と見る、幾度いふとも我が誠より言へば、いつも新し。心してわざといふは、新しきといふものならず。

詠歌大概  
藤原定家の作  
つた歌論の書  
「日日に新なり」  
「有日新。日日  
新。又日新。」  
(大學)

### 一八 子 の 愛

何にかへじとおもふみどり子の這ひ廻るを見て、げにこの子は行末ざえも秀でぬべし。乳房見すればひたすらに這ひ行くめり。心にさからふことあれば、ありあふものにて人を打つ。わがこの頭の疵を見給へ、この子の煙管もて打ちし痕なり。親とても心にたがへば、かくするぞ心のすなほにはある。年のほどより力もありて、この疵をいでかしにけり。と痕おし撫でて響めぬるを、愚なるものも笑ひにけり。笑ふ人よりは賢き人なるが。

### 一九 人を評すること



ある翁に、「かの人はいかなる人にか。」と問へば、「いとよき人なり。」と答ふ。「かれは。」といへば、「よき人。」といふ。必ずかれをばあしきといはんを選びて尋ね見るに、「よき人。」と答ふ。「いかなることぞ。」と尋ねしに、「人を見るには、まづ十にして五つばかりもよき事あるは、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよき事あるは、よき人なり。十にして皆あしきをば、あしきと心得給へ。」といひきとぞ。こは人をかく見るなり、われを見る道にあらず。よきもあしきも、軽きと重きとのわかちもあらんかし。

## 二〇 めづらしき好

四つの時のうつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをり

の花を咲かせんとし、散る頃に散らさじと思ふはいとくるし。散れば又こん年は咲きぬべし。いかに心を苦しむとも、霜白く、氷堅きをりにちすの咲くべきことわりなし。されど、咲くを待ち、散るを惜しむは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

## 二一 黄金を好むこと

いやしき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、ひさぎて黄金にかへて、命にもかへじと袋に入れて持ち居たるに、秋の末つ方にはかの水出でにければ、かの袋をくびにかけて高き所へ行かんとするに、はや水嵩たかくて行くべきやうなれば、せん方なく木に攀ぢ登りけるが、ことの外に飢にのぞみけり。さるに、米いささか苞にし負ひて、水遊ぶ者



陳氏の云々  
「人足所履。不  
過數寸。然而  
咫尺之途。必  
顛蹶於崖岸。  
拱地之梁。每  
沈溺於川谷。  
者。何哉。爲  
其傍無餘地。  
故也。」(顏氏  
家訓)

を見て、かの袋の黄金を見せて、「これを皆まゐらせん。その負ふ所の米  
いさゝか分けて賜はれ」といへば、いと怒りて、「にくきをのこの言ひざま  
かな。かゝる時黄金もちて何にかはせん」と言ひ棄て、遊ぎ行きしと  
なり。

### 二二 餘地

「道路は足底の廣さだにあらば、あゆむべし」といふは、例のことわりの  
みなり。いかであゆむべからん。梁の上をあゆまば落ちぬべし。こ  
は、かの陳氏の言ひたる餘地なきなり。あまりに事に甚だしく物にせ  
ちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地な  
きなりと聞きぬ。

### 二三 目しひしもの

目しひし者の人の言ひ難きことをも言ふは、色も見えず、氣色にも知  
らねば言ふなりけり。暗き人は、わがあしきも見えねば、よきと心得て、  
人に恥ぢざるは、目しひし人の類なり。されば、古より「面に牆す」などと  
も言ふめり。

面に牆す  
不學牆面。  
蒞事惟煩。  
(書經)

### 二四 月なき夜半

月なき夜半は、いと心の底澄みまさるものなりけり。海のおもて暗  
うして、寄せ來る波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の袖にそ  
よと吹きかふに、晝の暑さも忘れぬべし。秋はなほ蟲の音もさそひ行



くに、千草の花の色も見えて、沖漕ぐ船にまがふ雁がねの渡るも、いづこなるらんと哀なるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいて曉ごろに月の出づれば、宵の入日の残れるたぐひにはあらず。海のおもて黄金の波の満ち来るにぞ、言葉にも述べしとは思はぬ。昔いぎたなくて有明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから、又羨ましく思へり。

それより思の移り行きて、げに古はあしき波にも舟浮けて鯉釣りしこともありき、又はいと寒き頃海に入りて鮑とりしこともありしが、今のわかうどはまだきに老いぬるさまする者ぞ多き。その頃の昔物語に聞けば、浦曲の戦のおそろしさに、妻子打ち連れて深山へ入りし世もあり。と聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事もかのわかうどの老いたるさまするをも、あはせて言はまほしけれど、また例の老いばれて縁言いふとやむつかりなん。

## 二五 人を責むること

「人を責むるはあらはなるを責むべし」とか聞きし。まづ面改めたらば、よしとこそ言はめ。「かれは虎の皮着ぬる羊なり」とはいはじ。羊にもせよ、虎の皮着たらば虎にしてこそ養はめ。さらば、千里をばはしらずとも、羊の力の及ぶだけは走りもしなん。「外を責めて内を責めざれ」と昔より聞きしを。

虎の皮着ぬる羊  
「羊質而虎皮。」  
(揚子法言)

## 二六 日新

「おほよそ躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふはものかは、



事々に新に、物々に新なるべし。昨日の事に馴れて思ひあやまるも、かねて知れる事と思ひて敗れ取るも多し。かの賢き人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、ひとつに新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ひし事心にそみ、去年のうれしと思ひし事心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、よろづにかよはして身を終ふるまでも忘るな」と語りし老人もありけり。

## 二七 交友の道

「友に交る道は、いかなることか心得べき」といふに、「友はその所長を友とすべし。ふるきこと好むには、そのことに友とし、武技好むには、それに友とし、歌詠むものにはその道に友とするぞよき。さるに、歌とても、

『このふりはあしかり、かれにまねび給ふはひがごとなり。』などと云ふにもおよばじ。たゞ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交といへども、この二人おなじ徳、おなじ心なりしにもあなじかし。世のなかに、おなじ心の人といふものは、いと稀なることなるべし。たゞわが好めるかたに引き入れんとするもうるさし。この人、このところは長じぬれど、こゝはいと短し。その短きところを引きのべんとするはいと苦し。さ思ふわれも亦その短き所あるものを。ことに思ふこと皆諫め物せんとするを、かの信と思ふは違へりけり。交るがうちにも、知己の人はいと稀なるものなり。それらよく言葉を求めなば、もとより言ふべし。されど、しばしばすべきにはあらずかし。淺き契の友なりとも、友といふうちならば、その人のうへの存亡にかゝはるばかりの事ならば言ふべし。すべて、強ひて、かくせん、かくすくひてんと、まげてもと思ふは、皆中道には背けりといはん。たゞその所長を友とすれば、交り



がたき人もなく、われに益なき友もあらじ。かの友によりてわが方の  
亂れんとするは、皆その短を友とする故なり。」と答へしものありきとや。

### 二八 三年の薬

ある人足の疾ありて歩むこともえせず、いといたう惱みてけり。三  
年になりたれど、いさゝかおこたらざりしを、ある醫師見て、「この薬ま  
あらずべし。三年も経なば常に復すべし。」といふを、さらば、その薬飲み  
てん。」といふ。かたはらのもの打ち聞きて、「この上三年とては六年の間  
の苦なるを。」といへば、さにはあらじ。その薬によりて三年たちてもと  
に復するならば、まづ一年たちなば今よりはいさゝかよかるべし。二  
年たちなば猶よかるべし。かくて三年にてもとに復しなん。いかで

三年がうち今の如くにして、三年たちしとて俄にもとに復すべきか。  
今よりいさゝかにても年を追うてよからば、三年は更なり、九年にても  
あれ、薬飲みなん。」と言ひき。

### 二九 人のいきほひ

人竝よりは聲高く、心強く、愚なるものが、わが思ふまゝの事など言ふ  
を、いとことわりなき事と知りても、こなたも同じく聲あげて争はんも  
えうなきことなれば、そのまゝになしおくなり。さればいよゝゝわれ  
ばかりことわりあるもののやうにおぼえて、かの車を横に押し、舟をく  
がに。」といはんばかりになり行くゆり。うしろにては笑ひ譏れど、争ふ  
にも及ばざれば、知らぬさますれば、いよゝゝたかぶりて、ばうぞくの振



至大至剛云々  
一孟子曰。我善  
養吾浩然之  
氣。敢問。何  
謂浩然之氣。  
曰難言也。其  
爲氣也。至  
大至剛。以直  
養而無害。則  
塞乎天地之  
間。一孟子

舞なすものぞかし。まして、あしきも人にすぐれたるが、心強くことわりなき事を押し立てて、世をおほひ、人をかすめて、しばらく勝を取る者、古の書にも多きを見るべし。それによりても思ふべし、かの「至大至剛」の浩然の氣天地の間に満つてふこと、げにさもあらんかし。あしきも一筋に行ひて疑はざれば、一度は世をおほひぬるものを。

### 三〇 雨風のこゝろ

閉藏の氣一度變じて開け出づる頃は、必ず風吹き、雨もはげし。又のびたる陽氣の一度變じてひそまらんとする折も、かくあるなり。いかでか雨風の花をねたみ、紅葉のあだをなさん。おなじく降る雨なれど、ひとへの花にははや散りなんと恨み、八重の方には咲き初めんと待つ

もをかし。「この雨いつかはれなん」と麥搗くものは言ひ、「雨こそうれしけれ」と苗植うるものは言ふらん。麥搗く方の雲をはらし、苗植うる空は降らせんとは、いかであらん。小民うらみ歎くは絶えぬものとや言はんかし。

### 三一 利害

事に處するに、利害得失に心をつくるも宜なれども、まづそのことの筋をよく見て、さて利害得失を照らし見るべし。世にいふ才あるものは、まづわが利害得失はやく見ゆれば、利に就き、害にとほざからんとのみして、その筋を失ふなり。「たゞ害ありとも、かくすべし」といふは、いたう重き筋の事なり。さればその筋の重きと輕きと、利害の重きと



軽きとをかけ合はせても、その筋の方重きは害にあふとも、その筋にしたがふべし。また才なくして筋にも暗く、たゞ一筋に心得る者は、筋の軽きにも重き害を得て辭せじとするもありぬべし。才ありても道まねびて明らかなるにあらざれば、軽きを重しとして、遂に道失ふものこそ多かめれ。

### 三二 味

### 三三 山人

山人をめぐらしと人は言へど、世のさかしき風に乗り得てありく人もあり、えうなきものを飼ひ養ひて樂しむ人もあり、鶴をめで、龜になれて、齡むさぼる人もあり、ひさごの酒によひて、心の駒の繋ぎ難きに至るものもあり、千年を一時としてこの世にながらふる中にはや名ほろぼ

すもあり、碁など好みて一日を時のまに費すもあるべし。たゞ山人は、よしえうなくとも、その名は今に残れど、今の山人の眞似するものは、このところ違ふにやと笑ふ。

### 三三 人を知ること

人を知るはかたよりなき所より明らかなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかで、わが心くもりて人の心を照らさん。わが才智、機轉にて照らさんとすれど、時にとり暗き時あり。いかで照らさん。



三四 國體

家國のすがたは、わか／＼とあらまほし。もし年老いたる姿になりもて行かば、ものごと沈みはてて、人に見知られじと、物のいろめも花やかならざれと、思ふまでになり行くぞかし。その心よりして、人に秀でんの心もとよりなければ、物の堪能、上手もたえはてぬるものとなん。

三五 兩頭のくちなは

昔、兩頭のくちなはありしと聞けばとて、くちなはの同じ程なるを捕へて、二つの尾をしかと結ひて離れざるやうにして、庭へはなしたり。一つは南の方の草むらさして行かんとすれば、一つは北の方の林へ入

らんとし、とみに行かんとのみして、ひとつとところにのみ居けり。たはぶれにおり立ちて驚かせば、愈、挑み合ひて、一つ所に躍り居けり。いか

がすらんと折々見たるが、三日ばかり経て、二つのくちなは和らぎて、心を共に合はせ、尾の方を繩の如くにして、頭を二つ並べて行くにぞ、常のよりは遙に速に這ひ行きけり。

げに人も心の一つなれば、目も耳も心にしたがひて見聞きし、手足もひとつ心なればこそかゝりけれ。もし一つ／＼の心ならば、右の手は左を凌ぎ、左は右をそねみ、手してとらんとすれば、足はよそへ行き、左は左に行かんとすれば、右は右へ行かんとして、ひとつも人の事たることはあらじかし。さるに、いにしへより國のつかさたるものら、あるはそねみにくみ、又はかたみに凌ぎなどして、たゞわが威をふるはんとするは、何の心にかあらん。國家の事を餘所にして、只わが身あることをのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらじを、わが身にのみかゝ



獨寢ふすまに  
云々  
蓮緩不<sub>下</sub>以<sub>二</sub>昏  
行<sub>一</sub>變節。顔  
回不<sub>下</sub>以<sub>二</sub>夜浴  
改<sub>一</sub>容。獨立不  
慚影。獨寢  
不愧衾。  
(劉子新論)

づらひて、その事を思はぬは、たとひ何のぞえあり、何の力あるものとして、  
も、何かはせん。

### 三六 膽をねること

「膽をねるといふは、いかにして得てん。」とたづねしに、「天命を知るにあり。この知るは、まことに知るをいふなり。」たゞ黄金などの欲は去りやすし。好名の欲ぞいとかなしき。古にも、「君父の命にそむきて身を潔くし、朝廷の事をそしりて直をうる、これをしのぶならば、何かしのび得ざらん。」とまで、古より言ひしをや。たゞその天命をまことに知りて疑ふことなければ、つゆも心の煩なく、ちりばかりもけがれなし。「獨寢ふすまに愧ぢず。」とかいふ。かの浩々たる氣ともいふらん。

### 三七 瞳

物の大きく見ゆる人は、瞳子の中高なるにて、中くぼなるは物をさ、やかに見する故に、遠くのものも見えず、人にとはざれば、世の人みなかく見ゆとおもふなり。陽氣おほき人は、水飲水浴して、ますくよきをおぼゆ。それをもて世の人か、れと思ふたぐひにて、かれよろこばんと思ひて云ふことをふづくむあり。うらまんと思ふ事をよるこぶあり。わが私智獨見にて人をいかではからん。敵情を察し軍に勝つものもあるを。

### 三八 費



「今いふ費は、かくせずともあるべきを爲すなり。世にいふしはいといふは、かくすべき事をせぬなり。いはゞ水を疊の上にこぼしたりとて、いさゝかの水を懐の紙手にあたるまに、つかみ出しておしぬぐひ棄つるもあり、又多くこぼれぬる水に少し取り出でてぬぐへど、水は疊に流れ行くを、また少し取り出でて拭ふ、つひに疊に水は半ば入りてければ、さておきぬるもあるべし。水のほどに随ひて紙もおしぬぐふべきを、多きも少きもその程を知らざるは、みな聖の教に違ふ」といへば、聞く人笑ひて、「紙などに聖の道などとはいかゞなり。こはいかにしてもありなん」といふを、「紙とて空より降り來しものにはあらず。大君の賜よりして日用の事を辨ずるなり。わが國家の用度も、軍出だすも、凶しき年をすくふそなへも、飲み食ふものも、皆その賜のうちよりして分ち出だすことにて、これはわがものならぬ事なり。さてしはくしてわが物と思ふも、費してかへりみぬも、皆賜なるを知らざるよりおこ

るとぞ。げに國郡多くたまひしも、少きもあるを、その程知らで身を終ふるは、力あるものゝまねびして重き物あげんとしても、われ力なければあぐることを得ざるは、誰も知れるを、わが身のほどを知りたる人の少きこそをかしけれ」とわらひき。

### 三九 鷹の羽に棲む蟲

鷹の羽に棲む蟲ありけり。空高く飛び翔る時は、遙に人の住家などをも見下しつ。げにわれは事足れる身かな、翼も動かさで千里の遠きに行き通ひ、雲居のよそまでもあがるめり、殊にさまざまの鳥は皆おそれて逃げ走るげにも、われに勝つものは大かたあらしなど思ひつゝ、かの鷹の毛のうちに居つゝ、頬にしゝ、むらを刺し血を吸ひて居たるが、そ



のやからいと多くなりもて行きしにや、つひにその鷹も斃れにけり。それより自ら出でて飛び翔らんと思へども飛び得ず、走らんと思へども速ならず。血も盡きし、らむも枯れぬれば、今は命つなぐやうもなし。からうじてまづその毛のうちをくゞり出でて這ひ行けば、雀の子の居たりけり。われを恐れなんと見れば、雀の子は知らぬさまなり。いかにして見つけざるかと傍へ這ひ寄れば、うれしげに見て、嘴さし出だして喙まんとす。「例なきことなればおそろしくて逃げ隠れぬ」とかの友どちに語りにつけり。

### 四〇人の評

「もろこしの君と臣との道は、わが國のとは違へれば、いひわくべき事

范蠡  
越王勾踐の功  
臣。

にはあらねど、范蠡がいさを遂げて後船に乗りて去りしを難きこと、のやうに言へど、代々のいさを遂げし人の終よからぬより見れば、よしとは言はん。されど、船泛べて去ることだにならば、難きことはあらじ。」といふを、よきをばよきになして見給へ。よきをもその上のこと言ひて責むるはいと悪しき心ぞや。聖ならではゆるす人はあらじ。」と。

### 四一 花月の遊

今日はいと長閑なり、いでや隅田川原の花見んと、小舟に乗りて行きたるが、花見んと立ち出づるもろ人のさまげにや、都のみやびを盡くせり。様々の心々に打ちむれて行くに、女房なども何か口たゝきつゝ、心空にありくもあり。馬馳せて花をも眼にかけず、いとばうぞくに行く



もあり。やごとなき人いや、人々うちかこみて、つゝましげに行く女も  
あり。あるは木かげにてはや瓢傾け、何やらん、やたて出だし書いつけ、  
かうよりして花の枝につけて、われはがほなる風情なるもあり。今日  
はげに晴れに晴れて、一天に雲なく、富士も筑波も手にとるばかりに見  
えたれど、またそれを打ちながむる人もなし。ましてかく晴れたる日  
は、とみに雨風のありなどいふことは、つゆおもふ者もあらじかし。こ  
の長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかにたのしび遊びて、かへ  
さ忘るゝばかりしても、何のわづらひうれひもなきに、この花も昔より  
つきぬ御恵深き露に生ひそひきとやらん聞けば、さ思ふ人もありやな  
しやと見れど、王世の民の心とや、かゝる照る日の恵をば思ひも寄らず、  
いつもかく空晴るゝものとばかりも思はぬ輩多からんなど思ひかへ  
して、四方をふと打ち見れば、筑波嶺のあたりいとほそくひらめきたる  
雲こそありけれ。この雲よ、世にいふはやてなどいふものなりけり。

花を見すてて  
云々

「春霞立つを見  
すてて行く雁  
は花なき里に  
住みやならへ  
る。」(古今集、  
伊勢)  
ろの音ばかり  
云々  
「秋雁聲來。」  
(白樂天)

あまりに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて簀も笠もは  
なたで居たるが、はや艫おしたて漕ぎかへるを、いかにこの花を見棄て  
てかへるは、かりがねにつらさやならへる。ろの音ばかりまなべよか  
し。など口々にわらふを耳にも入れて漕ぎ去りぬ。  
いつかその雲のいとひろごりてけるが、かの輩は露も知らず、日のか  
げろふも知らず。今日はあつきばかりなりとて、肌ぬぐもあり、または  
衣などぬぎて馳せありくもありぬべし。雨にさきだつ風のひと通り  
吹き落ちたれば、こは花よと思ふものなく、いさご吹き立てたれば、たゞ  
驚きて居るがうち雨の降り出でたり。初は心地よき雨などともいひ  
たらんが、後には人の聲に雨の音もせず。馬を馳せてかへるもあれば、  
おどろきあわてて堤よりまろびて落つるもあり。女などはいといた  
う見苦しきまであわてふためきて、はじめ装ひしをも、自ら夢と思ふ  
らんさまなり。まして酒に酔ひて濡るゝも知らず顔に笑ひなどする



もあれば、思ひ寄らぬおろかなる雨かな。と怒り罵るもありぬべし。  
かの舟は早く漕ぎ行きぬれど、わが住む浦は遠ければ、とある橋の下  
に舟とめて居たるが、橋の上など人の走りさわぐは、なるかみのやうに  
聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川のおもに見ゆる頃、夕月のこと  
さらに新しくみがき出でたれば、はや雨の名残もなし。堤の花いかゞ  
あらんと漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間に  
ほのくゝと月の見えたるは、わがためにつくりなしけんと思ふばかり  
なり。濡れにし人はいかゞしたりけん、この月などは思ひも寄らであ  
らんなど、ひとり思ふも何となく心おごり行きぬ。かぞいろも、われひ  
とり人にこえて心地よしと思ふときは、「いましめ給ひたれば、またあ  
やまちやしぬべくとおそろしく覺えければ、飲み残したる酒携へてつ  
ひに漕ぎかへりぬとか。

## 藤篋册子

藤篋册子は上田秋成の作で、全六巻の中第一・第二の  
の兩巻は歌集、その他は皆文集である。これは秋  
成の作中で雨月物語と並び稱せられるものであ  
つて、彼が平生草した稿を悉く座右のつゞらに收  
めてゐたから、かう名づけたのである。文化三年  
(一四六六)刊。秋成は大阪の人、通稱を東作といひ、  
餘齋・無胸・剪枝崎人・和譯太郎等の號がある。加藤  
美樹(歌人)の門に古學を修め、博聞強識で、一家の見  
を具へ、殊に歌文に長じてゐた。文化六年七十八  
歳で歿した。



一十雨言(其二)

五日に云々  
太平之世五日  
一風十日一雨  
(論衡)  
云ふめるを  
云ふやうであ  
るが。「云ふ」  
の客語は「雨」  
である。  
ついで  
次序。次第。  
夕つけて  
夕方になつて。  
はつはつ  
僅かに。  
都邊  
都のあたり。  
木の芽春雨  
木の芽を出さ  
せる春雨。  
あまぎぬ  
雨衣。雨合羽  
などをいふ。  
わりなき  
いやもう大變

五日に一たび風ふき、十日にひとたび雨ふると云ふ、聖の御代のためしにぞ云ふめるを、一年すぐる程のついでをしも見れば、睦月立ちて、人の心を春にあらたむるにはあらで、鶯の初音のおとづれ、梅の南の枝に綻びそむるところを見れ。山々に霞かゝれるも、夕つけて風さえ立ちまふ雲は猶ほ冬の名残して、沫雪の梢どもにはつはつかゝれど、土に落ちては積みがてになん見ゆるも、都邊は照る日ながらに、日毎うち散るを、山里いかならん、思ふもすゞる寒けしや。そのほど過ぎては、木の芽春雨けふいく日ふり次ぎて、野は古草に新草まじりて萌え出づれば、澤水もやゝ満ちぬべし。み吉野の花にとて旅だつ人の、あまぎぬ打ちかつぎて、散りや過ぎなんと、心あわたゞしく分け登るぞわりなき。また垂れ籠めて籠りをる人は、春のものと眺めくらしつゝ、酒あたゝめさせ、友

なことだの意。  
垂れ籠めて  
籠をおろし込  
んで。  
家刀自  
妻のこと。  
あそび敵  
遊び相手。  
凋みくたつ  
萎み腐さる。  
かゝれるか  
空にかゝれる  
か。  
田子の裳裾  
農夫の着物の  
裾。  
ひぢりこ  
泥のこと。  
はれまのいそ  
ぎ  
晴れ間に大急  
ぎで早苗を取  
りはやすこと  
をいふ。  
心の外云々  
心ならずも晴  
を待つて旅寝  
をする人。

なき夕は家刀自呼びいでてくみかはし、あそび敵とするこそ、よそめもいとたのしけれ。若きほどはこれを恥らふさまなるも、中々になまめかしき。山もはた、おそきも、はやきも、嵐にさそはれて、櫻の花は散りつきぬべし。  
夏の林の緑に染めますに、夕をつぐる鐘の音さへ、打ちしめるばかりにふるは、袂すゞしき初なりけり。垣根の卯の花の雪ならば、などや凋みくたつらん。短夜の月のあゆみいと疾きやうなるに、小雨打ちこぼしつゝ、ゆく雲のかゝれるかと見るに、時鳥の一聲鳴き捨てて、又遠方に二聲三聲、かすかに聞ゆるも嬉し。田子の裳裾のひぢりこにそみつゝ、早苗とりはやす、五月雨のはれまのいそぎを、里つゞきに、何とやら唄ひつるゝ、いと賑はしな。やす川、すゞか川などの岸のをちこちに、あすや晴るゝと、心の外の旅寝する人、いかにわびしからん。みな月立ちぬれば、峰なす雲の、夕ごとにたつも崩るゝも、天にますいづれの神のたくみ



追ひしきて  
追ひついで來  
しらまなご  
白砂。  
殿守のこもの  
みやつこ  
主殿寮の下司  
で、禁庭の掃  
除などをす  
る者をいふ。

星の契云々  
牽牛織女の二  
星の契の邪魔  
をすといふ  
話云々。  
こゝにも云々  
我が國でも奈  
良朝の古い昔  
から云々。

雨ざはり  
雨に妨げられ  
引込んである  
こと。雨際常  
する君は久堅  
のきのふの雨  
に慇りにけむ  
かも。(萬葉集)  
打ちまねび出  
でたる。  
その趣に摸し  
て詠んである。  
年並  
年の順序。  
年々の模様。  
雨たばれ  
雨を賜へ。  
さは思ふに云  
々  
そら今日こそ  
願が叶つたぞ。  
雨をよろこぶ  
てふ文  
蘇東坡の喜雨  
亭の記をいふ。  
ながめさ降り  
かへては  
それが長雨と  
降りかはると。  
はらめる心を

ならん。蟬なく木かげのやどりに、汗をぬぐひ、岩間の清水を掬びてあ  
かぬ人の、行きつかるゝさまなるに、風さと吹きくる跡より、黒き雲の追  
ひしきて、降りくる村雨は、瓶にたゝへし水をくつがへすが如くに、御格  
子おろせ、簾よ、など立ちさうどきつゝ、見たまへれば、大庭のしらまなご  
は、忽ち浅川の瀬に流れあひて、殿守のとものみやつこら、こゝかしこの  
御垣のくまぐまに這ひかくるゝなど、いとめざましな。落ち瀧つ瀬の、  
水上には知らぬ濁の、いはほを越え、岸をくづしつゝ、みかさ増さると見  
しも、たゞ片時にながれ落ちて、水陰草の露おもげに萎えふし靡きあひ  
たる、今朝よりの暑さわするゝ夕なりけり。  
初秋の空に横たはりて、星の契へだつてふかたり言は、唐土人の、まこ  
と偽りは知らねど、文に書き歌に作りてもてはやすを、こゝにも、ならの  
葉のはやき昔より、雨ざはりやすと、打ちまねび出でたる、はかなげなり。  
大方の年並を見れば、夏秋の間は、山田澤田水をそそぎかねて、ことしの

秋いかならんと夜を晝につぎつゝ、男ら立ち走り、池沼も小川も淺せは  
つるまでせきあぐるこのごろ、空に乞ひ神にいのりつゝ、夜もいをねず、  
鐘つゞみの聲、里々とゞろきあひ、焼くかゞりの火影は、をちかた野邊の  
隅々をさへ隠れぬものにてらし、雨たばれなど、聲々によびのゝしる、且  
つはかなしく、且つはいさましげなり。やがておそろしげなる夕雲の  
空に立ち満ちて、降りくる雨は、玉うちなどする音して、風吹きそひ、林を  
ゆすり、河波をあげ、とぶ鳥は翅を折られ、蛙の歌もしばしは聲なくなん。  
さは思ふに叶ふ今日ぞとて、里ごと家ごとに、千秋よろづ代をうたふた  
のしさよ。唐土にても、かゝるに雨をよろこぶてふ文かきて、世に寫し  
傳へし例もありき。  
風は野分こそかなしけれ。ながめと降りかへては、いとさうぐし  
き秋になん。八月十日あまりの空の雲のまよひ、人の心をなやましう  
するよ。文つくり歌よむ人の、はらめる心をたがへ、酒くみ舞ひあそば



たがへ  
豫め抱いてお  
た思を齟齬さ  
せ。  
思ひきゆ  
心も消える位  
になさげなく  
思ふ。  
立待ち居待ち  
云々  
陰曆十七日十  
八日の月。  
染むる。  
紅葉する。  
時しく雨のよ  
し  
時雨といふ譯  
「時しく」は時  
ならぬ意で、  
「時しく雨」は  
晴間なく降る  
雨即ち時雨の  
ことである。  
心すさびを催  
す  
心なくさみを  
促す。

んのをかき業も空しからめ。望の夜の更け行くまでも、軒の雫のつ  
れなく音するは、誰もく思ひきゆらんかし。暁がたのおぼつかなき  
空に、雲間もりてきら／＼しき影をば、大かたの人は見ずてやあらん。  
立待ち居待ちして見る月は、すこし虧損はれこそすれ、待ち戀ひし夜に  
いかで劣りなん。夜はいつにまれ、村雨過ぎし名残の雲には、かなくさ  
し出でたらん影に、垣根の草の露、玉とちり時雨とそゞげるこそ、いとも  
いともあはれとは眺めらるれ。打ちかはす雁の翅のひまもりて、梢に  
滴するばかりなるは、こや長月のしぐれの雨なるべし。山の色の微か  
に染むると見るに、こゝかしこ山めぐりして降る雨は、すゞる寒げなり。  
神無月の雲のけしき、都も田舎もおなじ様にはるゝ日なきは、これや時  
じく雨のよしなるを、その頃すぎにては、みぞれとふり、雪霰と凝りて、枕  
をおどろかし、窓のもとに夜ふくるまで、文よむ人の、心すさびを催すな  
ん、いとあはれとおぼゆる。(卷四)

冬は年の云々  
冬者歳之餘、  
夜者日之餘、  
陰雨者時之餘、  
(魏の董遇の  
言)  
この三の云々  
この三餘を以  
て成業すると  
いふ。  
老がたぐひの  
愚老のやうな  
茶の木の芽  
茶のこと。  
人多くもたり  
人多くもたり  
人を多く持つ  
てゐて。  
鳥の跡  
文字。  
いつきむすめ  
愛嬢

二十 雨言 (其二)

冬は年の餘り、夜は日の餘り、雨は陰のあまりなり。文讀む人は、この  
三のあまりもてなると云ふ。かたり言にはいへど、老がたぐひのおろ  
かもものは、唯いたづらに、埋火に炭たきつぎ、春の木の芽を煎つゝ、飽かず  
すゝろひをる己は、何をして齡たもつらんとは思ふものから、まなこ暗  
く、齒落ち盡きて、何をかよみ、なにをか語らん。雨をなつかしきものに  
するは、家富み人多くもたりて、賑はしきあたりにも、友垣のとひくる道  
を絶え、家の業などもさへられて、宿にのみこもりをり、文を讀みては、い  
にしへをしのび、鳥の跡はかなう書きすさび、或はいつきむすめに、琴か  
きならさせ、酒あたゝめ、佳き物とりなめて、日ねもす夜すがらならむ、い  
とたのしき。  
あしたよりおきいでて、夕ぐれ過ぐるまでも立ち走りても、立つる烟



難波菅笠  
攝津國難波か  
ら産する菅で  
作つた笠。

祭の日  
加茂の祭の日。

御使ごしざね

御使の中の頭  
立つ人。正使。

歌うたつかさ

雅樂寮の官人。

まわりまかれ  
るも

上るも下るも。

手弱女てじやくめに云々

弱じやくしい女の  
様に倦み疲れ。

無徳  
見ること。

人待たぬ家  
來客もない家。

へん次

漢字の旁を見  
せ偏をあてさ  
す遊戯。

下笑

心の中にうれ  
しく思ふこと。

たえぐに、人の情をだにうくる由なき者等は、たゞ打ちうめきつら杖  
つきて、づれなしやこの雨とながめたらん、いとほかなし。宿りなき乞  
丐者らはこゝかしこの軒木蔭などにくゞまりをり、むさき髪かきなで、  
ふたつの乳ふたりの子にふふめて、難波菅笠破れたるを打ちかつぎ、空  
さしあふぎては、今日をいかにせんと佗しがるさま、いとかなしき。高  
き御あたりのありさまは思ひかけねば、おぼし知られぬを、祭の日馬も  
御車も、なべて雨衣打ちかづけ引き出でたる、今日の御使ざねをはじめ  
奉り、歌づかさ御隨身、小舎人童、仕丁などに至るまで、大笠、目塞笠にか  
くれかねて、しとゞに濡れつゝ、脛たかくかゝげて歩みなづめるを、これ  
見るとて、出でたつ人も、今日はいとすくなく、さうざうしげなり。  
東路なるわたり瀬の高浪をあげ、岸を越えては、國の守のまわりまか  
れるも、わりなくさへられては、武士のたけき心も、手弱女にうみつかれ、  
干さとゆく駒も鼠の如くつながれてゐたる、何もく、無徳にこそ見ゆ

れ。人待たぬ家には、若き女どもまどゐして、古代の繪ども巻きかへし  
つゝ、あるは、石はじきへん次、貝合せなどして遊ぶ。かゝる夜にこそ、ぬ  
す人どもはたよりよしとや下笑しつゝ、打ち入らめ。あはれあはれ老  
がまづしき庵には、欲しきものもたらねば、かれら入りてぬすまんとも  
せず、燈火かゝげあかし文よみ、手ならひはかなう書きすさびて、曉しら  
ず起きあかしたる昔のしのばしきは、今の身のうき事になん。(卷四)



## 浮世草子

浮世草子とは其の時代の事を寫した草子の義で、天和・貞享から寶曆・明和にかけて出た小説の總稱である。多くは短篇を集めたものであるが、中には全篇すべて連絡した趣向のものもある。而して題材を市井の間に取り、卑俗な言語で當時の卑俗淫靡な風俗を描寫してゐる。その作者には井原西鶴・八文字屋自笑(延享二年)・江島其積(元文元年)等がある。就中西鶴は浮世草子をして近世文學の魁たらしめたもので、最も著名である。彼は大阪の人で、初め西山宗因の門に俳諧を學んでゐたが、師の歿した天和二年(三三四二)の冬、初て浮世草子「一代男」を公にし、續いて二代男・三代男・一代女・五人女・日本永代藏・本朝櫻陰比事・世間胸算用・俗つれづれ等を著した。その文章は簡潔奇警で、これが他人の追隨を許さぬ西鶴の長所である。元祿六年(三三五二)五十二歳で歿した。



一 つまりての夜市

萬事の商無うて、世間が詰つたといふは、毎年の事なり。例へば十匁に相場極まりて、賣買致せし物を九匁八分に賣れば、時の間に千貫目が物も買手あり。又十匁に買へば即座に二千貫目が物も賣人あり。これを思ふに大場に住める商人の心魂各別に廣し。賣るも買ふも皆人々の胸算用ぞかし。世になき物は銀といふは、好き所を見ぬ故なり。世にあるものは銀なり。其の子細は諸國ともに三十年このかた世界の繁昌、目に見えて知れたり。昔藁葺の所は板廂となり、月泄るといへば、不破の關屋も今は瓦葺に白土の軒も見え、内藏庭藏大座敷の壁にも、砂粉は光を嫌ひ、泥引にして墨繪の物好き、都に變る所なし。又灘の塩燒は黃楊の小櫛もさゝでと詠みしにかゝる浦人も今は小袖好みして、上方に流行るといふ程の事を聞合せ見覚え、千本松の裾形も古し、當年

大場

大都會の賣買類繁な場所。

各別

格別。とりわけ。

胸算用

心の中で見積りを立てること。

其の子細は

銀の多い證據には。

板廂云々

人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにしあとは只秋の風。

(新古今集) 砂粉

金粉銀粉を蒔繪に蒔き散らし又襖紙に押し張るもの。

泥引

金銀の粉末を膠に溶解したものを塗ること。

灘の鹽燒云々

蘆の屋の灘の掃燒暇無み黃楊の小櫛もさゝす來にけり。

(新古今集)

千本松の裾形多くの松の描いてある裾模様。

仕出し

流行の作り。

中形

大形の華美なものより少しきる模様の模様。

の仕出しは夕日笹の模様とぞと、未だ京大阪にも端々は知らずして、中形のしのぶ小桐の衣裳きる中にはや田舎に京染は洒落たり。昔模様の肩先から、染込みの郭公の二字、又は葡萄棚の所々に、蔓葉を茜の染入れ可笑し。みし時は各別ぞかし。何國に居ても金銀さへ持ちければ、自由のならぬといふ事なし。殊更貧者の大節季何と分別しても濟み難し。無いと云うてから、錢が一文置かぬ棚をまぶりてから出所なし。これを思へば年中始末をすべし。日に一文づつ煙草にて伸ばしければ、一年に三百六十文、十年に三貫六百なり。此の心から算用すれば、茶薪・味噌・鹽・萬事に何程の貧家にて、一年に三十六匁の違ひあり。十年に三百六十目、これに利をもちかけて見る時は、三十年に積れば、八貫目餘の銀高なり。惣じて少しの事とて、不斷常住の事には氣をつけて見るべし。殊に昔より食酒を呑むものは、貧乏の花盛りと云ふ事あり。爰に火吹く力も無き、其の日過ぎの釘鍛冶、御火燒に稻荷殿へ進ぜたる



大筋季  
年の暮の貸借  
總勘定をすま  
す時。  
まぶる  
見守ること。  
始末  
後の事よく考  
へてよく處す  
る。  
もりかける  
繰り入れて算  
用する意。  
不斷常住の事  
ふだんの事。  
食酒  
食事の時に酒  
をのむこと。  
御火焼  
神社で毎年十  
一月中に日を  
トして庭火を  
焚く儀式。  
貧乏の花盛  
貧乏に花が咲  
く程徹底的に  
貧しくなる。  
火吹く力もな  
き

生活も出来か  
ねる。  
小半  
二合五勺。  
下戸  
酒を好まない  
人。  
下戸の建てた  
る藏もなし  
これは諺であ  
る。  
蓬萊  
新年に三方の  
盤に米・麩鮑・  
勝栗など盛つ  
たもの。  
質種  
質に入れるも  
の。  
寶は身の差合  
せ。  
所持品を賣つ  
て當座の用に  
立てることに  
いふ諺。  
當座の用  
其の場の間に  
合せの金。  
賣口錢一割の

御神酒德利の小さきに、八文づつが端酒、日に三度づつ買はぬといふ事なく、四十五年このかた呑み暮しける。此の酒の高毎日小半づつにして、四十石五斗なり。毎日二十四文の錢、つもり十二匁錢にして銀に直し四貫八百六十目なり。此の男下戸ならば、これ程に貧はせまじきものと笑ふ人あれば、此の鍛冶我が家治めたる面貌して、世の中に下戸の建てたる藏もなしと謠ひて、又酒をぞ呑みける。既に其の年の大晦日に、あらましに正月の用意をして、蓬萊は飭りながら、酒小半求むる錢なくて、事の足らざる宿淋しく、四十五年このかた一日も酒呑まぬ事の無きに、日もこそあれ、元日に酒無くては、年を越したる甲斐は無しなど、夫婦さま、内談するに、酒代の借り所なく、質種も無く、やう／＼思案廻らして、過ぎつる暑さを凌ぎし編笠、未だ青々として損ねもやらず有りけるを、これ來年の夏迄は久しき事なり、寶は身の差合せ、これを賣りて當座の用に立つるより外なしと、既に立ち盛りたる古道具の夜市

に紛れて、世間の様子を見るに、大方行き所なき借錢負ひの顔色ぞかし。宿の亭主は賣口錢一割のきほひにかかつて振り出しける。今宵になつて賣る程のもの、よく／＼差し詰つて皆哀れなり。十二三なる娘の子の、正月布子と見えて、崩黄色に染鹿子の洲崎、裏は薄紅にして、中綿も惜まず入れて、未だ袖口も紵けずして、これを望みはないか／＼と糶りければ、六匁三分五厘づつに落ちける。よもや裏ばかりも出来まじ。其の次に丹後の細口の鰯を片身賣りに出しける。これも餘らず二匁二分五厘に賣れる。其のあとから二疊釣りの蚊帳出して、八匁より二十三匁五分まで糶り上しけるに、賣らずして置きける。これは商ならぬ筈なり。蚊帳大晦日まで質に置かず持ちたる身代なれば、頼もしき所ありと笑ひける。その後十枚繼ぎの蠟地の紙に、御免筆の名印まで記したるを賣りけるに、一分からやう／＼五分まで値段付けければ、それは何れも餘りなる事、紙ばかりが三匁が物がご



きほひにかか  
つて

賣れた金の一  
割を口錢に貰  
ふので元氣付  
いて。

布子

綿入れの着物。  
袖口も衿けず  
作りかけてま  
だ綿を入れた  
計りの新らし  
いもの。

蠟地

布又は紙など  
の、蠟を引い  
たやうに光澤  
があつて滑か  
な地質。

不動

不動明王の略。

身上

身代。

始末な奴

儉約な奴。

吉田の兼好

徒然草の作者  
兼好法師。

屋形

住家。

錢に云々

錢など手にし  
た事もない。

短冊の云々

武士なれば文  
雅の道も知ら  
ぬ。

大年の晦日

大晦日のこと。

覺悟悪き人

平生の暮し向  
きの才覺をつ  
ける事の拙な  
者。

松ごも灯し云

々

晦日の夜、い  
たら暗きに、  
松ごも灯して  
夜半すぎるま

ざると云へば、如何にも、何も書かずにあれば三匁が紙なり、無用の  
手本書いて五分にも高し、たとへ如何なる人の筆にもせよ、これを禪と  
云ふ手ぢやといふ。それは如何なる事ぞと云へば、今の世に男と生れ、  
これ程かかぬものはないに因つて、これを禪手とぞ笑ひける。其のあ  
とに不動一體、獨鈷花皿、鈴、錫杖、護摩の壇の仕舞物、さて、此の不動も、  
我が身上しんじやうの富貴は祈られぬ物よと沙汰しける。

時に件の編笠出せば、其の座に賣主の居るも構はず、哀れや、此の  
笠、幾夏か著る爲とて、古きこがみにて紙袋して入れて、さても始末な奴  
が賣物ぞと、三文から振り出して十四文に賣つて、此の錢請け取る時、こ  
れは此の五月に三十六文に買うて何々の誓文庚申参りに只一度被かき  
そのまゝと云ひけるも、その身の恥の可笑し。其の夜の仕舞に、歳暮の  
禮扇の箱廿五、煙草の入りし箱一つで、二匁七分に買うて歸りしに、煙草  
の箱下に小判三兩入れ置きしは、思ひも寄らぬ仕合なり。(世間胸算用卷五)

## 二 今が世の楠の木分限

吉田の兼好が東隣に同じ北面の侍榎木原信道といへる人、屋形なら  
べて住みける。いかに禁裏の役人なればとて、五十餘歳まで錢に文字  
ある裏表をも見しらず。然れば短冊の上下をも覺えず。公家にも俗  
にもならず、男、明暮碁に打入つて、三百六十日の立つ事を忘れ、大年おほとしの晦  
日には借錢に乞ひたてられ、其の時代も覺悟悪き人の迷惑、今の世に變  
る事なし。留守つかうて戸をたゝかれたる有様、松ごも灯し連れて夜  
の明くるまで酒屋で御座るといふ聲、せはしき人の心を書き残せり。  
又武藏坊辨慶が馬大豆八斗の借狀、尼ヶ崎にあり、伊勢三郎義盛が嵯峨  
の百姓に五百貫の借手形もあり。これらは義經につかへて、而も辨慶  
は祿重けれども、無用の七道具をこしらへて身體ならず。義盛は始末  
して、手前のよろしきといへり。世に貧福の二つは是非なし。昔日京



で、人の門  
き走りあり  
て云々。徒  
然草第十九  
段

身軀  
身代即ち財  
産のこと。

初帳  
正月からつ  
け初める帳  
面。

出入奉公  
自宅より時  
々通ひで勤  
める奉公。

分限  
金持ち。

延びず  
財産が増さ  
ぬ。

内證  
くらしむき。

手まはし

手くばり。  
やりくり。

愚智  
愚痴の宛字。

身上

頼み  
結婚の結納。

利合  
利息。

に吉文字屋といふ家久しき手代二人、數年親方のために私なく内外とも勤めければ主人にそなはる仕合せとはいひながら、此の二人がはたらきゆる有銀一萬貫目と惣勘定を仕立て、正月初帳に移し見せける。親方も兼ての願ひ、一萬貫目に叶へばこのうへに望みなしと、身のよろこびをなして、けふより諸事をつぎの手代にわたさせ、先づ兩人は別家を持たせ、一日替りに出入奉公と定め、よき所家屋敷普請までして、銀二百貫目づつとらせ、兩方ともに兩替見世を出しける。元より道を知りたる事なれば、借入の取まはし、小判の買込み、錢の賣置き、一厘も損するといふ事なく、年々分限になる事、其の身才覺ばかりにあらず、これ皆旦那より望姓もらひしゆるなり。一人はいまだ十ヶ年立たぬ内には、や五百貫の身體になりぬ。又一人は親方に渡されし二百貫目今に延びず、やうく渡世をして暮らしぬ。此の兩人の内證を聞き合はせ、同じ銀子を請け取つても、手まはしによつてあの如くなる物ぞ。」と指ざしせ

ぬばかり、手代仲間にて沙汰しける。親方此の事を聞きつけて、何か愚智のおのれら、身すぎにかしこき者の事を評判致しけるぞ、あれなればこそ今に本銀へらさず世をわたりぬ。其の仔細は我が世になつてこのかた、仕合せつゞきて一つもさはる事なし。又一人は世帯持ちて其の年より、人の氣づかぬ物入り相つづき迷惑しける。何の考へもなく人の身上を沙汰いたす事、おのれが了簡の及ぶ所にあらず。このもの女房の頼みをやりける宵より、あら氣の毒や、最早いかほどかせぎたりとも銀も延ぶまじと、高くぐりに思ひしなり。汝等も知るごとく、舅は八百貫目と世間に指したる分限者なり。娘は年若く、しかも町でも沙汰する程の器量よし、われ知らずの物入り有りとは、あたまから知れたり。舅は年中一分の利合にしても八十貫の男なり。聳は漸う二十貫目たとへば大勢の敵を、小勢にてふせぐに勝利を得る事はなし。つひには追ひ倒さるべき事なれど、楠にも劣るまじき商ひの軍法者なれば



こそ、いまだ本銀にて城郭を堅めけるは、よき大將ならずや。といはれけり。手代ども聞きて寔に一生に一萬貫の身體となられける。天晴よき大將、智あり仁あり勇ありと、みなくたのもしく奉公を勤めける。

(織留卷二)

### 三 地獄の釜へさか落し

北野観音寺の晩景一會の事、先約ある由申し來り候、龜屋も喧しく候へば、糺の森の下納涼申し合せ候、其許の衆中明日御出で、心事貴面に以て、上、七月十九日、武藏様水右衛門より。明くれば加茂川に誘ひつれ、世を萍の根をたちての樂み、罪の無い處一休和尚も跣足、瓜や茄子を其の儘にと讀み給へるも、此の夕暮ぞかし。水上は山陰の片里より流れたる精靈棚片器の缺、一蓮托生蓮の葉、苧殼の箸も積れば、比叡を隣に眺めす

晩景

夕方。

一會

集會。

衆中

衆人のなかま

貴面に

面會の上。

世を萍云々

世を憂く思ふ

意を萍に云ひ

かけてある。

一休和尚も跣足で逃げ出す位。

精靈棚云々 盆の祭に供した品々を川に流したるもの。

慮外ながら失禮ながら。

當社の神體轟き給ふ 雷の鳴る事。

酒客の後世は何處

酒飲の死後は如何と禪僧の問答體の問。大論・唯識 共に佛典。

五十由旬 由旬は梵語、支那里の十六里、又は三十里、又は四十里と云つて一定しない。

牛頭馬頭 共に地獄の獄

て、御手洗に慮外ながら足さし浸し、残る暑さはどこにあるやら覺えず、殊更雲井に當社の神體轟き給ひて、名残の夕立を凌ぎてこの松蔭に便る僧あり。酒一盞とす、めぬれば、禁盃とて取り擧げず。「是は大きな分別違ひ、是非に」といへば、「未來の恐しければ恕し給はれ」と云ひすて、歸るを、仔細聞くべしと各留めて「酒客の後世は、什麼、御僧答へて曰く、「委しくは大論唯識等にあれども、あら〜語るべし。そも〜灌口地獄といふは直徑五十由旬の爛鍋あり。それに湯玉立ち騰るほどに爛をして、銅の武藏野潰膽丸といへるに丁と注いで、温なる肉を肴に挟み、牛頭馬頭立ち重なり腕を取り、何も興はなければ最一盃とす、む。強ひられて飲めば、五體蕩けて斷末魔の苦より堪へ難く、絶入すれば活々といひて正氣になし、それは娑婆にて名を取りし飲手とも覺えず、銚子の繼目今一つとす、む。否やといはせぬ相手、又飲んで絶え入る。かくの如くせめらるる事、一日に幾度といふ數を知らず。其の時鬼等詞



卒。最一盃（す）、鬼共が酒呑みにす（め）める。斷末魔（だんまご）、息の斷れる折、臨終のこと。菩薩（ぼさつ）、米の異名。その熱爛（ねつらん）、その鬼のませる熱い酒。くらぶ山（くらぶやま）、暗くなるをくらぶ山と掛けて云つた詞。みぞろの池（みぞろのいけ）、上賀茂にある池。片付けられ（かたづけられ）、正體なしになる。初夜（しよや）、夜八時頃初夜の鐘がなる。足衛（あしゑい）、ちどりあしの略。よるめき歩くこと。

を揃へ、必ず我々を恨むこと勿れ。汝が好ける酒の一滴は菩薩七十粒より出づるを瀝（し）み捨て、飲んで不善の業を作る、皆餘所より來らず。』といふにぞ、醉狂思ひ當りて、千萬悔むに甲斐なし。』と語りけるに、まだ足らぬほどの男は、それはさうかと思ふもあり、否々見て來た者なし。樽次（ぼんじ）底深（そこが）も今に歸りて語らねば合點（あてま）まるらず。よし／＼その熱爛（ねつらん）が好物なり。後の世には酒は無いかと思ふたれば、と興がりければ、僧は歸る夕の空、顔は入日の朱を奪ふ紫野の寺々の鐘撞きて、萬景見えずくらぶ山、みぞろ池の大蛇と飲み競べても負けぬ仲間も弱き方より片付けられ、初夜のころほひ上下入り亂れて歸り、足衛（あしゑい）して御池筋まで歸りて見れば、水右衛門見えぬ。手毎に松明立てて、來れる道筋尋ねれば、其の夜の曙紫竹村（あけむらさきたけむら）の堀の流れに、實にも姿は水右衛門、轉び落ちて腰より下は蛭取りつきて、黒血に和（な）へられけるを戸板に載せて歸りぬ。見ぬ後の世は無（な）い物にしてから、目前に蛭の地獄はこれか。（俗つれ／＼卷一）

淨 瑠 璃

淨瑠璃とは三味線に合せて語る物語の總稱で、初め淨瑠璃物語を語つたから、かう言ふのである。これは足利の中葉に起り、當時扇拍子で語つてゐたが、豊臣時代に三味線に人形を伴ふに至つて著しい發達を遂げ、徳川時代には江戸に金平節・土佐節・大薩摩節・河東節・常盤津節・清元節・新内節、京都に角太夫節・加賀節・一中節、大阪に播磨節・義太夫節等の諸流派を生じた。就中義太夫節は開祖竹本義太夫の非凡な美調を作者近松門左衛門の不世出の美文章によつて最も隆盛を極め、今なほ盛に行はれてゐる。義太夫は大阪天王寺の人、貞享二年（一七二五）一派を開き、後受領して筑後掾と稱し、正徳四年（一七二四）六十四歳で歿した。近松は京都の人、初め狂言作者、後に淨瑠璃作者となり、元祿十六年（一七〇三）には下阪して義太夫の座附作者となり、享保九年（一七二八）十一月七十二歳で歿した。近松の著作は前後通じて百餘種の多き上つてゐるが、いづれも皆巧に人生の奥底に觸れ、人情の機微を穿つてゐる。次の國性爺合戦は正徳五年十一月から十七ヶ月間に亘つて上演せられ、興行界に空前絶後の記録を作つたものである。



國性爺合戦

一千里が竹

別れ行く船路の末も不知火の筑紫は雲に埋めども、後に擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時も違へず親子の船唐土の地にも着きにけり。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦裝束引替へ妻子に向ひ、「我が本國といひながら、時遷り代變り、天下悉く李蹈天が引入れにて韃夷の奴となり、昔の朋友一族として、誰を尋ねん様もなく、司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、何處を一城に立籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年此の國を立退き日本へ渡るとき、二歳になりし娘の子を乳母が袖に捨置きしが、其の子が母は産落して當座に死す。斯くいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育

船路の云々  
「船路の末も知らぬ」を「筑紫」の枕詞の「不知火」にいひかけてある。  
後に擁護の「擁護」の「擁」に「擁護」の「擁」にいひかけてある。  
親子の船  
父の鄭芝龍と子の和藤内とは祖國の難に赴く爲に肥前國松浦を別々に出帆したのであつた。  
故郷へ歸る唐錦

富貴不歸郷、如衣錦夜行、誰知之者。(漢書)  
天啓五年  
明の熹宗皇帝の時の年號。  
娘の子  
錦祥女のこと。  
草木の雨露云々  
草木は雨露の恵、養ひ得ては花の父母たり。(論曲熊野)  
潯陽の江  
今九江と稱する。猩々が栖むといふので名高い。  
東坡が配所  
宋の蘇東坡が黃州に貶せられてある時、この赤壁に二度遊んだからかう云つたのである。  
獅子が城

てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助けにや、成人して今、五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となる由、商人の便りに聞及ぶ。頼む方は是ばかり、親を慕ふ心ありて、娘さへ承引せば、聾の甘輝もやすくと頼まるべし。是より道の程百八十里、打連れては人も怪しめん。我一人道をかへ、和藤内は母を俱し、日本の獵船の吹き流されしと、頓智を以て人家に憩ひ追付くべし。是より先は音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり、それを過ぐれば潯陽の江、是れ猩々の住む所、風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし。其の赤壁にて待ち揃へ、萬事を牒し合はすべし。と方角とても白雲の、日影を心覺えにて東西へこそ別れけれ。教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石古木の根ざし、瀧津波、飛び越え跳ね越え飛鳥の如く急げども、未果しなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。



これは假作の名であらう。ほうごくわを抜かし

途方に暮れたさま。文字不詳。

小豆の飯の相伴

古から狐を稻荷明神の使として、これに小豆飯や油揚等を供するからかう云つたのである。

太平簫

喇叭に似て七孔ある支那の樂器。

高音をそらし

高音を發して速方に達せしむる意。

虎嘯げば風起る

虎嘯谷風起、龍興景雲浮。(古樂府)

揚香云々

和藤内ほうどくわを抜かし、なう母者人、此の膂骨に覺えたり。もう四

五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行くほど藪の中。

むう合點たり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。

宿なし旅は行き着き次第、小豆の飯の相伴。根笹大竹押し分け踏み分

け、猶奥深く行く先に怪しや、數萬の人聲、攻鼓攻太鼓、喇叭、太平簫、高音を

そらし、飄々とこそ聞えけれ。すは我々を見咎めて敵の取巻く攻太鼓

か、又は狐のなす業か。茫然たる其の折ふし、空凄じく風起り、砂を穿ち

どうくく、竹葉颯と巻き立てく、吹き折る竹は劔の如く、すさまじ

なんども愚かなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、扱は異國の

虎狩な、あの鉦太鼓は勢子の者、爰は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛

獸の所爲と覺えたり。二十四孝の揚香は、孝行の徳によつて、自然と遁

れし惡虎の難、其の孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて

力始め、神力ますく、日本力、及でむかふは大人氣なし、虎は愚か象でも

鬼でも一挫ぎ、尻引つからげ身づくろひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も恐れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と共に荒れたる猛虎の形、ふじ根に面をすりつけ

すりつけ、岩稜に爪とぎ立て、二人を目がけいがみかゝるを事もせず、

弓手に擲り馬手に受け、振つて懸かれば身をかはし、撓めばひらりと乗

り移り、上になり、下になり、命競べ根競べ、聲を力にゑい、虎の怒

り毛怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛を毫られ、

兩方共に息疲れ、石上に突立てば虎も岩間に小首を投げ、大息ついたる

其の響吹、鬪吹くが如くなり。母藪蔭より走出で、やあ、和藤内、神國

に生れて神より受けし身體、髮膚畜類に出合ひ力立てして怪我するな。

日本の地は離るとも、神は我が身に五十鈴川、大神宮の御祓納受などか

なからんや、と、肌を守りを渡さるれば、實に尤と押戴き、虎に差向け、差上

ぐれば、神國神祕の、其の不思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾を偃せ、耳を垂れ、

晋の揚香十四歳の時、父と農業してゐた所が虎が出た。揚香は手に寸鐵もなかつたので、吾が身を忘れて虎の頸を縊した。虎は驚いて父を放つて逃げ去つたといふ。  
西天の獅子王  
西天は印度。獅子は百獸の王であるから獅子王といふ。  
大童  
髪を振り亂したさま。  
神より受けし身體、髮膚受之父母、不致毀傷、孝之始也。(孝經)  
始め神國に生れてと云ひ出たから、神よ



リ受けしと云つたのである。大神宮の御祝伊勢大神宮で受けた災難祓除の守札。

天斑駒云々素盞鳴尊が天の斑駒を捕へてその皮を剥がれた故事をいふ。

風來人漂著の人。

しやぐわん

これは作者の田まかせの語であらう。

笑つばに入り深く笑み興ずること。

餓鬼も人数

つまらないものでも、時に取つては多少の效がある時にいふ諺。

舌長し言ひ過ぎたも

じりり／＼と四足を締め、恐れわな、き岩洞に隠れ入る。尾筒を掴んで跳ねかへし、打伏せ／＼、怯む所を乗り懸かり、足下にしつかと踏まへしは、天斑駒素盞鳴尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。

かゝる所に勢子の者群り來る其の中に、大將と思しき者大音上げ、やあゝ、汝奴は何國の風來人、我が功名を妨ぐる。其の虎は忝くも主君右將軍李踏天より、韃靼王へ獻上の爲、狩出したる虎なるぞ。早々渡せ、異議に及ばば打殺さん。しやぐわん／＼と喚きける。李踏天と聞くよりも、願ふ所と笑つばに入り、やあ餓鬼も人数、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。左程欲しがる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら石花菜とやら、爰へ突出し、詫言させい。直に逢うて用もある。さもない内は、いかな事ならぬ／＼と睨め付くる。「やあ物な言はせそ討取れ」と、一度に劍をはらりと抜く。心得たりと守りを虎の首にかけ、母の傍に引き据うれば、繫ぎし如くに働かず。を、心安

のを属倒するにいふ語。

かり鉢

不明。雁股鉢の略ではなからうか。

數槍

數が多くて得易い槍即ち下等な槍で足輕等の持つもの。

三世の恩

親子は二世、夫婦は三世、主従は三世。

月代

額から頂にかけて髪を剃り去つたもの。

頭の鉢の水

頭の鉢即ち頭蓋骨と鉢の水即ち髪を揉むに要する水鉢の水との兩意を兼ねる。

鉢の縁語。頭

しと太刀さしかざし群る中へ割つて入り、八方無盡に割り立て／＼撫で捲くる。

勢子の大将安大人、官人引き具し立ち歸り、「おのれ老耄餘さじ」と一文字に切り懸かる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加はつて、むつくと起きて身慄ひし敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛び蒐る。こは敵はじと安大人、勢子の者が差いたる劍かり鉢、數槍手に當るを幸に、投げ付け投げ付け打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引咬へ／＼、岩に打當て微塵になす、刃の光り玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物つくれば、官人ども、色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内、「どつこいやらぬ」と顯れ出で、安大人が素首を掴んで差上げ、くる／＼と振廻し、ゑいやつと打付ければ、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしびて失せにけり。此の勢ひに官人ばら、跡へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立ちに突つ立つたり。「あゝ、申し、御堪忍御免々々」と手を合せ、土に喰ひ付き泣き居



を傷け書ふこと。

絲髻厚鬢

月代を廣くし、鬢の髪を細くして結うたのを絲髻、月代を狭くし、鬢の髪を廣くして結うたのを厚鬢といふ。

二櫛半のばら

髪を結ふに、十分梳かないで粗略に手早くするを二櫛半といひ、随つて鬢附や油を用ゐないから髪がばらけ亂れたまゝである。

村雨々々

嚏々と尾韻を合せるだけでこれも作者の手段であらう。ぼつ立てるさあ、行けと逐ひ立てる意。

たる。

和藤内虎の背を撫でて、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手並み覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が、倅九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮柗檀皇女に巡りあひ三世の恩を報ぜん爲父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ命惜しくば味方に付け。いやといへば虎の餌食。いやか、おうか。と詰めかくる。「なう何のいやでござりましよ。韃靼王に従ふも李蹈天に従ふも命が惜しさ。向後おまへの御家來ども、お情頼み奉る。」と地に鼻着けて畏る。「を、出來したく。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代、そつて元服させ、名も改めて召し仕はん。」と指添の小刀はづさし、是も當座の早剃刀、母も手々に受け取つて並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、絲髻、厚鬢、剃刀、次第、また、く間に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人

手振り  
供人。従者。  
ちやぐちやぐ左衛門

以下異國の名を人の名に附けて呼ぶ。中には作者の出まかせに附けたものもある。

互に顔見合せて、頭冷つく風引いて、嚏々村雨々々と、涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎次郎迄、面々が國所、頭字に名乗り、二行に立つてぼつ立てる。「承り候。」とお先手の手振りの衆、ちやぐちやぐちや左衛門、束蒲塞、右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、占城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉郎もうる左衛門、ぢやが太郎兵衛さん、とめ八郎、英吉利兵衛、今参りの御供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて、孝行の名を取り口を取り、國を取る。譽は異國本朝に踏跨げたる鞍、鐙、虎の背中に打乗つて、威勢を千里に顯せり。(第二段)

二 獅 子 が 城



仁ある君云々  
慈父不能愛  
無益之孝、仁  
君不能善、蓋  
無用之臣。  
(曹植求の自  
試表)

石火矢  
昔、用ひた大  
砲で、たまは  
初め石、後には  
鐵・鉛を用ひ  
た。

仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず。慈ある父も益なき子は愛する事能はず。大和唐土様々に道の巷は別るれど、迷はで急ぐ誠の道赤壁山の麓にて、親子三人巡り合ひ、我が聳とばかり聞及ぶ五常軍甘輝が館城、獅子が城にぞ着きにける。聞きしに優る要害は、まだ冴返る春の夜の霜に閃く軒の瓦、鯨鉦天に鱗振りて、石壘高く築き上げたり。濠の水藍に似て繩を引くが如く、末は黃河に流れ入り、樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧す、矢狹間に弩隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置き、すはと云は、打ち放さん其の勢、和國に目馴れぬ要害なり。一官案に相違し、亂世といひ、かゝる厳しき城門事々しく、夜中に敲き、聞きも馴れぬ舅が日本より來りしなんと云ふとも、誠と思ひ取りつぐ者もあるまじ。假令娘が聞きたりとも二歳で別れ、日本へ渡りし父と如何なる證據を語るとも、容易く城内へ入れんことかたかるべし。如何はせん」とぞ叫きける。和藤内聞きも敢へず、今更驚く事ならず、一身

一口商ひ  
一言で賣買の  
決定する商ひ  
又轉じて、一  
言で諾否を決  
せしめること。  
行逢姉  
普通は異父同  
母の姉をいふ  
が、こゝは異  
母同父の姉の  
意。

の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前、遂に見ぬ舅よ聳よと親みだてして、不覺を取らんより、頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否と云は、即座の敵、二歳で別れし娘なれば、我等とも行逢姉、彼奴孝行の心あらば、日本の風も懐しく、文の便りもあるべきに、頼まれぬ心底、我竹林の虎狩に従へし島夷を軍兵の元手にして、切り靡ける程ならば、五萬や十萬勢の付くは隙いらす、何の人頼み、此の門蹴破り不孝の姉が首捻ち切り、聳の甘輝と一勝負」と躍出づれば、母縋りつき押しとゞめ、其の娘御の心入れは知らねども、夫につれて世の中の儘にならぬは女のならひ、父とは親子、御身とは姉弟、他人は自ら一人にて、海山千里を隔てても繼母といふ名は遁れず。娘の心に親兄弟を慕ふまい物でもなし。其の所へ切りこんで日本の繼母が妬みなりといはれんは、我が恥ばかりか日本の恥、御身不肖の身を以つて韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代に返さんと大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て我が身の無念を堪忍し



人を懐け従へ一人の雑兵も、味方に招き入るるこそ軍法の元と聞く。況して聶の甘輝は一城の主、一方の大將是を味方に頼むこと大方にてなるべきか、心を收め案内せよ」と制すれば、和藤内門外に大音上げ、五常軍甘輝公に直談申したき事あり。開門々々」と敲きしは城中響くばかりなり。

當番の兵士聲々に、「主君甘輝公は大王の召によつて昨日より出仕あり。何時御歸りも計られず。御留守といひ、夜中といひ、何物なれば直談とは推參至極いふ事あらばそれから申せ。御歸りの節披露して取らすべし。」とぞ呼ばはりける。一官、小聲になり、「いや人傳に申すことならず。甘輝公が留守ならば御内室の女性へ直に逢うて申すべし。日本より渡りし者と申せば合點のある筈」といひも果てぬに城中騒ぎ、「我々さへ面も拜まぬ御臺所、對面せんとは不敵者殊に日本人とや油斷するな。」と高提灯、銅羅鏡、鏡、鏡を打立て、塀の上には數多の兵、鐵砲の筒先

推參  
無禮なこと。

鏡鉞

佛家で用ひる  
樂器。響銅と  
いふ合成金で  
作り、皿のや  
うに中が凹ん  
である。二枚  
撃ち合せて聲  
を發する。  
打ちみしやぐ  
粉微塵に叩き  
つぶす。

揃へ、石火矢放して打ちみしやげ、火繩よ玉よと轟きける。奥へかくとや聞えけん、妻の女房樓門へ駈け上り、「あゝ騒ぐなく、聞き届けて自らがそれよと聲をかくる迄、鐵砲放すな粗忽すな。なうく、門外の人々、五常軍甘輝が妻錦祥女とは我が事、天下悉く韃靼の大王に靡き、世に従ふ我が夫も大王の幕下に屬し、此の城を預り、守り厳しき折も折夫の留守の女房に逢はんとは心得ず。さりながら日本とあれば懐し。身の上を語られよ、聞かまほしや」といふ中にも、若しや我が親か何故尋ね給ふぞと、心もとなさ危なさに、懐しさも先立つて、「兵ども粗相すな、むざと鐵砲放すな」と心遣ひぞ道理なる。

一官も初めて見る娘の顔も朧月、涙に曇る聲を上げ、「粗忽の申し事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍母は當座に空しくなり、父は逆鱗被り日本へ身退く其の時は二歳にて、親子名殘の憂き別れ、辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞きつらん。我こそ父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦



胡亂  
うるんは胡亂  
の廣東音であ  
るといふ。合  
點のゆかない  
こと。

しやつめ  
きやつめ。や  
つら。

に年を経て、今の名は老一官、日本で産れし弟は此の男、是なるは今の母、私に語り頼みたき事あつて成り果てし此の姿、恥をつゝ、まず來りしぞ。門を開かせたべかし。と、染々口説く詞の末、思ひ當りて錦祥女、扱は父かと飛び下りて、縋りつきたや、顔見たや、心は千々に亂るれど、さすが一城の主、甘輝が妻、下下の見る所、涙を押へて、一々覺えある事ながら、證據なくは胡亂なり。自らが父といふ證據あらば聞かまほし。といふより兵口々に、證據々々證據を出せ。と、はて親子といふより別にかはつた證據もなし。と、そりや曲者よ。と、鐵砲の筒先き、一度にはらりと突つ懸くる。和藤内かけ隔て、無用の鐵砲ほんともいはせば撫で切りにして呉れん。いや、しやつめともに遁すな。と、火蓋を切つて取り圍み、證據々々と責めかけて、既に危く見えにけり。

一官兩手をあげて、あゝ、是々證據は其の方にある筈、一歳唐土を立ちのく時、成人の後形見にせよと、我が形を繪にうつし、乳母に預け置きつ

るが、老の姿はかはるとも、佛殘る繪に合せ、疑を晴れ給へ。なう其の詞がはや證據。と、肌に放さぬ姿繪を高欄に押開き、柄付の鏡取出し、月に映るふ父の顔鏡の面に近々と寫し取つて引比べ引合せて、よく見れば繪にとゞめしは、古の顔も艶ある翠の鬢鏡は今の老窶れ、頭の雪とかはれども、かはらで殘る面影の、目もと口もと其の儘に、我が影にもさも似たり。父方譲りの額の黒子、親子の印疑なし。扱は誠の父上か。なう懷しや慕はしや。母は冥途の苔の下、日本とやらに父上ありとばかりにて、便りを聞かん知邊もなく、東の果と聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を披き、是は唐土、是は日本、父は爰にましますよと、繪圖では近い様なれど、三千餘里のあなたとや。此の世の對面思ひ絶え、若しや冥途で逢ふ事も、死なぬ先から來世を待ち、歎きくらし泣きあかし、二十年の夜晝は、我が身さへ辛かりし。よう生きて居て下さつて、父を拜む有難や。と、聲も惜しまぬ嬉し泣き。一官は咽せ返り



樓門に縋りつき、見上ぐれば見下ろして、心餘りて詞なく、盡きぬ涙ぞ哀  
れなる。武勇に逸る和藤内母諸共に伏し沈めば、心なき兵も零す涙に  
鐵砲の火繩も濕るばかりなり。

稍ありて一官「我々是れへ來る事、聾の甘輝を密に頼み度き一大事、先  
々御身に語るべし。門開かせて城内へ入れてたべ。」なう仰せなくとも  
是れへと申す筈なれども、此の國未だ軍なかば、韃靼王の掟にて、親類  
縁者たりとも他國者は城内へ堅く禁制との掟なり。されども是れは  
格別。こりや兵共如何せん。」とありければ、了簡もなき唐人ども、「いやい  
や思ひも寄らぬ事、成らぬ。」歸去來、びんくはんたさつ、ぶおんぶ  
おん。」又鐵砲を差し向へば、人々案に相違して、呆れ果てて見えけるが、  
母進み出で、「尤も、大王より掟とあれば力なし。さりながら年寄つ  
た此の母に、何の用心入るべきぞ。彼の姫に只一言物語するばかり、妾  
一人通して給べ。誠浮世の情ぞ。」と、手を合せても聞き入れず、「否々、女と

歸去來

作者が唐音を  
眞似た頓作で  
意味はない。  
歸去來の字は  
其の宛字。  
びんくはん云  
々

身晴れ  
罪のないこと  
が明白になる  
こと。

ごんな事  
間の抜けた事。  
大事な  
差支へない。  
構はない。

高手  
小手  
人を後手に頸  
から脇を掛け

て宥免せよとの仰せはなし。然らば我々了簡して、城内にある中は繩  
をかけて縛り置き、繩付きにして通せば、韃靼王へ聞えても、主君の言譯  
我等が身晴れ、急いで繩かゝれよ。夫が否なら、歸去來、びんくはん  
たさつ、ぶおん。」と睨めつくる。和藤内眼をくわつと怒らし、「やい毛  
唐人、汝奴等が耳は何處に付いて何と聞く。恭くも鄭芝龍一官が女房、  
身が母、姫の爲にも母同然、犬猫を飼ふ様に繩付けて通さんとは、日本人  
はどんな事聞いて居ぬ。小六ヶ敷い城内入らいでも大事な。さあ  
ござれ。」と引き立つる。母振り放し、それ、今言ひしを忘れしか。大  
事を人に頼む身は、幾度か様々の憂目もあり恥もある。繩はおろか、足  
枷、手枷にかゝつても、願さへ叶は、瓦に金を換ふるが如し。小國なれ  
ども日本は男も女も義は捨てず。繩懸け給へ一官殿。」と恥しめられて  
力なく、用心の腰繩取出し、高手小手に縛りあげ、親子が顔を見合せて、笑  
顔をつくる日本の人の育ちぞ健氣なる。



て厳しく縛り  
あげることを。

化粧殿  
化粧する御殿。

右左  
たより。消息。  
菩提門・無明

前に生死の界  
とあるを受け  
事の成就する  
を菩提門に、  
破れるを無明  
門に喩へてあ  
る。菩提門と  
は極樂往生の  
入口、無明門  
とは煩惱への

貫の木  
入口をいふ。  
門を鎖す時に  
用ひるくわん  
ぬき。前に菩  
提門・無明門  
とあるのを直  
に城門の意に  
受けて、かう  
續けたのであ  
る。

通事  
通辭とも書く  
通辯・通譯の  
意。

錦祥女も堪へかぬる歎きの色を押包み、何事も時世にて、國の掟は是非もなし。母御は自らが預る上は氣遣ひなし。何事か存せねども、御願の一通りお物語承り、夫甘輝に言ひ聞かせ、何卒叶へ参らせん。さて此の城の廻りに掘つたる堀の水は、自らが化粧殿の庭より落つる遣水の末は黄河の川水と流れ入る水筋なり。夫の甘輝が聞き入れて御願成就せば、白粉解いて流すべし。川水白く流るゝは、めでたき驗と思召し、勇んで城に入り給へ。又御願ひ叶はずば紅をといて流すべし。川水赤く流るゝは、叶はぬ右左と思召し、母御前を受取りに門外まで出で給へ。善惡二つは白妙と唐紅の川水に心を付けて御覽ぜよ。さらば〜と夕月に、門の戸さつと押し開き、伴ふ母は生死の界、菩提門を引さかへて、是は浮世の無明門、貫の木丁と下す音、錦祥女は目もくれて、弱きは唐土女の風、和藤内も一官も泣かぬが日本武士の風、大手の門の閉開に石火矢打つは韃靼風、一つに響く石火矢の音に聞くさへ遙かなり。

夢も通はぬ唐土に通へば通ふ親子の縁、恩愛の綱結び合ひ、結ぶ餘りの縛繩かゝる例は異國にも、まれに咲き出す雪の梅、色音は同じ鶯の聲にぞ通事入らざりし。

錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじ待遇す有様は、天上の榮花とも、又高手小手の縛は十惡五逆の科人とも、見る目いぶせく痛はしく、様々に宮仕へ誠の母と勞りし心の内こそ殊勝なれ。腰元の侍女共寄り集り、何と日本の女子見てか。目も鼻も變らぬが可笑しい髪、結ひ様、變つた衣裳の縫ひ様、若い女子も彼であらう。あゝ、恥かしい事ぢやあるまいか。「いやいや、迎も女子に生れるなら、此方や日本の女子になりたい。何故といや、日本は大きに和ぐ大和の國といふげな、何と女子の爲には、大きに和かな好もしい國ぢやないかいの。」「ほう有難い國ぢやの。」と眼を細めてぞ領きける。錦祥女立出で、是々面白さうに何いふぞ。彼方は自らとは



如才もなう  
ぬけめもなく。

龍眼肉

龍眼といふ植  
物の果實。

濃汁

料理の一種で  
鯉などを丸切

りにして、濃  
い味噌汁でよ

く煮たもの。

濱焼

鯛などを、焼  
濱の掃籠の下

に生けたまゝ  
埋め入れ、焼

焼く火氣を利  
用して蒸し焼

きにしたもの。  
齒に合ふ  
その人に適す

生さぬ中の母上なれば、孝行といひ、義理といひ、眞實の母より重けれど、國の掟詮方なく縛り搦めるおいとしさ。韃靼王へ漏れ聞え、良人に咎あらうかと宥免もなり難く、難義といふは我が身一つ。孰れも頼む食物も違ふとや、お口に合ふ物伺うて進せてくれよ。」と宣へば、「いや申し如才もなうお料理も念入れ、龍眼肉のお飯、お汁は家鴨の油揚、豚の濃汁、羊の濱焼、牛の蒲鉾種々にして上げてても、なう忌々しい、そんな物いやいや、縛られて手も叶はぬ、つい握飯をしてくれ。」と御意なさるる。其の握飯といふ喰物は、何んの事やら如何も合點參らず、皆打寄つて詮議致せば、日本では相撲取をむすびと申すげな。それ故方々尋ねても、折しも悪うお齒に合ひさうな相撲取が切物なり。」とぞ申しける。

表に轟く馬車、御歸館と呼ばはつて、唐櫃先に昇き入れさせ、優々たる

絹笠も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其の勿體、錦祥女出迎ひ、何とて早

き御退出、御前は何と候ぞや。」されば、韃靼大王叡感深く過分の御

る氣に合ふ。  
切物

品切れとなつ  
た物。

勿體

物々しいこと  
仰山なこと。

加増十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠裝束賜はり大役仰付けらるる。家の面目これに過ぎず。」とありければ、「それは御手柄めでたい。」なう家の吉事は重なるもの、日來ゆかしい逢ひたいと申し暮し、父上、日本にて設け給ひし母兄弟、頼みたきことありとて門外まで來り給へども、お留守といひ厳しき國の掟を憚り、男子は皆還し母上ばかりを留め置きしが、猶も上の聞えを畏れ、繩をかけてあれあの奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底、かなしさよ。」とぞ語りける。「むう繩かけしとは好い了簡、上へ聞えて言譯あり。随分もてなせ、いざまづ我も對面せん、案内申せ。」といふ聲の漏れ聞えてや、妻戸の内、なう錦祥女、甘輝殿のお歸りか。爰は餘り高上り、妾それへ」と立ち出づる。容貌はいとど老木の松の、しめからまれし藤葛、起居苦しき其の風情、甘輝見る目も悼はしく、誠世の中の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ其の甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし。



優曇華  
優曇華は印度  
の傳説上の植  
物で、三千年  
に一度花が咲  
くといふ。そ  
れから極めて  
稀なことの譬  
へに用ひる。

それ女房、お手が痛むか氣をつけよ。優曇華の客人いさゝか粗略を存せず、何事なりとも此の甘輝が身に相應の事ならば、必ず心置かるな。」と世に睦じく待遇せば、老母顔色打ち解けて、「を、頼もしい、忝ない。其の詞を聞くからは、何しに心置くべきぞ。頼み入りたき大事、密に語り申したし。是へく。」と小聲になり、なう我々此の度唐土へ渡りし事娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ所へ、大明の帝の御妹梅檀皇女小船に召され吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語聞くと齊しく、父は素より明朝の陪臣、我が子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を亡し、昔の御代に翻し、姫宮を帝位に即けんと先づ日本に残し置き、親子三人此の唐土へ來れども、淺ましや草木まで皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし。偏に頼み參らする。是が拜む心ぞ。」と額を膝に押下げ押

下げ、只一筋の心ざし思ひ込うてぞ見えにける。

甘輝大いに驚き、「むう扱は聞き及ぶ日本の和藤内と申すは、此の錦祥女とは兄弟鄭芝龍一官の子息候ふな。む、武勇の程唐土まで隠れなく頼母しき思ひ立ち、尤もかくこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下、帝ほろび給ひてより恃むべき主君なく、韃靼の恩賞被り、月日を送る折から望む所の御頼み、早速味方申したきが、少し存ずる旨あれば、急に應とも申されず。とくと思案し御返事を。」と言はせも果てず、「あ、そりや御卑怯な詞が違ふ、これ程の一大事口より出せば世間ぞや、思案の間に漏れ聞えて不覺を取り悔んでも還らず、お恨みとは思ふまじ、成れ成らざれ御返事を、さあ只今。」と責めつくれば、「むう急に返答聞きたくば易いこと、如何にも五常軍甘輝和藤内が味方なり。」といふより疾く錦祥女が胸元取つて引寄せ、劔引抜いて咽笛に差し當てる。老母あはてて飛びかゝり、二人が中へ割つて入り、持つたる手を踏み放し、娘を背



似而非者  
つまらない者  
いかに好しい  
者。

中に押遣り、仰向に重り臥し大聲上げて、是れ情なや何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺し殺すが唐土の習ひか。心に染まぬ無心を聞くも、女房の縁ある故と心腹が立つての事か、但しは狂氣か。たまたま始めて来て見たる母親の目の前で、殺さうとする無法人、日比が思ひ遣られた。味方をせずばせぬまでよ。今迄と違うて親のある大事の娘、これ怖い事はない、母にしつかと取つつきや。と、隔ての垣と身を捨て、圍ひ嘆けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情のありがたさ。「怪我遊ばすな。」とばかりにて、共に涙に咽びけり。

甘輝飛び退つて、を、御不審御尤、全く某無法にあらず、狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召し、此の頃日本より和藤内ワフチといふ似而非者ニホニハの小僕下劣の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け大明の世に翻さんと此の土に渡る。彼が討手誰ならんと、數十人の諸侯の中より、此の甘輝を選び出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を賜はる。和藤内

を我が妻の兄弟と今聞く迄は夢にも知らず、彼奴日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出し、朝比奈辨慶とやらんが勇力あるとも、我れ又孔明が腸に分け入り、樊噲項羽が骨髓をかつて、一戦に追つて追ひ捲り、和藤内が月代首提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合せず矢の一本も放さず、ぬく、味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞き怖ぢする者でなし、女に絆され縁に引かれ、腰が脱けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雑口にかけれられんは必定、然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し。恩愛不便の妻を害し、女の縁にひかされざる義信の二字を額にあて、さつはりと味方せん爲め。やい錦祥女、留むる母の詞には慈悲心籠り、殺す夫の劍の先には忠孝籠る。親の慈悲と忠孝に命を捨てよ女房。と理非を飾らぬ勇士の詞を、聞きわけた、身に適うた忠孝親に貫うた此の體孝行の爲捨つるは惜しいとは思はぬ。と母を押退けつ、と寄り、胸押明くれば引寄せて、見る目危き氷の劍、なう悲しや。と駈け隔て、押分けんにも



邪慳  
無慈悲。

詮方なく、退かんとするに手は叶はず、娘の袖に喰ひ付いて引退くれば夫が寄る。夫の袖を啜へて引けば、娘は死なんと又立ち寄るを、口に啜へて唐猫の、時を換ふる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋り付き、一生親知らず、終に一度の孝行なく、何で恩を送らうぞ。死なせて給へ母上。」と口説き歎けば、わつと泣き、なう悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人、残り二人の父母は産み落した大恩あり、中に一人の此の母は憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今爰で死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を悪んで見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは我が日本の恥ぞかし。唐を照す日影も、日本を照す日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始め、仁義五常情あり。慈悲専らの神國に生を享けた此の母が、娘殺すを見物し、そも生きて居られう

錦中絶ゆる  
立田川紅葉亂  
れて流るめり  
渡らば錦中や

か。願くば此の繩が日本の神々の注連繩と顯はれ、我れを今絞め殺し、屍は異國に暴すとも、魂は日本に導き給へ。」と聲を上げ、道もあり情もあり哀も籠る口説き泣き。錦祥女は縋り付き、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して、そゞろ涙に暮れけるが、稍ありて甘輝席を打つて、「はあ是非もなし力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對、老母をこれに留め置き、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して所を尋ね送り還し参らせよ。」いや送るまでもなく、此の遣水より黄河まで、好き便りには白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎ひにお出である筈、いで紅解いて流さん。」とつねの一間に入り、にけり。母は思ひにかき暮れて、思ふに違ふ世の中を、立ち歸りて夫や子に、何と語り聞かせんと、思ひ遣る方涙の色、紅より先の唐錦、錦祥女は其の隙に、瑠璃の鉢に紅解き入れ、是れぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる、名残は今ぞと夕波の泉水にさら〜、落ち瀧津瀬の紅葉と、浮世の秋をせき下し、共に染めた



絶えなむ。(古今  
今案、讀人知  
らず)

る泡沫も、紅潜る遣水の、落ちて黄河の流れの末和藤内は嚴頭に蓑打ち被ぎ座を占めて、赤白二つの川水に心を付けて水の面、南無三寶紅が流るる。扱は望は叶はぬ、味方もせぬ甘輝めに、母は預け置かれず。」と、踏み出す足の早瀬川、流れをとめて行先の堀を飛び越え、塀を乗り越え、籬透垣踏み破り、甘輝が城の奥の庭泉水にこそ着きにけれ。(第三段)

## 奥の細道

奥の細道一卷は元祿二(一三三)四九年三月、松尾芭蕉がその門人河合會良と共に江戸を發し、兩毛・奥羽の名所舊蹟を探り、北陸を経て美濃に出で伊勢に詣でようとするまで、日子六ヶ月、行程六百餘里の行脚日記である。芭蕉、名は宗房、松尾儀右衛門の三男、伊賀國柘植に生れ初め上野城主藤堂家の世子良忠に仕へた。二十三歳の時北村季吟の門に入つて貞門の俳諧並に國學を學び、又伊藤坦庵に儒を、佛頂和尚に禪を、森川許六に畫を修めた。寛文十二年(一七三二)江戸に下つて談林派の俳諧を學び、後深川の芭蕉庵に入り、貞享の初年蕉風を開いた。尋いで諸國を行脚し、奥羽遊歴後は暫く幻住庵(石山の奥)に住してゐたが、又江戸に下り、元祿七年九月大阪に至り、その翌月同地で歿した。享年五十一。



一門出

月日は云々  
天地者萬物之  
逆旅、光陰者  
百代之過客。  
(唐の李白の  
春夜宴桃李園  
序)

去年  
元祿元年。

江上の破屋  
江戸の芭蕉菴  
隅田川に近い  
ので江上とい  
つたのだ。

白河の關  
磐城國白河郡  
そらろ神  
人の心をそ  
り立て迷はず  
神といふ意で  
ある。

道祖神  
道路を掌る神。  
三里  
膝頭の下の外  
側で少し窪ん

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるものは日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予も、いつれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の關越えんと、そらろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、任める方は人に譲り、杉風が別墅にうつる。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれる

だ所。灸をす  
ゑるの健脚  
の爲といひ傳  
へてゐる。

杉風  
芭蕉の門人。  
鯉屋藤左衛門。  
別墅  
深川六間堀に  
あつた。

上野・谷中  
東京市下谷區。  
千住  
東京の北東口。

行く春  
陰曆は三月末  
を春の終とす  
る。

吳天に云々  
吳楚は都に遠  
いので、吳天  
といへば、遠  
い空の意に用  
ひられる。

早加  
今草加とかく  
武藏國北足立  
郡、奥州街道  
にあたる。

ものから、富士の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと、心細し。むつまじきかぎりには、宵よりつとひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

之を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせ、奥羽長途の行脚、唯かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮のうらみを重ねといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと、頼みの末をかけ、其の日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づくるしむ。唯身すがらにといで立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎゆかた、雨具、墨筆のたぐひあるはさりがたき、銭などしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれる



紙で作った衣。さりがたき錢斷りかねて貰つた錢別品。わりなけれ何とも仕方がない。

開基 寺を創建する事、又その人。八荒 八方の國外の蠻地。轉じて世界。

黒髮山 男體山のことである。裏見瀧 荒澤の瀧とも云ふ。

こそわりなけれ。

### 二日 光

卯月朔日、日光の御山に詣づ。往昔この山を二荒山ニクウサンと書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給へりと聞く。千歳未來をさとり給ひけるにや。今この御光一天に輝きて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖處すみかおだやかなり。

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髮山は霞かゝりて雪未だ白し。二十餘町山を登りて瀧あり。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落つ。窟に身をひそめて瀧の裏より見れば、裏見の瀧とぞいへる。

しばらくは瀧にこもるや夏の初

### 三 白河の關

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便求めしも理なり。中にも此の關は三關の一にして風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれぬ。卯の花をかざしに關の晴着かな

とかくして越えゆくまゝに阿武隈川をわたる。影沼といふ所を行く。須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日留めらる。先づ白河

三關 近江の逢坂・伊勢の鈴鹿・白河を三關と云ふ。風騷 風流。風雅。清輔の筆 藤原清輔の書



いた「袋草子」を云ふ。  
等躬 須賀川宿の名主で、相樂伊左衛門といふ等躬はその號である。  
はかばかしう 仕事のはかどる事。

#### 四 平 泉

十二日 五月十二日。  
平泉 陸中國西磐井郡。  
雉兔芻蕘 獵師及び樵夫。  
石の巻 陸前國牡鹿郡。  
黄金花さく すめろぎの御代榮えんとあづまなるみち

の關いかに越えつるかと思はる。長途の苦身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を断ちてはかたしう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

十二日、平泉へと心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の巻といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつゞきたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ

のく山に黄金花さく(萬葉集、大伴家持) まどしきに同じい。  
袖のわたり 陸前國桃生郡橋浦村。  
尾ぶちの牧 青森縣上北郡六ヶ所村。  
尾駈かといふ 眞野の萱はら牡鹿郡大字眞野。  
長沼 陸前國登米郡新田村の東南。  
戸伊摩 同郡登米町のことか。  
三代 藤原清衡・基衡・秀衡。  
高館 今の陸中國西磐井郡平泉村宇原館にあつた。  
金雞山 秀衡の築いた

道まどひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まの萱はらなどよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して平泉に至る。其の間二十餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金雞山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡  
卯の花に兼房見ゆる白髪かな  
かねて耳驚かしたる二堂開張す。經堂は三將の像を残し、光堂は三



山。黄金の雞をその山に埋めたといふ。泉が城。秀衡の三男、泉三郎忠衡の居城。

國破れて云々。國破山河在、城春草木深。(杜甫の春望詩)

二堂。經堂と光堂とを云ふ。

兼房

義經の郎黨、増尾十郎、年六十餘、白髮を被り奮闘して死んだ。

ごてん。御殿林といひ東田川郡にある。

はらふら。隼の瀬といひ北村山郡掃川の北一里半にある。

板敷山

東田川郡。

酒田

羽前國酒田町。

象潟

羽後國由利郡象潟町。

方寸を責め

象潟に遊び度い念が胸に満ちて居ると云ふ意。方寸は胸のこと。

鳥海の山

羽後の北境。

雨も又云々

水光激瀧晴偏好、山色朦朧雨又奇。(蘇東坡西湖の詩)

能因島

能因法師の庵を結んで居たと云ふ所。

花の上云々

きさがたの櫻

代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風ヒラカゼにやぶれ、金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍ひ、藁を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念となれり。

五月雨のふり残してや光堂

### 五 最上川

最上川は、みちのくより出でて、山形を水上とす。ごてんはやぶさなといふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな船といふならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立ち、水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

### 六 象 潟

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責め、酒田の港より東北の方山を越え磯を傳ひ、いさごをふみて其の際十里。日影や、かたぶく頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として、鳥海の山かくる。闇中に攀索して、雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苫屋に膝をいれて、雨の霽るゝを待つ。其の朝天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因島に船を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に船をあがれば、花の上うゑのうゑとよまれし櫻の老木、西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干



は波にうづも  
れて花の上こ  
ぐあまのつり  
船（西行の歌）

むや／＼の關  
羽後國飽海・  
由利二郡の境  
なる三崎峠の  
關所。

滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや。此の寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影うつりて江にあり。西はむや／＼の關路をかざり、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙に、海北に構へて、浪打入る所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、面影松島にかよひて、又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

### 七市振の關

加賀の府

金澤を云ふ。  
府とは古の國  
司廳の置かれ  
た所をいふの  
だが後には轉  
じてたゞ其の  
國の都の意と  
なつた。

荒海や云々

此の句は田雲  
崎に於ての作  
で此の紀行中  
第一の名句と  
いはれて居る。

酒田の餘波、日を重ねて、北陸道の山を望み、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞ゆ。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩を改めて、越中の國市振の關に到る。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

荒海や佐渡に横たふ天の川

### 八金澤

くろべ四十八が瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云ふ浦に出づ。擔籠の藤浪は、春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋ねれば、是より五里磯傳ひして、むかふの山かげに入り、蟹の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひおどされて、加賀に入る。

那古

「那古の蟹の  
釣する舟は今  
こそは舟棚打  
ちてあへてこ

くろべ

黒部川。越中  
三日市と魚津  
との間を流る。



ぎ出め。と萬葉集にある古來の名所である。くりか、ら、谷。俱利伽羅峠の谷。一笑。芭蕉の門人。追善。死者の年回などに佛事供養すること。

わせの香や分け入る右は有磯海  
卯の花山くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日なり。こゝに大阪より通ふ商人何某といふ者あり、それが旅宿を共にす。一笑といふ者は、この道にすける名のほのゝ、聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、塚も動け我が泣く聲は秋の風

# 鶉

# 衣

鶉衣四卷は横井也有の俳文二百数十篇を収めたもので、鶉衣とはつきはぎした衣のこゝで、これは無價値な小品文集といふ意味である。此の書は也有の歿後蜀山人の盡力で初篇が上梓せられ、その後、六樹園（石川雅望）等の序文を附して後篇を公にしたもので、俳文が近世の文學史上に列せられる價値のあるのは、實にこの鶉衣の爲である。也有は名古屋の高祿の士で、極めて謹直温厚な人であつた。俳文を最も能くし、詩歌俳句狂歌にも亦巧であつた。天明三年（一四四三）六月八十二歳で歿した。



一 奈良 團うらまの 贊

青によし 奈良の枕詞。  
多能は云々  
この外の事ども多能は君子の恥づる所なり。(徒然草)  
一曲一かなで  
扇の歌舞に用ひられるのに對していふ。  
腰にたゞまれ  
て云々  
扇の腰にさゝれて公の場所に出るをいふ。  
たゞ木の端云々  
法師：たゞ木の端などの様に思ひたらんこそいといとほしけれ。(徒然草)  
雲水

青によし奈良の帝の御時、如何なる叡慮にあづかりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其の道の藝精しからば、多能は無くてもあらまし。彼よ、かしこくも、風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にも合はざれば、腰にたゞまれて公界くわいにへつらふねぢけ心も無し。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならん。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕涼み、晝寝の枕まくらに宿直まゐりして、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に、紙屑籠かみくずかごと相住あひすまして、鼠の足に汚さるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。われ汝に心をゆるす。汝、われに馴れて、はだか身の寝姿を、あなかしこ、人に語る事なかれ。

袴着る日はやすまする團かな (前篇上)

二 蓼 花 巷 記

諸國を遍歴する僧。  
桐の箱云々  
扇の貴族的なの對していふ。

蓼花巷 也有の隱栖。  
一もこの芭蕉 松尾芭蕉は深川の庵に芭蕉一株を植ゑて芭蕉庵と號した。  
五株の柳 陶淵明は宅邊に五柳樹を植ゑて五柳先生と號した。  
榎木云々 徒然草第四十五段にある。  
一本のゆかり 紫の一本故に武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る。(古今集)  
松茸さふ云々

一もこの芭蕉、五株の柳の、其の人の徳にてらされて、枯れぬ名を留めしもあるに、不仕合なる榎木は、ある僧正の號ななに呼ばれて、終に斧の怒をかうぶり、なほ切杭きりかき堀池の名をさへ流しけむ。われ、劍冠の仕途に身を置きながら一つの隱家あり。これを蓼花巷と名づく。蓼花にむづかしき心は無けれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、その一本のゆかりなきにもあらず。「松茸さふ」の聲きけばと、俊成卿の庭もせもなつかしく、世にわびたる様のをかしげなれば自らこれが名とせり。そも此の幽栖無何有の郷に鄰りて、山に向ひ、海にそひ、河あり、野あり、月雪花鳥は四時の詠を供し、時わかぬ松の夕風、竹の夜雨の音までも、聞くにいとはず、見るに乏しき物あらず。城市を出でて遠からねど、人只杖草鞋をもてとはむとせば、たとへ方士がまめは踏出すとも、三輪の山本杉立てる門



山所未詳。松茸さふは松茸賣の呼聲。

無何有の郷仙郷の意。方士が云々

方士即ち仙術に通ずる士の様。に普く駈廻つて足にまめが出来る位。廻つても意。

三輪の山本。我庵は三輪の山本。戀しくは訪ひ來ませ。杉立てる門。(古今集)

ふせやの云々。信濃のその原伏屋といふ所に遠方から見ると簾に似た梢があるが近くで見ると似た木もないといふ話を、畫狐に化されと興じたのである。

宇津の山邊云々

伊勢物語、粟平東下りの條にある。

桃源

陶淵明の桃花源記から求め得ない意に云つたのである。

壺入に云々

費長房が老翁の壺中に跳入つた様に、忽ち我が別世界に尋ね當るだらうとの意。

それもなく音の云々

もしなかば蝶々籠の苦やうけん。(西山宗因)

莊周が夢云々。莊周といふ者或時夢に胡蝶になつて飛廻つたといふ故事。

古今の序にも花になく鶯

に迷ひて、ふせ屋のは、き木の晝狐に化され、宇津の山邊の道とふべき人にもあはで、再び桃源に棹さす如くならむ。たゞ梅の色も香も知りて、思ふこといふべき人ならば、今も壺入に尋ねあたらん、茅門とは知るべしとなり。

物ずきの蟲は來てなけ蓼の花 (前篇上)

### 三百 蟲 譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。

朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものことさらにも誇り難し。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも、初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きな手柄なれ。

「やがて死ぬけしきは見えぬ」とこのものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草



水にすむ蛙の  
聲をきけば、  
生きとし生け  
るものいづれ  
か歌をよまざ  
りける。(古今  
集序)

古池云々  
古池や蛙飛込  
む水の音。芭  
蕉  
やがて死ぬ云  
々  
やがて死ぬけ  
しきは見えず  
蟬の聲。(芭  
蕉)

貧の學者  
晋の車胤。南  
平の人。  
歌に螢火云々  
螢の語源は、  
「火垂或は火照  
の轉」と云ふ  
故に螢火と云  
へば火が重な  
るから中世以  
後歌道で禁じ  
た。

蜀魂  
蜀の皇帝の魂

槐安之部  
蟻の國の都。  
千丈の堤云々  
千丈之堤以  
蟻蟻之穴潰  
(韓非子)  
蠅は云々  
宋の歐陽修が  
「憎蒼蠅賦」  
を作る。

紙魚は云々  
長嘯子は木下  
勝俊の號。此  
の人「蟬紙  
魚詞」を作る。  
蠅螂の云々  
欲以蠅螂之  
斧、禦陸軍之  
險。(文選)

原・吉原  
富士の南麓、  
東海道に沿う  
た驛の名。  
きりくす云  
々

秋風にほころ  
びぬらし藤袴

に露おく頃ならむ。つくくぼうしといふ蟬は、つくし戀しともいふ  
なり。筑紫の人の旅に死してこのものになりたりと、世の諺にいへり  
けり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこがすや。蟬  
ははかなきためにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。おな  
じ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。蟻は明暮に

いそがしく、世の營みにひまなき人には似たり。東西に聚散し、餌を求  
めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さ  
るも、たよりあしきかたに穴を營みて千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まる  
る蚤はたま／＼にして、猿の手にさぐらるゝ虱は逃るゝこと難かるべ  
し。

蝸牛はたゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家はもち

たれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。蛇蚯蚓の足な  
くても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。蠅螂の瘦  
せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのた  
ぐひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ、原吉原を駕にのりて、富  
士を眺めゆく人には似たり。  
促織鈴蟲、蟻蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木

にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲に  
もおなじ名有りて、松を枯らし人にうとまる。一つ在所に二人の八兵  
衛ありて、ひとり後生をねがひ、ひとり殺生を事とす、これ松蟲のた  
ぐひなるべし。

きりくすのつゞりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻に棲む蟲はわ  
れからとたゞ身の上を歎くらむを、蓑蟲のちよと呼ぶは、母をば慕は



つとりさせて  
ふきりくす  
なく。(古今  
集)

藻 棲じ云々  
あまの刈る藻  
にすむ蟲のわ  
れからと音を  
こそなかめ世  
をば恨みじ。  
(古今集)

養蟲云々  
八月ばかりに  
れば父よ父よ  
とはかなげに  
鳴く。いみじ  
くあはれなり。  
(枕草子)  
七賢  
晋の竹林の七  
賢をいふ。

で、など父をのみ戀ふらむとあやし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、始めて  
ほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあ  
り。蚊張釣りたる家のさま、蚊遣焼く里の烟など、かつは風雅の道具と  
もなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の  
隙なかりけむ。(前篇拾遺)

# 俳句

俳句は連歌の發句から獨立したものであつて、最も短い詩形の一つで  
ある。僅々十七字の短詩形に自然や人事の複雑な趣味相を表現しよう  
とするものであるから、随つて修辭法の最も發達した形を示してゐる  
こと云つてよい。江戸文學に於ては極めて重要な地位を占める純然たる  
藝術的作品であるが、これがかゝる價値を有するに至つたのは松尾芭  
蕉に始まる。爾後明治大正に入つても盛に句作が行はれ、種々の主張  
によつて幾多の流派をも生じて來た。



西山宗因 肥後の人、近畿に放浪し梅翁と云つた。後江戸に出て談林風の一派を開いた。天和二年(三三三)歿。七十七歳。

一

お静かにござれ夕陽いまだ残んの雪  
世の中よ蝶々とまれかくもあれ  
白露や無分別なるおき所

西山宗因

二

花の雲鐘は上野か淺草か  
春雨や蜂の巢つたふ屋根の漏り  
馬に寝て殘夢月遠し茶のけむり  
道のべの木槿は馬に喰はれけり

松尾芭蕉

榎本其角

江戸の人、蕉門十哲の隨一豪放な風格の句作をした。寛永四年(三三三)歿。五十六歳。

三

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲  
明月や池をめぐりて夜もすがら  
蓑虫の音を聞きにこよ草の庵  
初しぐれ猿も小蓑をほしげなり  
金屏の松の古びや冬ごもり  
雪うすし白魚白きこと一寸  
旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

日の春をさすがに鶴のあゆみかな  
鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春  
夕立や家をめぐりて家鴨なく

榎本其角



谷口蕪村  
攝津の人、一時丹後に住んで與謝と改姓した。始めは江戸にゐたが殆ど一生全國を行脚し晩年京都に住した。天明調の代表者であつて修辭の巧緻な印象の華やかな句を作つた。天明三年(一八二二)歿。六十七歳。

夜着をきて歩いて見たり土用干  
明月や疊の上に松の影

四

指南車を胡地に引きさる霞かな  
商人を吠ゆる犬あり桃の花  
行く春やおもたき琵琶の抱き心  
鞘走る友切丸や郭公  
絶頂の城たのもしき若葉かな  
五月雨や大河を前に家二軒  
日はなゝめ關屋の槍に蜻蛉かな

谷口蕪村

小林一茶  
信濃の人、多く江戸にゐた家庭的に辛酸を嘗めたのでその作には生活の反映と見るべきものが大部分を占めてゐる。文政十年(一八二七)歿。六十五歳。

月天心貧しき町を通りけり  
鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな  
蕭條として石に日の入る枯野かな

五

我と來て遊べや親の無い雀  
瘦蛙負けるな一茶これにあり  
ともかくもあなたまかせの年の暮  
古郷や餅に搗き込む春の雪  
もたいなや寝ながらに聞く田植唄  
下駄ころりきやらり彼奴等の夕涼み

小林一茶



寝せつけし子の洗濯や夏の月  
木枯や隣と云ふも越後山  
大名を眺めながらの炬燵かな  
大根引き大根で道を教へけり

# 川 柳

元祿の頃から盛になつた前句附の點者柄井川柳が明和二年(二四二五)に附句だけで意味をなして居るものを選んで集を作つた。それが柳樽ミ云ふのであつて、それ以來二編三編ミ出版され、川柳ミ云ふ點者も何代か續いて、何時か附句だけ獨立して川柳といふ一詩形が出来たのである。川柳の特色は社會の疵處、人生の弱點を捉へ、これを露骨卑近な警句にして皮肉な諷刺を試みる所にある。

附、前句附ミいふのは例へば「そこらあたりを見渡しにけり。」ミ云ふ句を出すミ、これに「掛取が又お留守かミ先を取り。」ミその前に附句をするのである。



千客萬來皆來るとこまるなり  
轉寢の顔へ一册屋根にふき

寢て居ても團扇のうごく親心

武者一人叱られてゐる土用干

おさへればすゝきはなせばきりぎりす

我が頬を撫で撫で刷毛を借りて行き

初雪のたつた二尺は越後なり

屏風の詩聞けば主人も相識らず

あしたでも剃つてくれよと飛車がなり

よつぴいてひようと放さぬ案山子かな

追剝の案山子まではぐにはか雨

手の甲へ餅を受取る煤はらひ

煤はきの顔を洗へば知つた人

蜻蛉  
蜻蛉に同じい。

早太

源三位頼政の  
臣、鶴退治の  
猪早大。

源左衛門

論曲鉢の木  
の主人公佐野

源左衛門常世

白髪を云々

白髪三千丈縁  
愁如筒長。

釣れますか云々

文王と太公望  
呂尚との故事  
による

蜻蛉は石の地藏に髪を結ひ

本降になつて出て行く雨やどり

よう降るぢやないかと殿もお次まで

泣くくも善い方をとる形見わけ

名物を食ふが無筆の旅日記

居候三杯目にはそつと出し

その暗さ早太櫻につき當り

源左衛門鎧を著ると犬が吠え

見世物にしたい白髪を詩につくり

釣れますかなどと文王そばへより

孝行のしたい時分に親はなし

大水は器物にはしたがはず



# 狂

# 歌

狂歌即ち和歌の滑稽的なものは奈良朝時代からあつたのであるが、それが文學的地位を占めるやうになつたのは油煙齋貞柳の作品からである。貞柳(姓は永田、鯛屋といふ)は淨瑠璃作者として名高い紀海音の實兄で、享保十九年(三三九四)八十一歳で歿した。その門人栗柯亭木端・芥川貞佐等は更に之を振興した。天明年間江戸に流行して所謂天明調となり、四方赤良(蜀山人)・宿屋飯盛等の名家が出たので、狂歌の地位が益々進み、隆盛の機運に到達した。狂歌の特色は俗語を交へ専ら滑稽の想を歌ひ、又諷刺の意を寓する點にある。しかしその滑稽は大抵有名な古歌を轉換してあるか、或は地口に似たもので、僅にその著想の意外なのに笑はせるだけである。



讀人不知

この歌は後柏原天皇の永正五年(二六〇)正月の狂歌合に出ている。

ぬば玉の木の下闇の黒米も

讀人不知

つきいでてこそしらげそめけれ

鯛屋貞柳

散ればこそいとど櫻はめでたけれ

けれどもけれどもさうぢやけれども

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらす草臥れもせず

栗柯亭木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしては暮されもせず

水甕を隔てたやうな春の夜の

朧月夜にこそものぞなき

栗柯亭木端  
大阪の人、もと眞宗の僧、貞柳の門人。安永二年(三三三)歿。

春の夜の云々  
照りもせず曇りもはてぬ春

唐衣橘洲  
江戸の人、小島氏、田安家の小祿の士、初め内山椿軒に詩を學ぶ。享和二年(三三三)歿。

うつつて來る波の受太刀滿つ潮の  
さし心得て飛ぶ千鳥かな  
限なき君が齡やうらやまむ  
鶴は千年龜は萬年

唐衣橘洲

四方赤良

生酔の禮者を見れば大道を

横すぢかひに春は來にけり

郭公鳴きつるあとにあきれたる

後徳大寺の有明の顔

早蕨が握りこぶしをふりあげて

山の横つらはる風ぞふく

隅田川今は吾妻の都鳥

四方赤良  
徳川幕府の士、本名太田覃、南畝・蜀山人と號した。内山椿軒に漢學を學ぶ。狂歌天明調の第一人者。文政六年(二四八)歿。

郭公云々

郭公鳴きつる方をながむれば唯有明の月ぞ残れる。後徳大寺實定) 都鳥  
名にし負はゞいざこととは



む都鳥わが思ふ人はありやなしやと。(在原業平)

朱樂菅江 本名山崎景貫、幕府の先手與力、内山椿軒の門に漢學和歌を學ぶ。蜀山人に亞ぐ。天明の狂歌師。寛政十年(二盃)歿。

頭光 岸宇右衛門、蜀山人の門人。江戸の狂歌師。寛政八年(二盃)歿。

元李網 本名渡邊喜三郎、江戸京橋の湯屋の主人。晩年隅田川の邊に住む。文化八年(二盃)歿。

業平などは左五中將

霞さへ春さへけさはたつものを

餅はすはりの尻のおもたき

やれやれと潮のひるめしいそぐなり

青うなばらのへるにまかせて

よせぎれと見ゆる御寺の飾かな

どこもかしこもはぎだらけにて

郭公自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

田樂の木の芽に腹も春の野や

朱樂菅江

頭光

元李網

霞の帯をゆるめてぞ喰ふ

宿屋飯盛

螢とる數もひとふたみそこしに

よつゆもいつかむすびけるかな

世わたりの道に二つの追分や

たからの山に借金山

歌よみは下手こそよけれ天地の

動き出してはたまるものかは

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の絲にこそ

堪忍袋縫ふべかりけれ

宿屋飯盛 石川雅望といふ和學者で、六樹園と號し、たもと江戸小傳馬町の宿屋であつた。危禍に逢つて江戸を追よれば、新宿や靈岸島に住んでゐた。和學上の名著。注餘の言。集覽がある。文政十三年(二盃)歿。

天地の云々

力をも入れずして天地を動かす。かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。(古今集序)

鹿都部眞顔 江戸の人、北川氏、通稱嘉兵衛、初め戀川春町に從つて戯作を試みた。後、斯道人に就いて、斯道を究めて、文政十二年(二盃)歿。



## 國學史概説 (附擬古文の一瞥)

近古に於ける學藝は、公家と僧侶の専有であつた。而も個性に目覺めなかつた彼等は、學藝に於ては秘事秘傳を事とし、創作に於ては、その獨創性を失うて、徒に萎靡沈滞の空氣の中にうごめてゐた。近世の初頭に於いて徳川家康が、その政策として文教を奨励するに及び、久しく堂上僧侶の手に握られてゐた學問は、俗人の手に委せられ、新に儒者と稱する一階級を生ずるに至つた。これと同時に、古今傳授源氏傳授をはじめ、足利期の古説を唯一の眞理として信奉してゐた學藝は、やうやく公家の手から解放せられて、平民の手中に落ち、諸般の學術技藝は、蔚然として一時に勃興するに至つた。

かくてこの潑瀾たる生命が、輝かしい元祿時代を産み出したのである。近世に於ける學問の二大潮流は、いふまでもなく漢學と國學である。けれども、今はそれを詳説する餘裕を持たぬが故に、直ちに國學の勃興に筆を着け



ようと思ふ。

國學とは、佛學、漢學に對する名稱で、日本の古典を探究し、その古典の中に日本個有の精神を見出さうとする試で、或は之を復古學といふ。復古とは、古の素朴にして純真なる國民精神、及びその生活に復るといふ意味である。行きつまつた學風に對する不満が、古代への憧憬となり、更にそれを認識せんとする智的探究となつて現はれ出でたものは、僧契沖の學問で、そこに國學の萌芽を認めることが出来る。

契沖は、悉曇學の知識を提げて國語の研究に入り、水戸義公の命を受けて萬葉代匠記を完成した。かの歴史的假名遣を建設したのも、上代文學研究より來る當然の歸結であつた。

その研究的態度は上代の文献によつて、あくまでも客觀的批判的に進むことであつて、獨斷に馳せ主觀に偏することを許さないものであつた。

契沖の復古思想には、眞淵以後のごとく、國家的意識はたゞその萌芽を見る

のみで未だ外來思想の排斥にまでは至らなかつたのである。従つて未だ純粹の國學と稱することは出来ぬ。

契沖について、稻荷山の祠官荷田春滿が出た。夙に古學に志して國史國文律令有職故實に通じた。その國學校建設の爲に作られたといふ創學校啓文は、よしや後世の僞作なるにもせよ、傳授秘傳を主とする堂上家に交ることを屑とせず、學問は天下の大道なりといひ、倭にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かとは叫んでゐるあたり、以て彼の志を見るべきである。けれども、彼も亦和漢併せ學ぶべしといふに止つて、後の國學者のごとく極端なる排外主義を唱へたものではない。彼の事業は、契沖に及ばなかつたけれども、その門人として大きな加茂眞淵を持つたことは、國學校を創立するよりも偉大な効果を遺したのかも知れない。

眞淵は、三十八歳にして春滿に道を問ひ、師の志を繼いで古學建設の志を立てた。眞淵に至つて、契沖時代の古代に對する知的探究が更に一階を進めて、



その認識した古を思想生活乃至藝術表現の上に表さうとするに至つた。

當時、佛教はすでに中流以上の階級にその勢力を失ひ、漢學が之に代つた時代であるから、彼の攻撃の鋒先は主として漢學の方に向けられた。所謂國學者として、その主張を具體的に説いたものは、眞淵に始まると見るべきである。彼はいふ、皇國人は生れながらによき心を得てゐる、故にそれが純粹であつた上代においては、人心がすべて素直であつた。その證據には、國がよく治まり、國民が絶對的に皇室に服従してゐたではないか。教へずとも人の行が正しい、故に事々しく教を設け、道を説くことがない、道がないのではない、それが天地自然のまゝに存在してゐるので、人の行が知らず識らずそれになつたのである。之に反して、支那は人の悪い國である、それで聖人といふものが出て、道を作り、教を設け、所謂禮樂制度を定めた。それは故らに人間の作つたものであるから、天地自然の大道でない、小さくひねくれてゐて正しくない、王位が絶えず動搖して、易姓革命の是認せられてゐることが、何よりの證據である。

人の國を夷狄と卑めてゐるが、その夷狄がしばしば帝王となるのはどうしたことだ。國を治める道をむつかしく講じはするが、治つたためしは未だ嘗てないではないか。故に我が國でも支那の道が渡つて來てからは、上代の道が衰へて、皇室に服従しないものが現はれたのであるが、本來よい國であるから、古の道は絶えない、皇統の萬世一系であることが之を證して餘がある。

かくして、この古道を明める唯一の道は、よろしく漢文を以て記し、漢意を交へた書籍をすて、外來思想の影響のない敷島の道につくべきであるとして、萬葉研究に傾倒したのである。

四十二歳江戸に出てから、七十三で歿するまで、三十年間の江戸生活に於ける萬葉ぶりの主張と、裕かなる創作の天分から成つた詠歌と擬古文は、漢學界に於ける物徂徠の文辭とならんで一世を風靡するに至つた。門流中、村田春海、加藤千蔭、楫取魚彦等は、歌文に、建部綾足、平賀源内は、小説戯曲に、各々その才の向ふ所に趨いたのであるが、國學に於ては、斯界隨一の偉人本居宣長を擧げ



なければならぬ。

宣長は大體に於て眞淵の思想を繼承しながら、道は天地自然の道ではなくて、神の作つた道であるとした點に於て一轉した。そこに宗教的色彩が著しく目につく。けれども、その道がよし神によつて作られたにせよ、人には生れながらにその道が内在するといふのであるから、人間の方から見れば自然の大道といふのと、別に著しい相違はない。

彼によれば、我が古道といふものは、高御産日神の御靈によつて、伊邪那岐、伊邪那美の大神の始め給ひ、天照大神の受け傳へられた道であるから、之を神道といふ。その神道は古事記以下の古書を見れば明かであるのに、世々の學者が、漢ぶみに惑ひ、儒佛の見を主として考察するが故に、眞の神道を覺ることが出来ないものであるといふのである。

こゝにいふ神は皇祖神であり、その御子孫が萬世一系の皇室であらせられるから、此の神の道は即ち天皇の天下を統御される道で、その統御の道を體得

して之に従順であるのが、いつの世に於ても國民の遵守すべき道であるとする所に、道の政治的意義が現はれてゐる。

かくして彼は、聖人を目して人の國を奪つて奪ひかへされぬ用心の爲に道を作つた人間だと罵り、儒教の天命説を否定し、更に唯一兩部など神儒佛混淆の神道を痛撃した。宣長の祖國觀は、支那、印度を對立的に見た眞淵に一步を進めて、我が國は世界を照す日、即ち天照大神の御生國であり、その御裔である天皇の支配せられる國であるから、世界の本國であり、宗國であつて、他の諸國は之に従屬すべきものであると論じて居る。

三十五年の心血の結晶古事記傳の完成を告げて京都に上つた時、公家縉紳争うてその門に集つたことは、學問の中心が全く庶民の手に落ちたことを證するもので、國學の興隆は正にその頂點に達したといふべきである。

その説、愛國の熱情に馳せて、多少の獨斷偏見は免れないけれども、論斷多くは古代の文献により、考證あり、根據あり、神代以來の國風國俗を以て道を立て



て、直に儒教に代らんとする意氣が窺はれて、眼中また儒學者なしである。儒教が上下を風靡し、漢學が唯一の學問と見做された時代に於て、まことに努めたりと謂ふべきである。

宣長歿後の門人である平田篤胤に至つては、一種の神道を樹立し、古來の碩學高僧が一人も非議したことなき釋迦も孔子も悉く罵倒し去つて眼色なからしめた。

その神を説き古道を述べて居る點は、ほゞその師、宣長を繼承したものであるが、和蘭學を利用し、地動説を運用して居る點、殊にその排外的自尊主義、極端なる他教排斥主義であるところに特色がある。

かくの如きは、むしろ上古以來儒佛の影響を受けて發達し來つた文化を無視するやうであるけれども、海外諸國が頻りに我が邊海を覗ふといふ時勢の切迫が、尊皇愛國の精神を感發せしめた結果であると見做さなければならぬ。

徳川末期は、儒教を中心として尊皇論を唱へるものも、神道を主張して愛國

論を唱へるものも、皆時勢の刺戟によつて激越の調子を帯び來り、漢學者と國學者とは遂に相呼應して倒幕の氣運を促し、明治維新の大革新を見るに至つたのである。

思ふに、徳川氏が自己を永久ならしめる爲に獎勵した文教の力は、遂に自己を顛覆せしめる原動力と化し、殊に親藩中の親藩たる水戸家とその發頭人たるに至つては、まことに痛烈なる皮肉であるといへ、亦天意の然らしめた所であらう。

右は只國學の本流に従つて大體の輪廓を描いたに止る。以下少しく國學者の文章について一瞥を興へて筆を結ばうと思ふ。

國學者の文章は、純粹の國語、即ち上古もしくは中古の語彙を用ひ、古文を模範として作爲するのである。之を稱して雅文といひ、擬古文といふ。

加茂真淵は、ほゞ奈良朝を標準として、雅文および和歌を創作した。彼は學者と稱するよりもむしろ創作作家であつたために、その門人には能文の作家が



多く輩出した。就中、村田春海、橘千蔭が最も聞えてゐる。本居宣長も達意の文をもものして真似られぬ趣があるが、美文はその門に學んだ藤井高尙がすぐれてゐる。また伴蒿、蹊中島廣足なども巧みに古語を使役し得た人たちである。その他、苟も國學者を以て任じてゐた者は、律令法制の専門家たるも、言語文字の學者たるもに論なく、必ず和歌を詠じ雅文を綴ること、恰も儒學者の一通りは漢文漢詩を弄んだと同様であつた。

眞淵以後の雅文家は、大抵中古文を標準としたもので、源氏物語枕草子はその規範であつたが、修辭法に於ては漢文に負ふところも少くはなく、纏りのよい小品文の一體を作ること成功した。漢語漢文は排しながら、その題目のごときも、記といひ、序といひ、彼の體に學んだもので、丁度萬葉時代に詠歌の題目を、詩文のそれに倣つたと相似てゐる。

しかし模倣は到底模倣であつて、それに潑刺たる生命を盛ることは固より望むことの出来る筈もないが、古代の乏しい語彙を以て、文化の程度に著しい

相違のある近代の複雑な事象を、あれまでに書きこなすことは、容易な努力では無かつたであらう。今日にあつては勿論學ぶべきものではないが、當時旺盛を極めた國粹主義の發露として注目すべき文體である。



昭和二十二年十二月十七日  
 文部省檢定濟  
 中學國語科用

昭和二十二年六月廿五日 印刷  
 昭和二十二年七月一日 發行  
 昭和二十二年十二月十日 訂正再版印刷  
 昭和二十二年十二月十五日 訂正再版發行



編纂者 吉澤義則  
 發行者兼印刷者 星野敬一

京都市上京區丸太町通堀川西入  
 西丸太町百七十一番地

歷代國文學新選

卷數	定價	昭和臨時定價
卷一	金四拾四錢	金七拾八錢
卷二	金四拾八錢	金八拾參錢
卷三	金四拾八錢	金七拾八錢
卷四	金五拾六錢	金八拾參錢
卷五	金五拾六錢	金八拾參錢

發行所

京都市上京區丸太町通堀川西入  
 電話西陣(三〇三三五番)  
 振替貯金口座大阪四九九一

星野書店



中華民國二十二年十二月  
 新書館發行  
 中華民國二十二年

第一卷  
 第一號  
 第一頁



新書館

新書館發行  
 中華民國二十二年

新書館

新書館

第一卷	第一號	第一頁
第二卷	第二號	第二頁
第三卷	第三號	第三頁
第四卷	第四號	第四頁
第五卷	第五號	第五頁
第六卷	第六號	第六頁
第七卷	第七號	第七頁
第八卷	第八號	第八頁
第九卷	第九號	第九頁
第十卷	第十號	第十頁

新書館  
 發行  
 中華民國二十二年



